

真為清



冬



會友：校學女等立市道尾

眞玉第三號目次

○口 繪

○第五回卒業生

○本校及寄宿舎

○教室

○學校彙報

○學校日誌摘錄

○身體檢査成績

○訓 諭

○生徒と卒業生とへ

杉野三治郎

○御大典奉祝記事

○朝會訓話抄

○思 潮

○疑 惑

杉野三治郎

○文藝部だより

○運動部だより

○役員

○鈍 刀 録

三宅

○同窓會報

○第六回第七回總會

○雁のつて

○料理の話

阪本花

○明治時代の小説と女子教育

磐 洲代素郎

○文 苑

○水夫の歌

阪本花

○悼下瀬君

三宅素

○笑話三則

阪本花

○私のこのころ

石川みね

○思ひ出より

村上しづみ

○金城下より

上村春野

○口語詩及和歌

村上しづみ

○旅行記

（京都へ――京の夜――二
所くれば――京の夜――二）

みづ

○會計報告

○同窓會々計報告

○小品文

○普通文

○附 録

○同窓會員名簿

○夏季休業日誌

○冬季休業日誌

○附 録

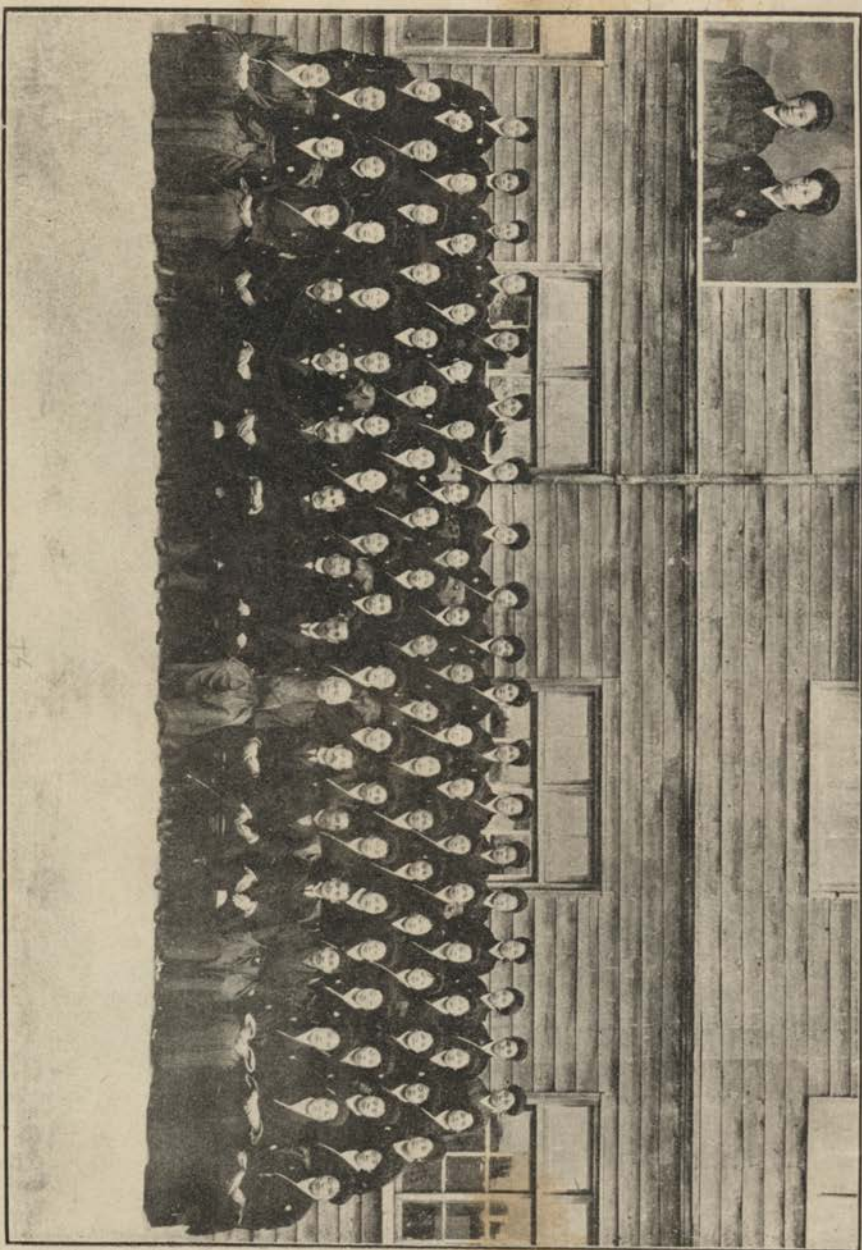
○同窓會員名簿

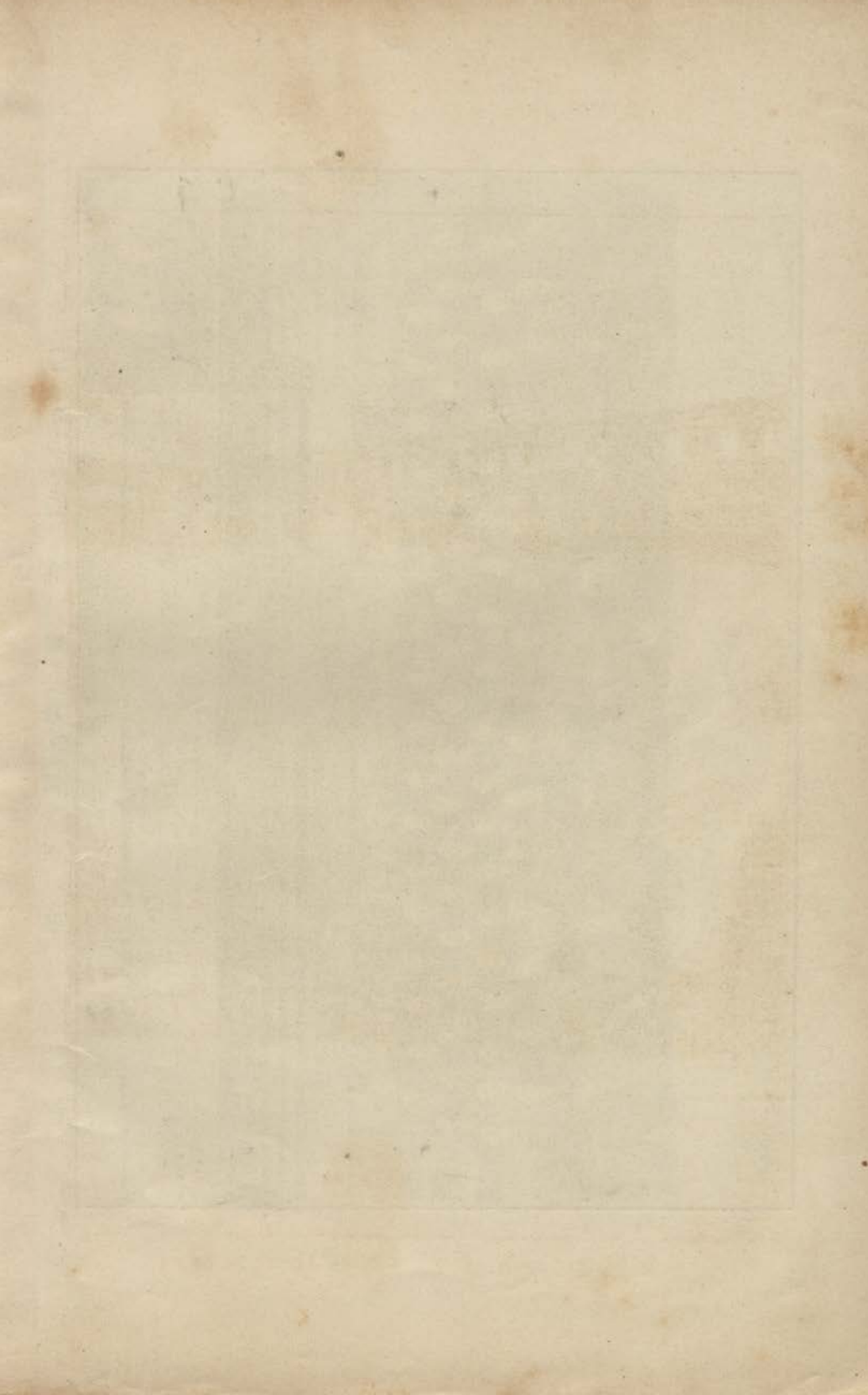
○競點地理

○冬季休業日誌

○附 録

○同窓會員名簿



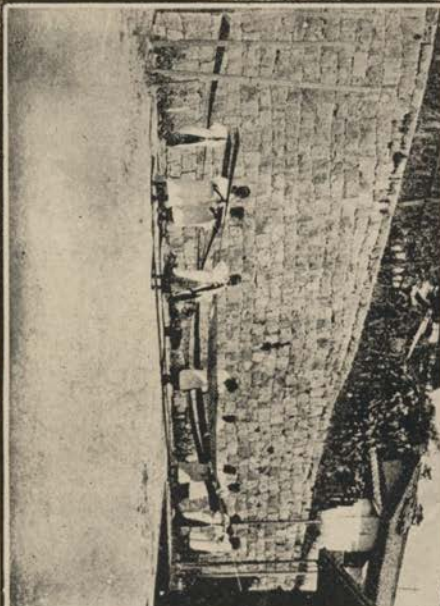
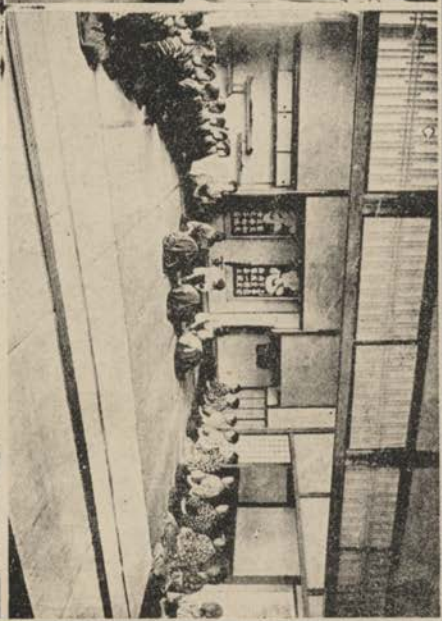


北 上 4 甲 2 甲 22
 下 4 乙
 6 個 3 甲 32 1 甲 12
 下



舍 宿 寄【下】 舍 校 本【上】

第二學年作法 第一學年理科 第四學年裁縫 第三學年家事實習



眞たは 第三號



訓諭

生徒と卒業生に 杉野三治郎

余本校に職を奉すること既に三年徒に歲月を重ねし
のみにて何等著しき効果を示さず。之れ非才の然ら
しむる所にして慚愧に堪へざるなり。されど幸ひ部
下に忠實の教職員あり。常に余の非才を補ふて余か
企圖の遂行に努め。數百の生徒は校訓を尊重して毫
も背戾の色なく。師弟の間和氣霽々。意志相通して
團結彌々堅く情義益々敦厚を加ふ。師は教へて其勞
苦を忘れ。弟は學ひて自ら其業を樂み。父兄は子女
を託して心常に平かなり。かくて社會の信用倍々加
はり。校運茲に挽回して。本校發展の基礎漸く鞏固
を成すに至れり。基礎既に成れば吾人は尙將來の大
成を期せざるべからず。最後の効を収むるや至難の

業にて一に諸子が一層の奮勵と努力とに待たざるべ
からず。あらゆる萬難を排し苦闘を續け。千挫屈せ
す万折撓まず。各々心を一にして専念業を勵み。己
か地位を尊重して毫も陋劣に陥らず。着々内容の堅
實を圖らは社會の信用外界の援助は期せずして待つ
べきなり。劣めざるべからず。終りに望み卒業生諸
子に告ぐ諸子よ。諸子は母校の成績を直接社會に感
知せしむる機關なり。諸子の一舉一動は皆母校の成
績なり。諸子か活社會に於ける奮闘的活動の効果は
實に母校最後の聲價を定め興隆荒廢の素因をなすも
のなり。諸子よ。希くは愛校的精神の下に。あらゆる
方面に於て諸子が最善の美を飾れ。



思潮

疑惑

杉野三治郎



俚諺に蟹は甲に似せて穴を掘ると云へば人も柄相應の仕事より以上は出来るものにあらず。小蛇の蛟龍を願ひ驢馬の驢驥を窺ふあらば其望み大に過ぎて遂に狂妄の誹を免れざるべし。人は大凡運命の定まり居るものなれども俗界を超越したる非凡の賢哲か然らずば遁世的隱士の外は大抵慢心のあるものにて鈍根淺機の凡夫は云ふに及ばず少々は世に名の知れたるものにて尚且つ名利に汲々として懊惱煩悶輾轉反側して己まざるものなり。殊に智慮既に熟し才器漸く成り一度社會の濁流に漂ひて甘酸辛苦を味ひし青年然も多く是れか煩惱の苦界を脱せず。外に誠を飾り内に虚偽を逞しうし智慮思索のあらん限りを盡して或は富貴に媚び或は權門に阿りて徒に自己の人格を無視して地位是れ生命生命是れ地位の不見識に

陷るもの鮮なからず。名を大義に籍りて兩黨をなし口に名分を唱へて天下の政治を亂る。好んで他人の失點をあばいて強ひて排擠に努め濫りに他人の地位を奪ひて然も得々たり。天地の道人心の義今や益々陰雲に掩はれ廢頽殊に甚たしく偶々道を説き義を唱ふるものもあるも多くは俗徒の濁説に押し流され狂人視さるゝにあらざれば徹遠主義の下に祭りこまるゝ事多し。旭陽一度昇りて衆星光を失ひ雲霞散して天地茲に開明する如き大偉人の出現を見ざるは痛嘆に堪へざるなり。末法惡濁の世到底大聖を望むべからざるも道を守り義を立つるの士之を何處にか求めん點々散在するか果た一小地域に群集するか此等正義の士多くは凡庸の間に伍して他を動かす力なく辛うして己か道を守るに過ぎず。上之を見るの明なく下是れに與するの士なし。さながら芷蘭の衆草と伍をなし賢者の時に逢はざして鄙夫と倫を爲すの嘆あり孔子の聖を以てすら諸侯能く之を任する莫く衛より魯に反るにあらずや。妖雲の明月を掩ひ狂風の花を散らす習君子も常に順境にのみは居り難し。古今を通し東西を問はず社會の紛糾時勢の錯綜果して斯くの如くんば吾人は大に世の清濁を辨するに苦しむも

のなり。濁は必ずしも濁にあらず清は必ずしも清にあらず紛糾錯綜は時代に伴ふ必要條件にして道義は自ら其内に存すべきか。吾人凡庸の輩社會の錯難絶頂に達せし今日已か理想を實現せんには如何にして處世の道を選ぶべき。世潮の濁流に游泳して其目的を達すべきか果たこれに超越して到るべきか。今日の社會は頗る極端に馳せて毫も折衷を許さざるものゝ如し。凡俗主義は人格を汚し超然主義は消極陰鬱に陥る恐あり。世の識者は大に此疑惑に覺醒と警告とを與へ徒らに口先の眞理を弄せず實着に温健に之れか大方針を示さるべからず。然らざれば國家將來の發展を如何せん

鈍 刀 錄

三 宅 素

私は多忙ながら今度は思潮欄の方は御免蒙らうと思つた。けれども此の間も龜山僧正の結構な御講話によつて多大の感銘を受けたに就いて。ごうも黙まつて居られないやうな氣がしてならぬ。そこで快刀を振つて亂麻をたつことは出来なくとも。せめては鈍刀を振つてあなた方のまよいの片端なりとも斬り開

いて見ようと重い筆を取つて見た。

私は私の考をあなた方に了解させる爲めにはあなた方を山の上へ連れて行かねばならぬ。今高い山の上に登つた。そして遙かに下界を見下ろしてゐると想像して御覽なさい。すべての物が哀れに小さく見えるではないか。汽車は百足蟲のやうに。馬は一寸程に。そして人間は豆のやうに！

こんな時私共の心持はゆつたりと大きくなつて憎みとか恐れとか嫉みとか云ふ感情は露ほどもなく萬物皆いぢらしく愛らしいものに考へられる。遙かなく下界にウヨ々々と蠢いてゐる小さな人間！男であらうが女であらうが、強からうが弱からうが、賢こからうが愚だらうが、高いく所から見下ろしてゐる私共の目にそれが何であらうぞ！等しく是れ迷へる小羊のやうなものだ。神佛が一切の衆生を大慈悲の眼で視て之を憐み。誓ひの網に洩れいやうに救ふてやらうと思つて下さるといふ心持は即ちこんなものではないですか。佛教の大慈悲。基督教の愛は此の心持ちを絶対に推し擴めたものだと謂へないでせうか。此の心持には差別はありません不平等はありません。誰が憎い誰が可愛いといふことはあ

りません。親は不孝な子程可愛いと云ふではありません。せんか。親が子に對する心持は神佛が一切衆生に對する心持と同じです。

さあ、降りませう。あなたは私が茲に居るのを忘れて居たでせう。私は今あなた方と校庭に立つて居ます。私は男です。あなた方は女です。私は先生です。あなた方は生徒です。山の上から見た時とは違つて馬は四足で人間より力が強い。けれども智慧は餘程劣つてゐる。一切平等に見えた人々の間に色々の關係があります。大は君臣の關係から、親子主従、兄弟夫婦朋友貸借の關係隣の人に遠方の人、同國人と外國人、貧富と貴賤、曰く何曰く何随分複雑な關係になつてゐます。一体之は偽りでせうか。いいえ！火を賭るよりも明かな現在の事實です。金を借りて後と、借らない以前と同じですか。親に撫で育てられた從來の關係はない昔とあきらめられますか。龜山僧正は十二の歳から師匠に育てられ教育せられた現實の事實を奇麗に帖消しにして平等だ自由だ云へますか。恐れ多い事ですが數千年の昔から大御實と撫で慈しんで下さつた

皇室と人民との關係がどうして有つたも無かつた

も同様なりと考へられますか。

私は大きな聲を張り上げて云ひます。無差別の考と差別の考とは何れも眞理であり、何れも捨てゝはならないと。ううするど一見相反せる二の考をどうして一の身に體現する事が出来るかといふ疑問が當然起らなければならない。

敎語に『克く忠に克く孝に』『兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ』と仰せられた徳は差別觀から來る道德です。私共は特別關係のある間柄の人に對して赤の他人と全く同様に考へることは出来ぬ。故に自ら大小輕重の差別が生ずるは明かであります。又財

産地位知能の劣つてゐるものを憐れな者よと情をかける社會の爲につくす。是皆無差別觀から來る道德です。敎語に『博愛衆に及ばし公益を廣め世務を開き』と仰せられたのは是です。乃ち二方面の徳を一身に兼ね備へると云ふことは矛盾でない却て片一方だけで御免蒙むるといふ事が意味をなさぬことです。あの人は孝行だが他人には不親切だといふやうな人は想像が出来ませぬ。

最後に私は差別觀に偏したる弊害（東洋に多し）と無差別觀に偏した弊害（西洋に多し）とを擧げて

皆様の熟考を要求する。

○一差別観に偏したる弊害（尊敬、服従を力説して愛を閑却するから）

○長上が目下を愛し教へ導く心持に足らぬ所あり。
（是れは諸子が目下に對して注意すべきことでは長上に對して要求すべきことではない）

○官尊民卑の風（大分なくなつた）

○女子を責めすぎる（大分なくなつた、女大學の七去の中に随分だと思ふことがある）

○二無差別観に偏したる弊害（愛平等を高潮して尊敬服従の美德を閑却す）

○個人主義（個人の利益自由を先にするから國家のためにばたらくさうふ考うすし、英國の愛蘭問題徴兵問題）

○婦人參政權問題（或る程度までは理屈があるが男と女が全く同じになるさういふことは社會の缺陷を生ずる）

婦人の權利を害してゐることはいけないが無差別では又いけない。例へば茶碗と箸と貴賤の別はないが同じではない茶碗ばかりもいけぬ箸ばかりでもないけぬ。両方の働きがちがつてゐるのが相待つて始めて役立つのであるのと同様だ

○社會主義 地上の差別關係を無視しやうといふのである。義理も人情も行きがうりも歴史も賢愚智不肖悉く平等といふ考で大間違の骨頂だ

但しこんな考は今殆どなくなつて財産地位智能の劣つてゐるものを憐んで是等を國家や社會の力で幸福にしようといふやうにおだやかな考にはなりつゝ

ある

まだ色々問題もあり又説明もしたいが、紙數も多く

なるし。夜も更けましたから筆をおきます

要するに一は理想一は實際です。私共はどちらを等閑にしてもいけない。私共は愛と敬との調和によつて地上に天國を築かうと努めなければならぬ。

御料理の話

阪本花代

米國の一友人から送つてくれました婦人雜誌の中においし相なお料理の數々が載せてありましたから、家庭に居られる皆様のお助けにもさ少し許り御紹介申上げます。恰度夏の季にはあはれないものもございますが、其の折りぐに遊ばせば宜いのでせう。

ライス アンド エッグス

（御飯と卵）

おひや御飯

卵

バター

冷水

細くきざみしパスリー

一合

四個

茶匙一杯

大匙四杯

大匙一杯

鹽

茶匙半分

フライ鍋にバターを入れ、火にかけて、融けし時御飯の中に入れ、御飯の全く温くなるまでかきませ。

井に卵をわり水を加へ、よく混じるまでうち、鹽

を加へ、御飯の上にかけて、卵の固まるまでよくかき

ませ、バスリー又は葱のきびみしものをかけ、

温めし鉢に入れて出す。すりし玉葱を少し加ふるも

よし。

デヂー エッグス

(雛菊卵)

卵

六 個

圓く切り一寸焼きしパン六 個

牛乳

五 勺

鹽と胡椒

茶匙半分

パンを一寸焼き、バターを付け、オヴン(天火)の

中で温めてもわれない様な鉢に入れ、牛乳をかけて

浸す。

卵をわり、黄味を小皿に残し、白味ばかりふわふ

わするまでうち、前のパンの上に載せ匙もてくぼみ

を作り、其の各々のくぼみに黄味を入れ、卵が固ま

るか、又は焼けるまで(皆様のお好み次第)あつい

オヴンに二三分間入れて置き、其れより出して胡椒

と鹽とをふりかけて出す。

コーラル エッグス

(珊瑚卵)

トロ／＼に煮たトマトー

一 合

卵

三 個

鹽

茶匙半杯

砂糖

茶匙一杯

胡椒

少量

バスリー

茶匙一杯

擦りし玉葱

茶匙一杯

火にかけしスーグ鍋の中にドロ／＼にたきし、ト

マトーを入れ味をつけ。

卵の黄白のよく混するまでうち、トマトーの中に

入れ固るまでよくかきませ、四切れの圓く切つた焼

きパンの上に載せて出す。

ベークト エッグス イン ライス

ウイズ トマトソース

(トマトソースとお米と卵の料理)

米

一 合

トマトソース

一 合

卵

四 個

鹽

茶匙二杯

米を洗ひてたき。茶匙一杯の鹽をふりかけ深い皿に入れ。匙の背にてくぼみを作り。其の各の中に卵を一つづゝ入れ。鹽と胡椒をふりかけ。五分間天火の中に入れ。出して一寸動かし。トマトソースを上にかけて出す。

ライス オメレット

〔御飯のオムレツ〕

御飯 一合

焼肉の脂汁〔滴りし物〕 大匙一杯

きざみし玉葱 大匙三杯

卵 三個

鹽と胡椒 茶匙半杯

焼肉の脂汁をフライ鍋に入れ。玉をいつもかきまぜながら。こがさぬ様軟くなるまでいため。御飯を其の中に入れて温む。

卵をわり。大匙三杯の冷水を加へ。ふわ／＼するまでよくうち。鹽と胡椒を加へ。温められし御飯の上にかけて。よく鍋をふり。御飯の下によく入る様に端を少し上げて。卵を入れ。固まりし時。きざみしバスリーをふりかけてたみ。熱い皿に入れて出す。

エッグス アンド マツシユルーム

卵と松茸

松茸〔きざみしもの〕

卵 一合

バター 大匙二杯

メリケン粉 大匙二杯

牛乳 一合

鹽 茶匙一杯

白胡椒 茶匙四分の一

圓くきりし焼きパン 四切れ

キャラメル 大匙一杯

〔砂糖を煮て作りしドロ／＼せる汁〕

クリーム ソースを用意し。松茸をきざみて加へ。十五分間トロ火にてたき。鹽と胡椒キャラメルを加へ。これ即ち松茸ソースを焼きパンの上にのせ。各切れに卵を一個づゝ置き。六分間熱い天火の中に入れ。何か青い物バスリーなどをあしらつて出す。

ヂエリー オメレット

卵 二個

鹽と白胡椒 茶匙八分の一

牛乳 大匙二杯

バター 茶匙一杯

ジェリー（果物を砂糖にて煮つめし汁）茶匙數杯
卵の黃白を分け白味固くなるまでうち、黃味をよ
くうち牛乳や藥味を加へ、黃味白味をませ、鍋にバ
ターをしきし中に入れ、どろ火にて焼き、可なり焼
けし時上の乾く様に熱い蓋をなし、上の乾きし時片
側にてデエリーを入れ、たぐみて皿に入れて出す。

クリーム ソースの製法

牛 乳

一合五勺

バター

大匙（すり切）一杯

メリケン粉

大匙（すり切）一杯

塩

小匙四分の一

バターをフライ鍋にて大かたとけるまで火にかけ
之れをおろしてメリケン粉及び塩を加へてねり、之
れに牛乳を入れてねり火にかけ始終かき廻しながら
どろ／＼になるまで煮て塩のかげんを試む。

若しあまり堅過ぎる時は牛乳又は湯にて適度にゆ
るめていただく。

クリーム ソースの材料分量は右のにててもよし。
また卵と松茸どのお料理の時のにててもよし。



明治時代の小説と女子教育

ばんしう

一時百花爛漫の域に達せる江戸時代の文藝も、一たび維新の颶風に遇ひて落花狼藉亦收拾すべからざる悲運に際會せり。此時に當りて萎みながらも僅に芳香を放てる者を假名垣魯文河竹黙阿彌とす。魯文西洋膝栗毛を著し西洋文明國の世相を描出し、河竹は獨り脚本界に聲譽を恣にせり。其他張三李四の文人輩擧ぐるに足るもの少なからされども、江戸文學をいや下様に引き下せる成島柳北が一代に重きをなしたるを思へば他は言はずして可なり。

ついで三田に義塾を起せる福澤氏の世界國づくし西洋事情等を出し、中村正直の西國立志編西洋品行論等を公にしたる外特に記すべきもなし。

西南の役以來、板垣氏一派の自由民權を標榜してより、時人が憧憬の的となりたるものは、佛國の革命時代なりき。渠等が理想的人物ごしいへばルッソーさらずばモンテスキ なりければ、矢野龍溪の經國美談東海散史の佳人奇遇、末廣鉄腸の雪中梅等の政治小説續出せり。

ついで明治十二年頃に至りては、西洋小説の翻譯盛行はる。花柳新話はうの急先鋒にして譯者を織田純一郎とす。これより『リットン、ユーゴー』など頻に傳へらるゝと雖も、當時蠢々たる翻譯家がおぼつかなくも文字を通りて原作に存する滋味の大半を失ひ著者を辱しめて恬然たるもの比々皆然りき。

明治二十年代は新文學勃興の時代なり。坪内逍遙が奮然蹶起自ら文藝界の木鐸を以て任じつゝ、大旗一竿、小説神髓を眞向に押し翳し膽甲斐なき文壇を一掃せんと進み出でたるも此時代なり、其主張する所藝術が實用の奴隸たるべきものにあらすして、身体を目的として特立獨歩すべきを唱へ、政治の關係は勿論、馬琴一派の勸懲主義をも排し、作家は有りのまゝなる客觀的寫實によりて神妙の域に入るべきを絶叫せり。此主張の下に、當世書生氣質妹背鏡細君等の著あり。ついで長谷川二葉亭の浮雲、紅葉の色懺悔露伴の風流佛、五重塔、森鷗外の舞姫うたかたの記等の著皆一世の耳目を聳動せり。此他美妙筆村綠雨亦名ありき。

明治二十七八年の日清戰爭前古未曾有の大難にしてその初めや勝敗の決未だ何れにありとも信じ難かり

しかば、諸般の事業はすべて頓挫の姿なりき。されど一旦勝算立ちてよりは反動の活氣を生じ二十六年の交一たび廢刊の止むなきに至りし雜誌の復興するあり。新に興るもの更に多く新進作家の名を傳ふるもの少しとせせ。従つてこれ等諸家の製作物たる小説の内容も亦變れり。即ち人情の曲折を映射せしむる心理的描寫の傾向は從來とても認めざるにあらざりしかど、それが如何にも淺々しく甘たるき情事のみなりしを以て新社會の思潮と相容るべきにあらず是はおいてか轉じて社會の暗黒面に筆をつけ、觀察は走つて日進月歩の競争場裡に敗地せし人々の悲惨の境遇に及び、或は肉體的或は精神的なる不具者の上に及びし、所謂心理小説若しくは悲惨小説と稱する新主張興れり。まづこの新傾向を代表せるものは廣瀬柳浪泉鏡花等にして既に志成の域に達せる紅葉もこれ等に刺激せられて多情多恨を出せり。この作や、場中の人物多からず事件の變化も極めて少れども、微妙なる人情の推移を寫して餘す所なし。その口語体も圓熟して廣く世の文範となれり。次に金色夜叉を著し失戀の極、貪婪無殘の高利貸となれる青年を主人公として最も深刻の趣致を極めたり。つい

て新進作家小杉天外小栗風葉等出づるに及んで、創作の風尚も批評の傾向と相並んで進歩し、寫實主義自然主義を鼓吹するに至れり。其主張する所小説は實世間の人物を有りのまゝに緻密に筆寫されば則ち足るといふにありき。顧れば明治二十年代の小説はその以前に比して頗る進境ありきと雖も尙習慣に拘り歴史に執して直下に現在の社會に觸れず、固より人物も舞台も材を現在の社會に取りたりと雖も、なほ日に／＼公衆の注意より遠さかり行く賤妓蕩子を寫すもの多かりしなり。然るに今や躍進一番、世人が一般に痛切に感じ來れる社會の動搖、新旧思想の衝突に基づける家庭の波瀾等に向つて觀察の目を鋭くするに至れり。故に是等の諸現象に最も關係深き女子教育は急速に進歩發達し、高等女學校女子職業學校等の設立頻々として起り、女學生は新に社會の一勢力の如くなりたればこの新現象も亦自ら作物の上に現れざるを得ず。是等二氏を中心とせる幾多文士の作風を見れば思ひ半に過ぎん。

明治の晩年に至りては小説は際立ちて目ざましき發達をなし、現代社會の流行物たるは言ふまでもなく明治文學の粹も亦實に此にあるが如く、一時新体詩

俳句等に名を得たるものも轉じて此方面に筆を染むるに至れり。當時作家の稱すべきもの夏目漱石國木田獨歩を舉ぐべし。漱石は英文の造詣深く且つ俳句にも堪能にして、滑稽風刺の文より漸く嚴肅の域に達し、一作は一作より面目を改め、冲澹洒脫の筆を揮へり獨歩は迂餘曲折の詞華能く現在の思想に觸れ露骨に人間の性情を描きて讀者の眼前に社會の縮寫圖を展開すると共に、人生の秘密の一部を掴み得たる感あらしむ。是等の文士文壇に名を得てより之に倣ふもの多く、大膽自由の描寫を試みいはゆる自然主義の世となれり斯くて明治の世は逝けり。





文苑

水夫の歌

(これは米國の十三歳の少女の作つたものです)

一、オー海よ、海よ、

藍色の清き大波持てる海は我が居處なり。波の岸邊に打ち寄する時、我れは其の吼え咆る音を愛す其の危険は我れにとりて喜びなり。

二、オー我れは波を愛す。

我れは廣き海洋にて屢々非運にあひ、介殼や珊瑚の墓に最後の眠りをむさぼる、勇しき水夫を愛す三、夜に入れば、優しく輝く月は泡立つ波の上に愛らしく笑み、

遙にきらめく多くの星は、水の枕より昇りしと見ゆ。

四、きらめく眞晝に、廣茫たる大洋は美しく輝き、

朝の初光に、生命と運動に満てる海こそ、華々しき景色なれ。

五、暴風の荒れ狂ふ大洋を掃き蕩ひ、怒れる大波の漲る時、

この争闘は、えもいへぬ思想を豊富ならしむれど我れはそれを物ともせず。

六、人生の航海終り、惱み多き大海の航海を終る時愛の港に、平和に、水夫の憩はんことを。

村の鍛冶屋

ロングフェロー

一、枝の生ひ繁る栗の木蔭に村の鍛冶屋は立てり。

彼れは筋骨逞しき力ある人なり。

屈強なる筋力は鐵の紐の如く強し。

二、髪は黒く長く、波立てるちどれ毛にて、顔は皮の如く日に焦けたり。

出来るだけかせぐ彼れの額には、正實の賜物の汗濕ひ、

誰れ人にも情蒙らぬ彼れは、臆面もなく人生を辿り行く、

三、いづれの週も朝より夕まで彼れの風櫃フイゴの吹くを聞き、

夕陽の没する頃、村の鐘鳴らす寺男の如く靜に、定まれる調子もて、重き大鎚ハンマー揮り動かすを聞く。

四、學校歸りの子等は戸口にたゞせみ、

こなし場のみがらの如く飛ぶ、燃ゆる火花を追ひ、

風櫃の音を聞き、火力盛なる鍛冶場を見るを好む

ひ、

五、聖日、鍛冶屋は教會に行き、子供の間に席を占め、

教師の祈禱、説教を聴き、村の唱歌隊にて歌ふ娘の聲を聞く。

これぞ彼れの心の喜となる。

六、此の歌聲は今天國にて歌ひ居る亡き母の如く彼れに響き、

墓場に如何に眠れるかと再び母を思ひ出づる事ならむ。

七、勞働——歡喜——悲哀もて、彼れは生涯進み行く。

毎朝或る仕事をはじめ、毎晩それを終り、かく果されし仕事、又時には果さで終ることも、終日の働は夜の眠を與ふ。

八、貴き女よ。汝の與へし教訓に對して感謝す。

かくの如く人生の燃ゆる鍛冶場にて、吾人の運命

も鍛へられざるべからむ。

熱烈なる行爲、思想と、鳴り響く鐵床にて造らるるなり。

莖

ジニン、テラー

一、緑の陰多き花の床に謙遜なる莖は生ひ立てり。

見らるゝ事を避けてか、莖は曲り頭を垂れたり。

二、輝ける色もなく、美しと云ふにはあらねど、愛らしき花なり。

此處に隠るゝよりも、薔薇の床を飾りし方佳ならん。

三、されどおとなしき装ひして咲くも満足し、静けき蔭に芳しき香を散らせり。

四、さらば、我れも亦優しき謙遜の中に生ひ立つ事を學ばん爲め、

此の可愛らしき花を見んと谷間に行かしめよ。

ローレナが帽子を買ふ時

ローレナが帽子、着物、すべてうんな物を買ふ前には、

あちら、こちらと鏡を採し、

念を入れて眺め入り、

どこから見てもよく似合ふか如何か研究して貰はふと、一二の友人まで呼んで参ります。

然し此の娘は何か云はふとし、又は爲さふとする時、

心の鏡の前でふさはしきかと、

あちらからも、こちらからも、前から、後からも各方面から研究するかどうかと、今日私は怪しんで居りました。

笑話三則

ばんしう

○智慧伊豆守

松平伊豆守の臣下に某代官あり其領民の名主に小材子ありて屢々代官を苦しめり或時左の一封を捧げ出せり代官又かと聞き見れば

一々申上候、二がくしく候へ共、三さんの、

四あはせにて、五穀、六々に登らせ、七をおくやら、八ちをかくやら、九はずに暮す、十年の

困窮

代官が返事に苦み伊豆守の許に伺候し其文を示し

ぬ伊豆守直下に筆を取りて認む

十分に豐作をしながら、九は屯に暮すなどとは心得違ひ、八ちを恥とも思はず、七をおくものには、六なものはない、五公儀の掟を以て、四ざいごは申しながら、三代將軍のお情を以て、二度とは許さぬが、一度は許して遣す、

○洒落の連發

甲「一寸御尋ね致します

乙「七日『何かの洒落』八日『用か』

甲「惠美須講は何時ですか

乙「九日『この土地のかの意』十日です

○鮎と鯛

鮎は鯛の保証にて鯛より金若干を借り受けぬ、期日に至り鮎は淡水に潮り返濱の義務を果たさず、鯛は保証の鯛に迫る鯛曰く

鮎「相、鮎の洒落」鯛「對」の貸借は鯛「己れ、自分」はかまはん



思ひ出より

村上 下 枝

晝

碧いミルクを注いだ様な空には、絶えぬ雲雀が囀つて居る。

さんざんテニスに遊び疲れた私達は、云ひ合せた様に若草萌ゆる芝生に座した。額が心地よく汗ばんで耳朶があつい。誰も無言。音楽室からかすかに花の間を流れて来るピアノの音が、たまらなく懐かしい静かな午後。いつまでもじつと斯うして眼をつぶつて居たい様な氣がする。黄な蝶が一つ、夢の様に櫻の梢を舞つて居る。街の方から、順禮の哀つぽい鈴の音と歌の一節が、眠むさうに響く。二人連のさすらひ人？ 今宵の宿は何處であらう。どろける様な春の日光にひたりながら、こんな事を思つて、いつまでも彼等の幻を追つて居た。

風薫る頃

緑の風が心地よく袂を拂ふ此頃。長いお晝の休みを涼しいアカシアの木陰に集まつた誰彼。甘い物なつかしい香が鼻をついて、サラ／＼と柔い葉すれの音

が破膜に響く心地よさ。葉と葉の間から強い日光がチラ／＼して、皆の着物にも袴にも縞を見せた。割烹室の横に干された白い浴衣が眼を射て眩しい。運動場ではフットボールの最中。空高く見上げられた音と一所に、白い數知れぬ手が一齊に上る。燕がツウと目の前を掠めて去つた。あゝ此の鳥。椰子の夕風に咽ぶ南洋土人の悲しい歌にも飽いて、櫻咲くみ國へはる／＼渡つて來たこの燕が、私は大好きだ。話は次から次へと盡きる瀬も無い位。あゝお互に半年の後には、散り／＼に分れなければならない。私達は暫くでも書物とノートを忘れて、風薫るアカシアの下で語る事が出来るのが、無性にうれしかつた

ボブラ黄む秋

秋になつた。青磁色の空から、太陽がうるみのない木間を通して降り注ぐこの頃。ボブラの葉は日増しに色づいて来る。次の時間を待つ十分間を、百舌鳥が高い頂で啼く。透き通つた爽かな秋の天地に相應しい聲だ。實際この頃は氣持がいい。幾何の問題も英語の講義も、何もかも面白く味はれる。こんな時私達は天地の宏大な事をつく／＼と感じるのである

垣根の草は吐息して、小さい實をバラ／＼と飛ばす
 ティスコートでは、來る大會に花を咲かすべく勇ま
 しい選手ぶり。涼しい風がボブラの梢を一しきりゆ
 すつた。秋だ。あゝ秋だ。校庭に立つて飽くまで高
 い大空に嘯く時、犯し難いくつきりと聳えた山を見
 入る時、私達の心は秋に――開かれぬ秋に生きて行
 くのだ。

木 枯 の 夜

明るい燈の下で、妹は一心にペンを走せて居る。

紫の一字一字が白い紙の色をだん／＼に埋めてゆ
 く。外は眞暗い木枯の夜。サラ／＼とすべる様なペ
 ンの走りが、得も言はれぬ程なつかしい。こんな時
 には妙に幼い頃が思ひ出されてたまらない。十二の
 時住みなれた尾道を後に、遠い南の國へ去つたあの
 仲のよかつた友は、今頃どうして居られるかしら。
 落ちて居た紙の片はしに、筆執つてやたらに書いて
 見る。山の麓の白壁の家と紅い寒椿の花。レモン咲
 く南國。なつかしいお蝶さん。寒い／＼今宵の様な
 夜などは、私と同じ様に、宅の母の膝に物語をねだ
 つたあの友とも別れてから、花は幾度び咲いては散

つた。木枯すさぶ夜、机に伏して幼時を戀ふる私の
 双の眼には、いつしか涙がにじんだ。

口 語 詩

四甲 村上純子

五 月 雨

今日もまた降り出した。

いやな陰氣な五月雨が、

あれしとしとど降り出した。

逝く春の、

愁に、沈みて行くやうに、

私の、涙を、誘ふやうに。

何と、いふ降りやうぞ、まあ、

其の、陰氣つたら、

ありやしない。

わたしは今、

机の上に、諸手をついて、

默然と、思索にふける。

うれは、この學校の、

午後三時、

誰れも居ない教室の隅。

ふと、浮ぶ、この春の夢。

彼岸櫻に銀絲のやうな雨がふつて、

物思はせる夕べであつた。

嗚呼、其の夕べであつた、

亡き母を野邊に送つて、

わたしの心が麻と乱れた事は。

逝くものを追へど詮なく、

乙女十七、

私の春は色も香も無く、

夜なくをすゝりなきして、

涙にぬれた長い睫毛が、

亡き母様に似たとよ。

哀愁の内に月日は暮れて、

五十日も過ぎ、百日も來たが、

晴れやらぬ胸の想ひの、

結ばれて雲となり、

涙の雨の今日も降るかよ、

たゞジメくどジメくど。

和歌

亡母を懷て讀める

村上下枝

春なりきあゝ春なりき彌生なる淋しかるへき春の日
なりき

冷へはてし母のみ胸に額伏し涙かるまで子等は泣き
けり

胸の家に面影のみを戸に残し逝きたる母よ喚べど返
らず

うつし繪のやさしき胸に顔あてゝ我れ春の夜を泣き
明かしけり

亡き母の歸り來ませる心地して姉の來るが嬉しかり
けり

窓に凭り亡き御名呼へば雁一つ答ふるらしう西せし
夕べ

我が母はいつれの星に魂宿るさけびてたゞに山はし
りけり

母逝きし刹那の心尙我に哭しみなして絶へず胸食む
涙うちわの胸碎き世をさきぬ棺釘うつ冷たき鏝は

この夕べ白き花咲く板塀に妹と二人母戀ひて泣く
亡き母の手馴れの小琴奏てつゝ在りし世偲ひ又も泣

かな

同じ心を 四甲 村上純子

春といへばなべての花は咲くものをなぞ母そはの枯れ給ひけん
亡きからは喚へと還らじさりながら魂こそ子等の胸に宿らめ
み位牌になきみ名呼へは我魂は母のみ魂に通ふ思はゆ
母戀うと泣く妹等をこらしつゝ薄ら笑みつゝ我も泣くなり
垂乳根の母のみ胸に枕してむつかりし昔我が忘れなくに
さらでだに雨は淋しも此の夕べ母戀しらに身にぞしみける
思ひつゝ戀ひつゝぬれは蓋しくも過きにし人にわが逢はんかも
虞美人草の赤の一本咲くやがて風無きに散る物をこそ思へ
亡母の手植のかたみ撫子の香をなつかしみそと撫てく嗅ぐ
亡き母に香手向くれば冷やかに心に觸るゝ或物あり

けり

咲き揃ふ浄土の花を母の脊にうつらと見しは夢にてありけり

美はしき雨並を漏れて子守歌子守給ひし母の顔戀しまな子われ母に添乳の夢さめて燈火淋し明方の蚊帳母去にて五十日は早くもすぎにけりわが泣く涙いまだ乾なくに

母そはの母植ゑましゝ萱草この一本をあはれとは見ん

はゝそはの母に似たりと人のいふ我が黒髪は延び行くものを

生れては死ぬことはりを知ればこそいや戀ひまされ亡き人の跡

愛てましゝ園の撫子咲きにけり母と二人し見らくはよけん

修學旅行記

京都へ

岡田カツヨ

喜び楽しんで待ちに待つた一月十三日は來た。同じ心の友五十余人は校長先生及吉野枝廣の両先生に引率

せられて午前七時十二分發の列車でいよ／＼京都地方修學旅行の途に登つた。なつかしい村の地王山よと朝まだき東の方を望む内汽車は程なく松永も過ぎて福山。やがて大門に近づく。うら／＼かなる朝日はまばゆきばかりに車窓に輝き始めた。互ひに楽しく語り合ふ内汽車は停車し或は走り數驛を後にして岡山に着くお茶よお辨當よ果物よと買ひ求めたことを發車すればやがて清き流れにイカダ浮べて下る吉井川の鐵橋を渡るこの邊は和氣と云ふ。尊き和氣の清麿公を偲ぶ。やがて辨當中に三石のトンネルにかゝつた上郡。うね。なば。等おかしき地名よ等云ふ内姫路のお城が見える。先生は沿道の説明をいろ／＼として下さる。須磨や明石の濱邊の清き浪に沿うて松並木の間を走る。一ノ谷や敦盛の首塚須磨寺等に遠き源平の昔も思ひ出でられあはれなりたかどり。兵庫に山陽線もやがてつき汽車は絶間なく走つて大阪に近づく。松本さんの御郷里とて喜び給ふこと一方ならぬ。大阪では松本さんの舊いお友達が學校の歸りで五六人乗り込まれた互に昔語りが始まつた。お友達の大阪辨に松本さんの尾道言葉。其の對照の面白いこと。この邊から乗る人は皆大阪辨か兵庫な

まりか私共とは大きな違ひ様。皆時の過ぎるのも氣づかぬ程の大元氣樂しく語らふ内いつの間にかたそかれて夕日は西山に沈む。汽車は程なく京都に着かんとして居る車中にはもう電燈がまた／＼出したいよ／＼午後五時京都驛に下車。奉迎門にはイルミネーションが燦然と輝いて居る。私共と同時に幾組かの地方團體が下車した。どり／＼のいでたちがひどく周圍の情調を紊してゐる。

京の夜 四甲 泉 隆

むかへの者につれられて。加茂川べりの宿の一室につかれた身体をなげだしたのは。もう灯ともし頃だつた。外の景色は變つて行くことはいふものゝ。つく然とした單調な流車の一日にうんざりした皆の顔とそこらにおかれたはでな友禪の手提との對照が面白い。朱塗のお膳がすゑられて愛嬌のないぶつきら坊の下女にお給仕をされながら。私は友達に出す手紙の文句等を考へた。どこからともなくおこるはなやかな笑ひ聲向隣の高専科の室も大分賑やかだ。夜の京。それをあるくとして衿巻にくるまつて先づ三條大

橋にたつた。大きなぎざし。ざあつと石鹼の泡の様なしぶきをこぼしてはしる加茂の水。それにちらつく赤い灯や。友禪さらす光景やはどんなに美しからうものを。さてもさみしい冬の夜の比叡風のつめたさよ。『どこの學校だすやろ』『さあなあ』人々のさうやき。大正琴のなつてゐる樂器店の前もどはつた呉服店のかども過ぎた。この明るい町にも。あの優美な御所車がどはつたらうし。月のよい夜には髪の毛い美しい姫君が琴をつれぐにたんじられたであらうと袂から風呂敷を出したりいれたり無意識にしながらじつとなんとも言へぬしたはしさとなつかしさを感じた。やがて先にもまして人の行來の繁さ。兩側には人形の陳列。焼物のたなかざり。さては美しいふる物屋がまばゆい様な明るさに映えて一人の賑しさ。こゝが京極である。と同時に皆の頭も張子の虎みたいに活動しはじめた。劇場の太鼓がなる。ひよいと目についた夢二さんの繪葉書に私と女さんは早速いゝんなのを見せてもらう。あれもよいこれも好き。やつと『春雨の頃』『モデルの一日』『ばらの歌』を撰りだして店を出た時にはあたりに知つた人のかげは見あたらなかつた。はつと思つてごんぞ

ん後を追つたけれど誰も見えぬ。あまつさへ道は二筋あどへひつかへすのはなんでもないけれど先の人に心配をかける。波うつ胸をおさへながらさんざん考へた上句賑やかな方へ行く。この道でなかつたらどうしよう。見合はせた二人の顔は青かつた。賑やかな所をたどつたどつて文具店の前にたつてゐる友の姿が目にはいつた時のうれしさ。まあ／＼お巡りさんの御厄介にもならずどはつとす。それからあまり皆とはなれなかつた。夜はだいぶ更けた。星が寒さうにきらめく。白い顔赤い唇すんなりした肩のあたりに銀のかんざしゆらめく舞子は可愛かつたあんな子を一人かはいがつてやりたい。そして祇園のロマンスを春雨のうばふる夜なんかしんみりと聞かうものを。あはれやさしい京ことばの子よ。永久に幸あれかし。バナ、やおまんぢうをかかへてかへつた時はさきに歸つてゐる筈の友達はまだどつた。三間ぶつ通しのうなぎのねる様な長い部屋にはあかい蒲團が足場もないほゞしきつめてあつた。皆の歸りのそろふまでかなり長い間。私は仲のいゝ四人とその上にすはつていろ／＼な事を話した。先生に『おやすみ遊はせ』といつてからは白袴にはでな長襦

絆姿ばかり。若きさうやき。えいはぬ誇様々の事
 かんがへてゐる内にこれらはいつしか私からかすか
 にくくだんくくとはなれていつた。もうして私はね
 ひつたのだ。

おなじく その二 大山芳枝

自然の美景に目をかどやかにさせて居た須磨。明石舞子
 のあたりもまたよくの隙に過ぎよろこびをのせた列
 車はめざす京都へ着いた。

京都！まあどれほど待つたであらう。汽車から降り
 た私はあゝ遂々京都の土をふんだのだと思ふと妙に
 足がかるくなつて靴音たかくふみしめてお友達に笑
 はれる。

停車場を出るとすぐ目の前は装飾のこつた緑門。ど
 ちらを見てもにぎやかな事。

山ふところに育つた私は只もうあたりに目をうばは
 れる許りでした。電車に乗つても絶えず兩側の窓外
 を見つめてゐる賑々しい光景に驚異の眼を睜るの
 であつた。やうやう私達は宿へ落ちついた。

夕餉を手早くすまして私達は早くも宿を出た。京の

夜をみるべく。すくつてみたいとまでも久しくあこ
 がれてゐた加茂川も見えた。

こゝは京極の街。御大典あとのまゝの光景紅紫さ
 まざまのイルミネーションの光り。見る目も眩しい
 程。つゞく家々は、数奇をこらせる装飾をほどこし
 げにゐる當時の京都市民の熱狂をしのばせるのであ
 つた。

若い私達には殊に小間物屋の飾窓が歓迎された。き
 よろくく目許り光らしてゐた私達をさぞ可笑しく
 見た事であらう。

かどやく電燈の光りはあたりまばゆい許り。そこの
 可愛らしい京人形は早くも私の手にだかれた。まつ
 かなデアリヤのかんざしは姉様へ。目にあたるもの
 手にさはるものは皆珍らしい物許り次からつぎへと
 あさつて行くのであつた。歩いてても歩いてもつきな
 い繁華な街もうつかれてしまひました。もう夜も大
 分更けたらしい。比叡おろしといふのだらう。

さすがにこゝは寒い。名残をしいけれども元來た道
 を引返す。宿へ歸つた。又お話の華をさかせる事一
 しきり。時々電車のひびきが寒い夜風に交つて恐ろ
 しい。先生の御注意に私達は冷たい床に入つた。あ

すの名所めぐりの樂しさを思ひながら。

明くれば十四日

四甲 井出 テツ

午前八時に宿を出發して第一に菅原道眞公をおまつりしてある北野神社に參拜した。次に平和なる田舎道を過ぎて足利三代將軍義滿公の驕奢の跡を見んとて金閣寺におもむいた。あの道すがら農夫らしい女の一種異つた風俗をしてせつせと働いてゐるのを見た。當地でまれに見る位の大きな大根はなんでもなさうに軒下に多くつまかさねてあつた。また大原女の町にかつぎ出す料にや薪をそろへて切る女もあつた。いよく金閣寺へ着いた鹿苑寺とかいふお寺の寶物や庭園を見た庭には一面松の枯れ葉を敷きつめてあつた。少しづつころがつてゐるは見ぐるしきものなれど多く敷きつめたのは美しいものである。物事は何でもこの通りであらうと思はれる。庭園は廣々として數寄を盡した林間には彼の名高い三層樓の鯉さも樂し氣に愉快氣に浮き沈みつ遊んでゐる。この階段の急なには困つた。よくも義滿公がこんなところを上り下りしられたことと思はれる位。三

階目にはいくらか金箔が残つてゐたが、他にはさほど見つからなかつた。併し軒下にはまだまだ美しく昔のまゝを残してゐた。義滿公の驕奢のあまりにひどいのに感せずには居られない。一番後に残つた私体はまだ私達二三人は下りもしないのに筋骨のたくましい田舎人が勇ましくはしり上るので困つた。女と思へばなせあんなに思ふてくれないのであらういづかも雑誌に安井哲子先生が書いてをられた中に。日本の男子は權利が強いその弊害の一番よく表はれてゐるのは、停車場の待合室である。ストーブのまわりは男子でかこまれてゐてかわい女子は室のすみつこの冷い板の間に腰ををろしてゐるとあつたがうればかりでなく瀛車電車でも往々私はこんなのを見出すことがある。ほんとに女子は可愛さうなものである。金閣寺の庭園をめぐつて行く。茶室の南天の床柱萩の違柵等見た。昔は外國と貿易するでもなんでもなかつたになせどこからこんなものを持つて來たらうと。これも驚きの種であつた。樓閣からは小さい子供が説明してくれた。まだ小學校の三四年位としか見えないが學校へも行かずに。あゝし

て毎日／＼一ツ事をくりかへしてゐるのかと思ふと同情の念にたえない。また説明入アクセツトの異つたのにはふき出した。慶長五年徳川家康の建築したと聞いてゐる二條城即ち今の二條離宮へと向つた。かりの建物と校長先生の申された大極殿はどてもどてもかりの建物とは思へない。垣の中にはどこどころ菊形の紋章をつけた巡査が立つてゐて、唯美しかつたのと神々として身のひきしまつたのをきくしてゐる。次に御所。茲も廣々と老松乱れ立つてゐたろの中を拜觀人はたえまなくひきつづいてゐる紫宸殿の前に出ると黄金色の橘が生ひ繁つた葉のまに／＼見えて美しかつた。悠基殿。主基殿の古風なのは遠き昔をしのばれた。次に府立高等女學校へ行く學校はなか／＼古びてゐたが、校舎は廣かつた。二階でお辨當をすましたこの時のお辨當にはこりこりした。次に動物園へ行つた動物園の垣からインクラインをのぞいて見た。次に智恵院ここには左甚五郎の置き忘れたといふ傘があるといふことであるけれども。私には見付からなかつた。名高い驚張の縁を歩んで見た。清水寺は東山第一の眺望と聞いてゐたが、京都の市中は一目に見えてながめがよかつた。

名高い音羽の瀧を左に見て下るとそこらは一画紅葉谷。秋は如何に美しい事であらうといつもここにゐる茶店の人やうらやましかつた。こゝで清水焼を求めた。茲を下りて三十三間堂に着いた時は早くれかゝつて。名高い觀音の像を拜することは出来なかつた。今日は日程の最後であると思ふと名残り惜しい東西両本願寺に參拜。それより電車にて伏見桃山御陵參拜。明治天皇照憲皇太后の尊き神靈は東西相並んで幾千代かけて齋かれ給ふ。乃木神社の建設地が御陵の下近く撰まれてゐるのは誠に故將軍の靈の嬉しく思召さるゝ所であらう。參拜を終へ伏見停留場の側の待合でお辨當をすまし京阪電車で大坂城跡師團司令部を觀る。豐太閤の雄圖を慕ふ夕暮の風が吹いて來て中々寒い。此處から大阪市街が見下されるが、全く煙の都である。大阪より阪神電車で神戸に向ふ。神戸では夜になつた。海岸通り居留地をめぐり楠公に詣でたのだが、私は少々心地悪しく殘念ながら行かなかつた。やがて皆んなは廻つて來られて中央旅館に夕の辨當を開いた寺田さん黒木さん大藪さん新宮さん等尋ねて來られてお目に掛ることが出來て嬉しかつた。校長先生とは神戸でお分れした先

生はこれより兵庫徳島の方を廻つて歸られるので、私共へは無事に歸るやうにと仰せられて。十時半頃であつたらうか神戸驛前から電車へ乗られた。私共は近い町を見物して歸つて宿で種々面白い話に十二時頃まで過し。いよいよ十二時五十六分神戸驛から瀛車に乗つた。晝の疲れで夜は大抵眠つた岡山で乗りかへになつていよいよ十六日午前七時幾分尾道驛に着一同はここから別れてうれしく家路についた。かうして楽しい最後の喜んだ修學旅行も無事に終結を告げた。

京阪電車

河野キヌエ

重いお土産包を提げて漸く七條から京阪電車に乗つた。今日は男山八幡宮の厄拂とかで臨時に箱が出て居る。二分間程に電車はすれちがひろれが一ぱいの人であつた。十一時頃桃山へ着いた。停留所の待合へ手荷物を置いて襪先き上りの御陵道へ向つた。東桃山陵よりの歸途。南方の目の下には宇治の町。茶畑が見える頼通の建設にかゝる鳳凰堂を見物したく思つた。東方には歌に名高い逢坂山の連れるを眺め

昔こゝに住居して居た淀君この地を彼女のために周旋した秀吉の榮華の頃などと思ひは歴史に逆上つて居た。歸りには三々五々店先に立止まつて『これいくらですか』『へふろれは八錢で。へえ』『五錢におまけなさいねいゝせでう』こんなにいづて値切つて居る方もあつた伏見屋の御辨當に困り／＼連中は壽斗屋。うどん屋の。のれんをくぐる友もあつた。多くのものは待合へ歸つてうこの二階で贅食を取つた。ここの停留所ではいくら待つても／＼来る電車は満員とても吾々一行が一つ箱に乗ることは出来ない。それで遂々いくらかに分れて乗つた。私等は一番先きの組であつた先客は大方男の方ばかりゆつたりと座をしめて眠むつて居る人もあつた手に包をかゝへ袋を提げて疲れた足を細い傘の柄に支へて釣皮に下つて泣きたい様な顔をして居るのは桃山から乗つた吾々であつた。或時自分が讀んだ雑誌に『或る停車場の待合室のストープは男子の専有となつてゐるその反對に女の方は室の隅つこに小さく腰かけてゐるのを見て我が國の男子の女子に對して同情か欲乏してゐるといふことを思つた』と書かれてあつたのを思ひ出して一昨日尾道驛で丁度その有様を見て今又

この車中で自分たちがこんな目に遭つて少々不平をおこす。どこの停留所でもたとへ乘客が増すばかり。

八幡に電車が止ると吾々の外皆下車したので漸く席に着いて包を膝に置いた時は腕はちぎれさう。車窓から八幡宮の鳥居の方を見ると、お宮の奥の方まで路いつぱいの人。臨時改札口には幾線かの列が作られて段々と列の後へくく人にならんで電車を待つて居る。こゝでは又乘客がぎつしりつめ込んで来た。どの人もくく白羽の矢を持つて居る。中にはすく掃に用ゆる笹のやうに長いく笹をかついで居る人もあれば、稲の穂やオカメの小さな顔が竹の先について居るのや。弓を持つてゐる人。いろんな人があつた。蟬のどられたばかりのやうな羽織に角帯の。一見大阪商人らしい人が多かつた『どちやからきやりました……あゝさうだつたか。よつほど遠うおますな』やつぱり想像があたつてゐた。八幡を發車してから段々乗客は減るのみで誰れも乗つて來なかつた友の大方は包の上に顔を乗せて眠つて居た。随分京阪電車はゆれる。電車が終点に着いた時は私共の他には角帯連の幾人かだけであつた。

小品文

蟬

四乙 惠谷 ハツヨ

蟬といふ題を出して色々ど工夫して居た。

ところがお隣りの政ちやんと春ちやんどがやつてきて、それはくくひどい議論。政ちやんは『餘り暑いから蟬は泣くのである。』といへば、春ちやんは『泣くのではない。歌うてゐるのである。』といひ。泣くと歌うの争論で、工夫どころではなかつたが、やがて雲一むら大きなやかなる雨がぼつりぼつりと降つて來て、盆を傾けるやうな驟雨。それも暫時の間で晴れて、後は庭の木々は洗ふが如く縁に、時を得顔に涼しげに蟬が鳴き出すと、最前の議論はこの雨にすつかり洗はれたと見え、政ちやんと春ちやんは云ひ合したやうに、『あれ蟬が喜んで鳴いてゐる。』といつた。

春は來た 三甲 福永千代子

環路のこぼれる様な細い春雨が、音もなうしめやかに若草萌ゆる芝生へと降り注ぎます。昨日まで美し

と見た魁の梅の花は、哀れにも雨に濡れて、時々水晶の玉がぼろ／＼と春の夢に消えて行きます。春待つ胡蝶の夢尋ねて、水色の御殿に歸るのぞきう。懐しうも胸は轟きました。春。噫、桃色の春は訪れて來ました。雪に霜に、身も心も小さくなつて居た人の子も今や春の色を眺め、其の歡び匂ふ幽艶な調に酔はされて、淡い幼に包まれました。見よ、その顔には春のしるしともいふべき淡紅の色漂ひ、聞け、その聲には、春の調べに相應しき若々しさが満ちて居るではありませんか？あゝ萬象の喜び、赤きは／＼笑み、美しい希望の春は來た、自由の舞樂の輕き音に連れて。

みどりする夜 三甲 村上 純子

姉様も私もじつと母様の寝顔を見つめてゐた。あゝ僅か十日餘りのお腦みで母様もめつきりお弱り遊ばした事。頬のあたりのおやつれが一入私の心を亂してはつれ毛の二筋三筋こぼれてゐるのも何となく涙ぐまれる。

『お藥は未だあつて。』と小聲で姉様がおつしやる。私

はそつと燭を取上げて見て、だまつてうなづいた。後は又元の沈黙にかへつて、二人共思ひ／＼の冥想到に耽つてゐた。靜かな宵。母様の寢息が微かにひびいてゐる。ふと眸を庭に落すと、梅の花が白う／＼雪の様に匂ふて、飛石や石燈籠が月光に碧白う照されてゐる。あゝあの梅の花の散らぬ間に、母様が良くなつて下さればいいのに。私は目をつむつて『神様どうか病に腦むあはれな母をお救ひ下さい。』とお祈りした。

星また／＼夜 三甲 東 一枝

輝ける星は私に何事か語らんとするものの如く、私も亦この星に苦しき思を訴へんとして、風寒き庭に下りた。星の一つは絶間なく瞬いてゐる。光弱きは強きにおされ、小さい星は大きい星の側におびえた様に光つてゐる。亡き友の靈も宿つてゐるかと思はるゝ懐しき星よ。何處からともなく靜に讀經の聲が聞えて來た。悲しき響きは、人なきこの庭に靜に響いてゆく。私は淋しさにたへやらず、時々美しき空を見上げつゝ歩いた。うしてつくづく人の情のうす

さをもつた。あの位親しくした方が今はお便も下さない。身に千里の隔はあつても心に隔はないものを、私は一人でも誠ある友がほしい。私は友を思ひ人のつれなさを思つて泣いた。星は相變らず私を慰めるやうに、キラ／＼と美しく光つてゐた。

櫻 花 二甲 岩 崎 照 子

霞か雲かはた雪か。雪にしては暖かなり。雲にしては香あり。

花ならし霞みて匂ふ白雲の

春は立そふみ吉野の山

大和心を標識し、其の譽世に高く、花としいへば櫻を指すに至れるも、皆此の花の優美にして、潔白にしかも其の効用の廣きに依るなり。

櫻の原種は、嫩葉と共に疎に花を開く山櫻にして、多く山野に自生し、開花の期最も早し。現今は栽培の結果、其の種類二百餘種に及べり。

櫻は外國にもあれど、日本の櫻の如き美しき花はなく、唯其實を賞するのみ。

咲きては千万の人に持てはやされ、散つては人と共

に無情の風を恨む。材は建築の用となり、皮は實用裝飾に用ひらるゝ等、一として無用の所なきなり。嗚呼亦偉なる哉。

春 の 野 二甲 藤 野 松 榮

いつ見ても厭かぬ眺めは、春の野である。瑠璃色に澄み渡つた空には、一羽の鶯がいとも長閑に、輪を描きながら飛び廻つてゐる。太陽はほか／＼と、暖かい光を下界に投げかけてゐる。見渡す限り廣々とした野は一面に、青に黄に紫に、佐保姫の裳を彩つて、恰度毛氈を敷き詰めた様である。彼方なる土堤には、萌え出でし許りの若草を褥に、牧童が休らひ其の傍に繋がれた牛は、折々『もう』と長閑に吠えるのであつた。ふと足もとの小川に流れてくる、花束が目に入つたので、つと取り上げたとき、遠く正午の流笛がすさまじく鳴りひびいた。花束を手にしなから足をかへすと、何處からともなく、一羽の蝶がヒラ／＼と飛んで来て、其の花束に近よるのであつた。

色

一甲 吉井千代子

紫、神々しき名なり色なり。そは優しく愛らしく氣高きもの。筆の穂にも似たる菖蒲の薺、秋野を飾る桔梗の露、いかに優しく愛らしきものよ。銀鈴振らんせうらぐ畔り、藤花手にして佇める紫衣の僧、おゝ氣高きことよ。しほらしき堇花。可愛ゆきは紫の袴穿ちたる稚兒の姿。白、尊く清き名なり色なり。幾万條の銀線ばつと下界を照らせし殺耶、輝く雲の光、いと清きものぞ。黄、けはくしくやなる名なり色なり。燃えんばかりに咲けども何の實も結ばざるは山吹の花。青、しほらしくも優しき色なり。そよ／＼と吹く風に青柳の糸はとけつもつれつ。おゝ千古の眞理をさゝやく。

我が選題の感情 一甲 部谷富子

或日の午後四時頃であつた。今日は幸ひ日曜日。先日校長さんが申された小品文を綴らうと思つて、兄の机に向つたが、何何を書いてよいかわからない。机に向つてちつと考へて見たが何だか茫々として纏

らない。強ひてあの題この題と選んで見たが、同じ様に刎ねつけられる。胸に浮んで来る題の中には梅櫻雪皆自分に不足の様で、とても作る氣になれない頭が乱れて来る、時は迫つて来る、終には泣きたくなつた。其の晩は物足りない悲しみで、床に入つたが眠られない。夜は更けて居る。何の音もない。耳を澄ませば澄す程しんとして来る。いつまで考へても考へられないからどう／＼眠つた。夜が明けた昨夜の續きを書かうと思つて雜記帳を出したがわからない。嗚呼、常に教はる先生の顔が現はれる。

普通作文

修學旅行の一夜 四甲 松本智恵

懐かしい華やかな京極で色々な感じにうたれた私は岩に碎けては沫を立てゝざゝと流れ行く賀茂川の流がつい前を通つて居る淋しい宿に歸ると、先きに歸つた筈の皆の姿は見えなかつた。私もつまらないから、最う一度皆の様に歩いて來ようかと思つたけれど、勞れた体を再び寒い夜風に合はす氣にはなれな

かつた。そして、何時も離れた事のない三人の友と靴の紐を解くと、ショールにくるまつたまゝ二階に上つた。見ると廣い室には同じ様な布團が足の踏み所も無いまでに重ね合つて敷いてあるので、面喰つてもぢくぐして居たけれど、飛ぶにも飛ばれず仕方なしに窪んだ足跡を残しつつ段々に歩いて、一番良ささうな場所を占領した。其の部屋を四人は吾物の様に振舞つて大騒して居る所へ、二人歸り三人歸りして五十人の生徒が集まつたのはかなり長時間の後であつた。先生に、『お寢み遊ばせ。』の挨拶が濟んでからの室には、白襟の掛つた紅の長襦袢姿が入り乱れて美しい若々しい、何ともいへない氣分が溢れて、誰の顔も誇りと嬉しさに輝いて居た。やがて其姿を夜具の襟深く埋めると、皆汚げな枕に紙をあてたりなどして無氣味さうに寝る。母の心添へに依つて唯一人空氣枕の心地よく寝る事が出来た私は、母の情を感謝しつつ、其夜初めて友と一緒に寝た。あちからからも、こちらからも、嬉しさうな笑ひ聲が漏れたり、話聲が切れなかつたりした内は、私も珍らしさに同じ様に話し合つては笑つて居たけれど、忍びやかに漏れて来る話聲さへ聞えなくなつた時、

私はしんみりとして、『嗚呼こんな清い楽しい日を立たせたくない。私等には是が最後の修學旅行、最後の思出だもの。』と涙ぐみながら安らかな友の寝顔を打ち守つた。腕にからんだ長襦袢のこぼれ櫻が私の目から段々と小さく、薄く、消えて行く様に思はれた時、私は眠りについたのであつた。

岩尾の瀧 四乙 小西 シヅ

清らかに晴れ渡つた朝、廣島から電車で己斐まで行つて、そこから三時間程汽車にゆられてやうやく神代驛に着いた。見上げる時計が十一時をさしてゐる驛から岩尾の瀧まで十三町程の田舎路を、ガタガタ車にゆられ行く。眞晝の強烈な日光がクリーム色のバラツルをどほして照りつける。頬はむやみに上氣して、額や頸筋にじりじり汗がにじむ。

道の両がははズウツと一面蜜柑畑。夢二さんの畫の『忘れ得ぬ人』に乗つてゐた、林檎畑に泣いてゐた娘さんと思ひ出した、あたり見わたしたけれど、似た人も見當らなかつた。風にやさしくなびくすゝき尾花、農家の門に淋しくふるふ瓢箪の花、石と石との

間に、紫匂やかに咲出てる優しい堇に至るまで、みなめづらしく、なつかしくないものはなかつた。やがてカタリと下ろされた梶棒の音に、バット夢から覺めた心地で下り立つた時には、瀧の音は手に取るやうに聞えた。右手に雜木林、左に瀧の流を見て坂道を二三町あへぎ／＼登つて、清い瀧の流れにかかつてゐる可愛い小橋を渡つて、瀧の宿についた。女中に案内されて、顔の映るやうに拭き清められた長廊下を、スリッパの音も軽く、青臺の香の高い十疊の御座敷に通る。勞れた身を白木の手すり椽に寄すると、瀧の流れが下にのぞまれて、清い水が石に碎けて玉と散り、水靜かに澄む所には、白い柔かい毛の水鳥が、美しい川面に平和な光をあびながら、繪のやうに浮んでゐる。北の丸窓から白絹を流したやうな瀧が、窓ぎはの青柳の間からサラ／＼光る保養に來てゐる人達が、白いシャツなんかきて、手拭ふりふり瀧にうたれに行く。可愛い小供達が二三人手を引き合　て楽しさうにかけて行つた。私も宿の庭下駄ひつかけて、お庭づたいに瀧見に行く。向ふの岩の上に觀瀑の客でせう。白衣点々茂つた樹間に動いて居る。私は上り下りの小路をたどつて瀑の前

に立つた。瀑は中空から丁度銀河の下るかのやうに又數條の白糸を分つやうである。其中頃からは絶壁の小尖岩に觸れて吹雪のやうに散る。

耳に聞く所は、殷々と遠雷の響を傳へる瀑の音に交つて、樹上に暮れを急ぐ蜩の諸聲ばかりである。私は賞讃の言葉も忘れて、只うつとりと傍んだ『實に絶景だな、ああ』後で誰か腹の底からうめくやうに斯う言つた。夕暮れの手は次第にひらかれて、瀑も人も木も、みんな黒幕につままれた。やつと我にかへつた時は、私の衣がしつとりと濕つてゐた。

毛 剃 り 四乙 高 竹 ヨ シ

『まあ、其處へお坐りなさい。』と床屋に云はれた私は、母の剃つた後の、心持ち暖かい更紗の座蒲團の上に坐つた。今しがた學校から歸つたばかりの私の顔の汗は、出すまいと思つても滲み出る生温い汗の其が上を、床屋は容赦なくゾリ／＼と軽く掬り出す余りの氣持ちよさにコクリコクリと居眠りが出さうになる。恰も海中の船にゆられ／＼てる様な、半意識狀態ではあるが、母と床屋との對話は慥かに耳を

刺戟する。

次へ／＼と床虱の手はお止みなく進んで、今は右の頬を剃り出した。

女床屋の、洗ざらしの薩摩緋に、白いエプロン掛けて、頭はふさ／＼と緑の黒髪を、無造作に束ねて、如何にも殺風景に結つて居るが、頸すじの細つろりとした、目もこの涼しい、口もこのしまつた、白色の美しい顔は、何處どはなしに昔ながらの倅を、二つの笑凹に残してゐる。

母は端午が近づいたので、さも忙がしうに呉服屋印の白い手拭ひで、姉さん被りにして神棚や佛壇をお掃除してゐる。

『まああの子がゐるから、あの子を便りにこうして働いてゐます。』と女床屋は云つた。母は、『さうでせうとも、お察し致します。何を云つても辛抱が第一ですからね。』と、さも氣の毒さうに聞いて居る。猶言葉を續けて、『私宅では生さぬ仲ですから、あの子も氣兼ねはするし、可哀さうな時がありますよ。けれどまあ、良人はあの子を可愛がるし、あの子は『お父さん／＼』と云つてなつくし、生さぬ仲とは云つても家庭も穩かですから、安心してゐます。この

時私は目を開いて邊りを見た。いつも乍らの美しい顔には一層快感を覚えしめる。猶續いて『あの子は勉強が好きでね、今第一の尋常四年生ですが、學校から歸ると直ぐ本を復習して居ります。』と言ふ。母はその時、『そんな賢い子には思ふ存分勉強さして學校の先生にするのが好いがね。』と云つたら、女床屋は、さうですよ、あの子はいつも『お母さん、どんなに辛抱しても女學校へは行かして下さいよ。』等と云つては私を泣かせますあの子の従姉は皆女學校や師範を卒業して、何人も先生になつて居ります。貧乏するごつまりませんよ。滅多に交際はしないしね稀には先生してる叔母が來ると、あの子の頭を撫で、『しつかり勉強せよ。』と云つてくれます。するとあの子は、清書や圖畫を見て貰つて満足して居ます。何を云ふても、あの子一人を一人前にする迄には、私一人の手でかうして働いても高が知れてゐますからね。せん方なく貞操を破ぶつて今の良人を貰つたのですからね。あの子も俯が悪いのでせう。三つの時には實父に別れて、その後苦勞ばかりさして、やつぱり私に意氣地がないからです。これも前世の約束でせう。そう思つて締めるより他に術はこ

ございません。私も最初は二度と良人を貰ふまい。如何に貧乏して、三度の食事を二度にしても、母子二人で楽しく暮して、此の子を立派に成人させようと堅く決心して、五六年は二人ざりでかうして働いてゐましたが、先年私が長らく病氣で寝てゐました時に、あの子は非常に心配して御飯も焚いてくれるし、何やかと甲斐くしう働いてくれましたが大へん重態の時にはあの子一人で心細く感じてゐました。その時幸か不幸か世話する人があつて、どうく張切れた心も弛んでしまひまして、今の良人を貰いました。うかが女の弱点ですな『けれどあなた自分の操を破つても、子を立派に育てゝ成人させた例はいくらもありますよ。昔の常盤御前のやうに。それは止むを得ない事情なのですから仕方がないではありませんか。まあ便りにする子が賢いから、不幸中の幸とも思つて諦めるより他はありませんよ。又肝腎なあの人にはよく働きなさるし、家庭はおだやかですから、まあ、安心して、あなたも働かれるでせう。世の中には随分放蕩無頼の人が澤山ありますよ、自分より下を見て暮すに如くはなしでね』等と大そう母は氣の毒がつて慰めてゐられました。

もう私の毛剃りもすんだ。チンくくく時計は四時を報じた。銀貨一個渡したらお禮を云つて、鈴のついた、幾らでもお錢の入るような、メリッスの古ぼけた財布の底に、お錢の音がした。風呂敷に商賣道具を堅く包んで、例の小走りの利入の音が永くつづいた。母は猶つづけて神棚を掃除してゐる。『まあ、ほんとに世の中と云ふものは種々様々だ。我儘は云はれないね。』等と母は非常に氣の毒がつてゐられると共に、何かしら感じてゐられた。私も同様に眞鍮の金だらひの水を捨てゝ、氣の毒に思ふと共に自分の身に引き比べて、現在の自分の境遇を勿体なく感じた。

除夜の鐘 三村上純子

宵のせはしさ願しさは何處へやら、

お正月のお支度もすつかり整つて、もう明日を待つばかり。掃き清められた部屋の真中に坐つて四方を見渡した時の嬉しさ。

お床の間の大きな花瓶には松竹梅が美しく活けられております。

『明日からはお正月ですよ、早くお寝みなさい』と母様が仰るので、いつもより早目に床をこりました。

あゝ最う二時間で大正四年は逝つて仕舞うので御座います。そして丁度川の水の様に、亡くなつた人の様に、永久に、歸つて来ないので御座います。私はつくづく時の貴さを感じました。

『お先へ』と御挨拶をして、最う一度明日着る紋付なご調べて置いて、夜具にくるまりました。

が、中々眠れません。妹も眠れないと見えて切りに寝返りを打つて居りましたが、『今何時頃』と私が沈黙を破りますと、枕元の置時計を引寄せる音がして『今十時三十分よ。』

カチン、と時計の刻みが、あたりの静けさのために入耳について、『十二時』、即ち今年の最後の響が、とつとと驅足で迫つて居る様で、いら／＼した気分になります。私はこのいら／＼する心を強いて落着けて、衣桁に掛けられた姉様の長襦袢の派手な花模様を見つめて居ますと、目がこそばゆくなつて、涙が一杯溜りました。

お母様や姉様方は未だ御用がお有りと見えて、お茶の間の方から微かにお話聲が漏れて、時々華やか

な笑ひ聲さへ響いてまいます。

美しい花模様が段々遠く／＼小さくなつて、松葉を散らした唐紙と一所になつた様に見えた迄は覺えてゐますが、後は最う夢心地。

枕元の時計が、けた／＼鳴り出したので、ハッとして目をさますと、暗い／＼千光寺山の上からゴーン／＼と除夜の鐘が韻長う響いて參りました。

五ツ、六ツ、七ツ、十一、十二、――

私もどう／＼拾七に成つたので御座います。

『あゝ、どうして私は眠つたのだらう。もう一時間餘りといふ處で眠つて了つて』と、一人十六の年をなつかしました。そして、少しばかり残つた十六の年を知らず／＼眠つてしまつた事を惜しく思ひました。私は最う大正五年の人になつて仕舞ひました。姉様の長襦袢も元のまゝ、唐紙も元のまゝにはつきりが見えます。

少時は、目が冴えて眠れませんでした。夜具を頭から被つて目をつぶつて居ましたら、いつしか再び夢路に落ちました。

あゝ天使、聞くからに頭が下りさう。

寒暖計が三十二度にも降らうといふ寒い一日、お姉様の病氣が重うなつたので、お父様は京都の病院から雪様といふ看護婦を連れて歸られた。

真白い服を着て、房々した髪をキリツと結ふて、笑ふ度に笑窪を見せて居た。

姉上の病氣の重い時は夜も寝なかつた。姉上が大分快くなされた或る晩の事、雪様の知らせに私は姉上の室に行つた。姉様は、

『私、最う快いから何かお話でも聞かして下さい。』といはれた。そして、

『雪様、貴女は並々の看護婦さんとは譯がお違ひなさるでせう。』

雪様は其の雪のお顔を心持横に向けて、

『ではお話しいたしませう。私は幼少の時から人の病んでいらつしやるのを見ますと、お可愛さうでなく屹度助けて上げたいと、十七の時、父に願つて看護婦になりました。』

と、仰しやると姉様は、

『まあ、あなたは天使よ、さうじゃなくつて。』と言つて顔を蔽ふ。

私もこんな天使の群の一人になりたいと思つた。

其の夜 二乙 岩崎 照子

忘れようたつて忘れられない其の夜、私の頭の中に小刀をもて彫りつけられた様な其の夜の有様は深い溝を残して永久に消えないでせう。私には兄弟が澤山ございますが、『お父様やお母様の外で誰か一番好き』と問はれたら、『お祖母様』といはない者は誰一人ございませぬ。其のお祖母様の死なれた夜が、何で忘れてよいもんですか。

其の夜丁度私は家に居りました。お父様もお母様も隠居所へ行かれたので、後に残つた兄弟ばかり日頃の賑やかなのに似もやらず、互にお祖母様の御容態を氣づかひながら、口數少なく晚餐を戴いて居りました。格子の開く音に胸騒がせながら出て見ますと果して隠居からの使でした。『皆様早くお出で下さいませ。』急いだものか息を切らせて居ました。私共は僅か一丁餘の道を漸つとの思ひで行つて見ると、親

類中の人が集つて、心配さうにお祖母様を取り圍んで居られました。私はお母様の注意で靜かに立つて末期の水をあげに参りました。最早之が見納めかと思へば、暫く側を離れもせず、じつとお顔を見守りました。其の目には怪しうも露が光つて居りました。頬骨高く秀で目は落ちくぼんで、蒼白いお顔は殊更に皺が多くございました。最後にはお母様が水を差上げられると、喉がグウ／＼と言ひました。誰か『もう駄目だ。』と囁かれた時には、微かな／＼息の音は、あゝ私には聞く事が出来ませんでした。お母様は、わつと泣き伏されました。並み居る人々も皆袖をしぼらぬ者は御座いませんでした。ふと氣がつかますと、月は蒼白い光を投げて、庭の梅の木は墨繪の様に窓の障子に浮いて居ました。

藤

三乙 川上シメヨ

桃も櫻も山吹もこと／＼散りはてゝ、緑の柳と相對し、池の汀に配台よく、紫の花うるはしく水面に影を浮べて、漣にうね／＼と漂はし、今を盛りに咲き誇れる藤。房ごとに美しき花を付け、重げに垂れ

たる其の様は、殊更美しく見ゆ。日頃人にへり下りて、少しも誇らず、傲らず、なほ謹み深きものは皆譽れありて、世人に尊敬せらるる人なり。藤の花は是にも増して、殊に奥ゆかしく尊く思はる。殊に雨後の花は色美しく、露を帯び、重げに垂れたる房はいよ／＼低く、美しく、やさしき姿は一入尊く見ゆ實に我等も之れに倣ひて、ます／＼身をつゝしまん事こそ肝要なれ。

可愛き幼児 二乙 村上文代

ろよくと吹く柳のもとに、ハンモックをつり、其中に可愛い幼児が、うら／＼かな春の日に弱い暖い光を顔に受けて、廣い／＼天にむいて、すやすやと眠つて居る。雪の様な白のフランネルに包まれて、配合の好いレースのよだれ掛、其の中に眠る幼児の顔はどことなく凜とした所がある。口からもれる寢息が、しずかに今にも笑ひ出さうである。黄蝶一匹菜の花に戯れて遊んで居たが、いつしか幼児の胸にどまつて、しばらく羽をたたんで寢て居る様であつた。が、急に思ひ出したやうに、幼児の枕元をひら

くど舞つて、又うの肩にとまつた。幼児はかすかにうでを動かした。其のはすみに手のおもちやがガラガラと落ちたので、胡蝶は驚いて飛び去つた。幼児もつづいて夢からさめた。ハンモックのもとに雑誌を読んで居た守は、幼児をだいて子守歌を歌ひながら立去つた。あの可愛い幼児は、どのボッチャであらう。あんな可愛い子供を持つた母は、どのやうに嬉しい事であらう。

我が在りし小學校

一甲 藤井喜代子

我が女學校の南に隣りて校舎の結構稍々等しき學校あり。こは我がなつかしき母校にて第一尾道尋常小學校といふ。我いまだ東西の辨へもなかりし昔より此の女學校に入學する事を得る迄に智識を授けられたるは誰なるぞ。我は性來病氣勝ちなりしを今の强健なる体力に養ひくれたるは誰なるぞ。忠孝を初めとして女子の心得へき日常道德の一端を教へくれたるは誰なるぞ。父母の思もさる事ながら其の多くは母校の恩恵にあらざるは無し。實に母校の大恩は能く筆舌の及ぶ所にあらざるなり。

我はこの女學校の運動場より母校を望み教室の硝子越に母校を眺むる毎に懷旧の情轉々禁する能はざるものあり。されば例年十二月十五日の創立記念日には何事を差置きても必ず出席してなつかしき學藝大會に臨むを例とせり。母校の主義としては節儉力行勤勉活潑にして昇校口に掲げられたる『忠孝』の金額は如何に我等の腦裡に深くく善き教訓を刻みつけられたるよ。

校長は秦先生といひて着實温厚兒童を愛する事子の如し。されば兒童の先生を慕ふこと亦父母の如く其他の教員先生亦校長を模範として職務に忠實なるが故に兒童皆よく之に懷きて學校を思ふ心深く從來善行を表彰せられし者尠からざりき。

我は今このなつかしき母校を去りて高等女學校に入りしと雖日夕母校の發展隆盛を祈ると共に一層奮勵努力して母校の名譽を擲ぐる事を心掛けざる可らずこれやがて母校に對する我が報恩の一なると思ふ。二の母校たる此の女學校生徒の本分なりと思ふ。



新年に友を招く文

一甲 小山春子

貴美子様おなつかしう御座います早やお別れ致しまして二週間程立ちました今年は寒ごいひましても左程寒いことは御座いません御地の方は何んなでせうかと友達と御噂致して居ります

貴美子様あなた様はお障りは有りませんか私のクラスには一人も病氣の者は御座いません御安心下さいまし

もうお正月も間近になりました福壽草も可愛い指先程の蕾を出して笑つて居ます新年には藤井様や今井様岡田様等とカルタや羽子つき等して遊ばうと申して今から楽しんでゐますどうぞあなた様もお出になつて面白おかしく新年を壽ぎ下さい焼くや藻盤の身もこがれつゝ待つて居ります
さよなら

玩具を贈る文 一乙 榊原菊枝

寒とは申しながら此頃の暖かさは如何にも春らしく見えてまゐりました。

日頃御大典後の拜觀を兼て京都を見物しようと思つ

て居りましたので此頃の暖かい日を幸に廿日の朝一番の演車で参りました何分田舎者の事で御座いますから何を見ても珍らしい物ばかり唯あちらを見ては驚き此方を見ては目を丸くして居るばかりで御座います御土産は何がよからうか御菓子にしようかと思ひましたが御菓子は一時だけの楽しみでございますので豫てからのお話に千枝子さんはお人形のお好きな事を承つておりますのでお粗末では御座いますれ共今年には千枝子様の初雛此のお目出度い時にお雛へお飾り下さいましたなら嘸や人形も喜ぶ事と思ひますので唯今使の者に持たせ差上げましたからお受取下さい左様なら。

夏季休業日誌

歸省 四甲井出テッ

七月廿日

今日は歸省の日である學校に居ても歸省のことばかり氣にかゝり仕度もそこ／＼にして驛に出た。やう／＼間にあつたのでブラットホームに出ればいつもにない大勢のおつれであつてうれしかった。いつも

は左程におそいとは思はぬ。汽車もぐちをこぼすほど
ゆつくりと來た。大いうぎで乗りこんだが腰をおろ
すところもなく皆立往生であつた。やうやく松永驛
に着いた。車中の友にも別れを告げて下車しうれ
しく我家をさして歸られる。私も三谷さんと二人で
なつかしい家路をたどつた。その道道に蘭がたくさ
んほしてあつた。この蘭を見ると小學校時代暑い
／＼思ひをしつゝ蘭のほしてあるこの同じ道を通學
したことを思ひ出さずにはゐられなかつた。歸る途
中いゝんな人に出会つた。すつと行き過ぎた人もあ
ればめづらし氣に後をふりむいて私共二人を見送つ
てくれる人もあつた。『この暑い日によくものんきに
立ちどまつて見てゐることよ』とも思つた。
それと同時にいつか國語でならつた『シベリヤ鉄道』
の中に『通過する汽車を長煙管をくはへた支那人が
のんきさうに目送する』とあつた。

丁度そのやうとも思つておかしく感じた。家に歸
るとお母さんはうれし氣に『よく歸つたまあ早かつ
たこと』と出むかへて下さる。このやさしい言葉に
なんと云つてお答へしてよいかわからず唯々手をつ
いて『唯今歸りました』と云ふ外はなかつた。弟や

妹にうれしくお土産を分けてやつた。この時のうれ
しさうな弟妹の顔を見る私の心を筆に表すことが出
來ない。

長く見なかつた庭を見れば庭のすみにある『日本葡
萄』はたくさんの方をさがらしてゐるのでこれが休
みのうちによく熟すやうにと祈つた。またちのかた
はらのビハの木には丁度梅ぼしのやうなひすばつた
ビハがあはれ氣に二ツ三ツ残つてゐる。これを見る
と社會のせいゝん競争にまける人も、あれと同じに
あはれなものとなるものかどこで教訓を得たので
ある。夜にいつて蚊遣りの煙の細々と立ちのぼるは
どりをかこみ團扇片手に種々の話にふけつた。その
内お姉さんの山中にゐらつしやる時作法を教へてゐ
らしたその當時の江形先生（長澤先生）のお話にう
つりおなくなりになつたことくはしくお話すれば姉
さんの顔にもんだか沈んだ様子が覚えてゐた。折
しも玄關の時計は十時を報じた。

我が庭 三乙 高竹 シ

七月二十一日

私方には奥座敷につづいて小庭があります。

毎旦夕暮れになりますと、私が受持ちのやうに近くの井水を吸んで来て、樹木に水を打ちます。すると白晝の太陽熱で萎れてゐた。木々は、蘇みがへつた様に青々として來ました。籬に巻きついた、朝顔も明朝は澤山開くでせう。万年筆にも似た苔が澤山あります。又お爺様の世からの苔の山にも水をやりますと、活々として一層緑を増して居ります。この苔の山の麓に小さい池があります。夏になると弟が河へ行つていつも『うきよ』を捕つて歸つて、其の池に入れるのでした。今年は池はあつても『うきよ』はゐません。此の池も思ひ出の種となりました。池の後側には棕櫚竹と燈籠があります。夕方のうよ風は棕櫚竹をバサ／＼ゆすぶつて淋しう思はせます。燈籠には燈し火がついてゐます。風鈴の音も床しう洩れてゐます。眞青な夏の庭には得も言はれない所の爽快な思ひがします。斯様な景色を眺めながら一家揃ふて楽しく夕餉お膳に向ふのが私共の夏の日課の一つです。



渡り初め 三乙 高竹 ヨシ

七月二十三日

かねて新聞にも報知してある通り、今日は海徳寺前の新橋の渡り初めの日だ。早く支度をして見に行きませうと、いそ／＼と支度をなし、午後の五時前、新橋の近くに行きました。丁度和田さんの方の二階へ上らして貰ひました。『よく見える事は一等否特等の場所ですよ。』と誰かど氣焰を吐かれました。しばらく夢中になつて同級の者が四五人集まつて話して居りましたら、もはや人々で黒山をなして、ろの一人一人が扇子をつかひながら待つて居られます。一時に尾道市三万の市民が湧いて飛び出した様到大勢の人でした。

待草臥れて居りますと、定まつた時刻も迫りました。誰かの手で橋の兩端の垣は取られて了ひました。今かくと待つて居りましたら、第一番に神主様、それから町内の年頭のお爺様が渡り初めの光榮を得られて、次には縣知事閣下や市長様、その次からは寄附者、何れも羽織袴で壯嚴なわたり初めでした。シッポに着いた樂隊さんは、一生懸命で一層賑やかさ

を増して居りました。サア行列が終り出すと、待ちに待った三万の市民は水が湧き出る様に一時に橋上につめかけて、橋の上はまるで先きを争ふ様にして次へ次へと渡り出しました。げに渡りたかつたと見えて、續くは／＼。上から見下ろすと、如何云つてよいか口には言葉が出ず、筆にも書き現はすことの出来ない程の大勢の人でした。私は、東京や大坂はいつもこんなに賑やかなのであらうに、田舎の尾道にはこんな人出は珍らしいと思ひました。私等も、生れて初めて新しい石の橋を渡りました。皆んなの顔を見ると、愛嬌溢れるばかりの嬉れしさうなニコ／＼顔でした。

げに愉快なる今日のひと日。

七月二十四日

二乙 岡崎 淑子

午前八時頃『郵便』といった。おやつ。何處から來たのだらう。常にない元氣な聲。私は飛んで玄關に行つた。一番に宛名を見ると兄様に來て居る。裏は第六高等學校としてある。此の間兄様は六高の試験をお受けになつたので、今日は發表の日。朝からお

手紙の來るのを待つておゐた所であつたので、さあ大變。入學許可の通知といふ事で、いつも落附きのよい兄様も一寸あはてられた。今まで靜まつて居た内が一時に賑やかになつた。早速お父様に御覽にいた。其の時いつの間にか、皆んなお父様のまわりをかこんで居た。讀み終るとまわりの鎖もどけて來た。お父様の額からは雨の様な汗。これも全身の力をこめてお讀みになつたからである。お母様は一つは神様のおかげであるからといつて、お燈明をつけ、御神酒をうなへられた。まあ一安心とお父様が言はれると、皆んなの今日までの心配な顔も何處へかなくなつて、知らず／＼笑顔。何んでも毎日心配して下さつた伯父様の所へ通知せねばならぬと、足の早い書生が走つた。間もなく伯父様は書生と一緒に來られた、一番に『お目出度う。さぞ御安心でせう。どのお言葉。』お父様も『おかげ様でよい都合にゆき安心致しました。』との御返事。お母様は、お晝は伯父様と一緒に戴く事にしよう、女中に言ひつけられる。色々の話をして夢中になつて居る内、早お晝となつた。づらりと圓く皆んな並んで戴いた伯父様が、『今日は格別の味。』とニコニコでおつし

やる。誰の顔を見ても曇らない明月の様な有様。此の様にして常にな長い長い御飯もやうやく終つた其れがすむと伯父様の無上の楽しみとしておいでる謡曲が始まる。すると皆さんがどつと笑ふ。それは余りきばつて眞赤な顔をなさつたからである。其の謡曲がすむと、息もつかずお話が出る。まあよく出たものと私は獨りおかしくなつた。そして皆さんは話に氣を取られて何を言つても返事がない。其の内やうやくの事でお話も終つた。伯父様もお歸りになつた。

朝

一甲 岡田三樹枝

七月廿五日

曉を告ぐる雞の聲に、ハット思つて、お隣にねていらつしやる兄様はと見ると、大の字になつて安らかにいびきを立てゝ居られる。悪戯をしようと思つたが、後の爲が悪いので、お庭に出た。垣根に咲く朝顔はと見上げると、空にかすかに残つて居る月。

朝顔や花のまうへに残る月

と、此時知らず／＼大きな聲で言つた。祖母様は此れをお聞きになつて、『よい俳句だ。』と仰せられた

夜

前の山にお月様が相變らぬニコ／＼と高く上つた。今夜は満月である。『ねえ母様、昔からお月様の中に兎が餅をついてるといひますが、ほんとですの。』『よくあんな事をいひますが、わからないでせうよ』歌『お月様えらいな、お日様の兄弟で、くしの様になつたり、鏡の様になつたり、春夏秋冬日本中を照す。』あれ／＼どこからか、こんな可愛い歌が聞える私は口すさまじには居れなかつた。

蚊

二甲 上月 庸子

七月二十六日

東からも西からもぶん／＼やつて来る。小さい私に總攻撃を加へる。又五六匹の一隊がプロペラーの様な音をたてゝ攻撃軍に加はつた。打つても打つてもうちを／＼されぬ。

蚊くすべ線香をたき始めたが、新紙雑誌にある廣告

の様にばた／＼と降参はせぬ。

けされつな勢でせめよせる。だん／＼赤くなつた足の所々は、數十箇所の小山をきづゐた。

これではたまらぬと蚊帳を出してはつた。

残念さうに蚊の一大隊は、布の外でわい／＼とやつてゐる。

七月廿七日

三乙 井上春子

『姉さん姉さん』といふ聲がかすかに聞えた。『へー』と目をこすりこすり眠むたさをこらへて起き上つた。『どうしたの、朝早くから起して。』と云へば、妹はすました顔附をして、『千光寺へ登りませう。』といった。四時を打つ時計の音を聞きすてゝ門をくゞつた。途中は未だ淡暗く、残星はいまだゆう／＼としてきらく／＼かゞやいてゐる。何處の家かくしゆん／＼と咳／＼と聲が戸のすき間からもれて来る。妹がふいに『ここからもう石段よ。数ぞへ比べをしませう。』と聲をかけたので、『一つ二つ』と、やつとの事で石段を登りつくして赤堂に到着した。恰も五百七つの多くの石段をふんで來てゐた。ふと目にどまつ

たのは小さい黒板である。其れには山登の事がしるしてあつた。朝風はうよく／＼とたもとを拂ふ。其風にまじる簾の音はさ／＼と物すでし、一ひら三ひら落つる葉びらもいとど輕げである。家々の電燈の光ボカ／＼とあちらに散り此方に残りて美しく、遠くの小舟は何が何やらさつぱりわからぬ。妹は淨土寺山の方を指さして『あれ御覽あんなに太い紐をひいたやうに雲が赤うなつていますよ。』と指さした私は其方を望むと恰も妹の言つたとうりあまり美しいので、ばんやりしてゐると、後方でからころど下駄の音のしたので、ふりむくと小學生らしく、八九歳にもならうといふ少女五七人山登りの紙を持つて我さきと争つてかけ行くのであつた。折りしも五時の鐘ごとと耳にひびいた。

七月廿八日

三乙 小川キミユ

今日は舊六月十七日で、今夜は宮島様が海の上にお浮びなされるうでございます。私どもの村では高い／＼竿の端へ提燈をさげるのであります。清くすんな月がすうと上る頃、お隣の屋根の上には少さく

提燈が見えました。すると弟はたまらないように、さつろく提燈に光をつけて、お隣のよりもよつぽど高い竿にさげて、ほこらしげな顔をしてうれしそうにかけまわる。あちらにもこちらにも、競争のように高い竿に提燈を上げた。私はあんなことをしてどうするのだろうと思つても、がつてんがゆかないので父上にうかがうと、ひでろ昔のことを話して聞かしたいと思ふ父上だから、よろこんではなされた。先ずうちわをばしやぐうでかしながら『それは宮島様が海の上に浮んでおげがをなされないように、この提燈が宮島の海にうつて大層明るくするのであるといつて、昔から高いく打燈をさげるのである。』といわれたので、私はよもや宮島の海にうつりはすまいが、田舎じみたやさしい心はこゝにこそあれと思つて、なんともいひ様のない嬉しさを感ぜました。

二甲 大久保 季子

七月二十九日 木曜日

大阪の兄さんは商賣の上からどうしても明日歸へら

なければならぬ。それに私も妹もついて行く事にきまつた。二人はうれしい仕度を初めた。

折からお腹が少しいたみ出した私は、兄さんについて行かれないかと心配でならない。明日ついて行かないと、もう來年の夏休暇までまたなければならぬといふ、誰にも云はないで、お薬をそつと出して呑んでおいた。さて何があたつたかと、お腹をおさへくかんがへたがわからない。お腹はよけいにきりくどにがる。誰が云ふともなしお母さんに知れたと見えて、お母さんは私の所に來て、『季子は行かれないね。折角先生に割引券をいたゞいてもだめになつたね。』『それでも兄さんは明日お歸りだから、明日までにすつかりなほりますよ。』よくなれば行くがいくらけれど、流車中で兄様にお世話かけると氣の毒だからね。『私はかなしみといたみが満ちくゝて何もいへない。唯々なさないばかり。午後四時頃お医者様に電話をかけて來ていたゞいた。先生の云はれるには、『少し間食が多すぎた。』とおつしやる。私は問ふた、『明日大阪に行つてもよう御座いますか』先生は笑ひくゝ、『うれは行けないですよ。』うれを聞いていよくかなしくなつた。

時計の針はかつちん／＼とずん／＼進んで居る。明日の午前七時には。兄さんはもう家を出て居なさるだらう。どうして私は間食をしたのかしらん。私の爲妹まで行かれない。妹は私をしきりに憤つて居るだらう。

ゆうぐれ 一乙 井手 仲 の

七月廿九日

一坪にあまる小さい庭にバラ／＼と水をまくと、入り残つた太陽の輝が白壁に照つて、壁の輝が今打つたばかりの水に反射して、所々を赤く染めた。庭の木はポツ／＼としづくを落して、いかにも涼しげである。

湯から上つて、涼しい座敷へねころんで雑誌を見て居たら、お庭の方でにぎはしい聲がしたので、テスリによつて下を眺めると、芳ちゃんど六ちゃんど湯上り早くはだしで水まきをして居るので、二人とも浴衣の袖をしぼつて居た。その風がおかしかつたので、私が思はず吹き出したら、芳ちゃんが見つけて『私、姉さんのまねして居るのよ。』とすましていつ

た。

六ちゃんか又私の方を見やうと思つて見上げた時、石につまづいてすべつておひざをついた。平氣なかほで、『僕のおひざはまつくろけのけだな』といったので、尙更おかしかつた。まもなく母に見つけられて、『もうおよし』といはれてもなか／＼きかなかつたので、どう／＼二人とも母につかまへられて、浴衣をきかへさせられて居た。それから十分もたふないうちに、六ちゃんはグ／＼。ほんとに小供は無邪氣なものだ。

八月一日

一乙 稲田 ト

楽しい天神祭は明後日となりました。田舎の人は大勢出て、莫蔭屋は黒山の様であります。外では『西瓜西瓜』とどなる者、『なすびなすび』とさけぶ人『瓜瓜』と云ふ人、それぞれ人を自分の店に集めて居ます。がらがらとから車を引いて通る人もあつて、大層賑やかであります。

八月二日

一甲 藤井喜代子

今日、はこの月の二十一日にあるべき同窓會の餘興の役割を定めるので、小學校に來よ。と幹事の方から聞いたので、八時頃行つた。未だ誰も來てをられぬ。

先生に色々のお話を聞いてゐると、皆こられた。大方今年の卒業生だ。

四月以來別れて、久しぶりになつかしき學び家におかぬ友と語る。互の言葉もうちとけて、外にしよぼくど軒うつ小雨の音も何をさくやくやら。すること話すこと皆昔なつかしく、友の情をしみじみと身に味はふた。その内に役割は定まつた。

しばらくして幹事さんが、

『もう歸つてもよろしい。御苦勞でございました。二十一日には必むね。一人でも多く誘つてきて下さい。さよなら。』とよなら。』

私達は皆で面白いお話をしながら、仲善く歸つた。

八月五日

二乙 岩崎照子

御代島丸のとの三等室に荷物を運んで貰つた私は

此處から大阪迄の間の景色を見通すまじと、直ぐ甲板に上つた。四國山脈の高峰は遠く連つて、常に低い山許り見て居る私の目を。幾度驚かしたか分らない。その内幾つかの港を過ぎて、船は早くも觀音寺に着いた。此處は嫂さんのお國であるからとよく見ておく。高松に着いた時には太陽も西に沈んで、あちこちに散つた小島のまにまに、眞紅に彩れた空が見えます。私等の乗つて居る船が出た時に、尾道歸りの連絡船が、美しい西空のあなたに小さく消えて行く。懐しい様な氣がした。船艙に下りて、昔から作文や歌の中に賞せられて居る淡路島をきつと見やうと思ひながら、何時かうとくど毛布の上に横になつた。

眠られぬまゝに起きたのは三時一寸過ぎであつた。早く淡路島を見やうと思つて甲板に上つたけれども何も見えない。あたりは眞の闇である。船長さんに聞かうと思つて船長室へ行くと、丁度居られたので淡路島のある方向を聞くと、最う過ぎたところだ。私は最少し早く起きればよかつたと思つた。船が段々と進んで行く中に、向ふにイルミネーションの様に電氣が閃々と輝いて居るのが、一里も其の

上も續いて居る。其の壯麗なかがやき、それが海に映つて一層あたりを明るくする。私は何處だらうと考へる暇もなう、船長さんの説明に依つて須磨だと思はれた。神戸の港を離れた頃、夜はほの／＼と明け初めて、四面の絶景は丁度バノヲマを見る様である。間もなく築港を過ぎ河口に着くと、車にゆられながら兄の家へ行つた。玄關の障子をうつと開けて中を覗くと、丁度今朝御飯最中であつたが、皆が私を見てひつくりして、玄關へ出て來られた。其の中で姪の一枝が大きくなつて、頻りに大阪辯を使ふのが可愛かつた。それから朝飯をすまして、兄を會社へと送り出し、嫂と私は間ひつ間れつして楽しい一日を暮した。

八月六日

四乙 田中喜久恵

内藤先生が休暇になつてもしばらく當市に居られると云はれたので、廿一日からもやはり學校へ行つてしつかり教へて戴く積りで、何んとなく元氣を振つてゐた所が、終業式の日の夜、九時の汽船で伯父が來た。翌くる日には従妹弟達が尾道の田中へ行くので

でどん／＼大勢で來たので、終業式に思つてゐた通りに學校へ足を運ぶ事が出来ないで、残念で／＼たまらない。又母も『先生にすまない／＼』とは云つてゐられるが、どうしても行く事が出来ないのほど／＼困つた所が、今日は子供達も學校へ行くのだとて歸つたので、やつとひたひの皺がのび、支度もそこ／＼に登校した。昇降口に入つたら、ちょうど九時を時計が上げた。上履はほんの足端にはかけただばかりで職員室に入ると内藤先生はもうお國へお歸へりになつた後で大河内先生が一人何か讀書をしてゐらした。御面會いたして後、樂器使用して歸へる積りで、なつかしい我友四乙のルームへ來た。こはいかに、机もしきゐる床もほこりだらけである『まあ此暑いのにこんなにはこりにうまつてゐてはさぞいかに暑いだらう。』と思つて、すぐさま腰紐をどいて袂をくくつけて、掃いたり拭いたりした。隅つこのオルガンもほこり塗れになつて、始業式當時の元氣はさらにない。それでも不平をもらさぬ人待ち顔に私を待つてゐた姿が、余りにいぢらしいので内も外もすつかり拭いて終つた。硝子越しに校庭を見つめると、日がひどく照りつけるので目がくらみ

さう。汗はジワ／＼と頸からも脊中からも流れてくる。扇子を持つても生ぬるい風が起る計り。それでも室もオルガンもさつぱりとしたので、自然と私の氣も清々した。『ドレ是から練習をしよう』とオルガンに向つたら、『學校中には此のオルガンが一つにあらぞ。』とさうやく様な氣がしたので、さつさと他の室へ行くと、同じく何處も何處もほこりに埋まつてゐた。一つも残さず拭いて廻つた。自分の室に歸へつて樂器に向かつた時の心地のよい事といつたらどうてい私共の様な拙き筆には書き表はされない!!! 今日いさゝかな事であるけれども、私に取つては一學期中御世話になつた萬分の一の恩返しをした積りで、何んとも云ひつくされぬ嬉しい氣持でした。

〔日誌の中より〕

八月八日 日曜 一乙 中村喜代

『喜代さんく』母のやさしき聲に目を覺せば、東の窓より旭日はさし込む。『はつ』と思ひて時計を見るに正に五時。父上には最早朝顔の鉢を並べ、『今朝は吉野櫻錦美人など數多咲きたり。』等喜び給へり

朝起の妹は相變らす今朝も早起して『姉さん今起きたの、ねば助ね』と可愛き聲にて笑ふ。明朝は必ち早起きすべしと固く心に契ひつゝ裏庭に出つれば、朝顔は心持よく開きて我を待ち居れり、日は己に高く昇りて今日の暑さを知らせ顔なり。我はこれに對して何となく恥らへり。

八月九日

一甲 黒瀬古乃枝

奥の六疊間の方から左右々々……………といふ號令の聲、唱歌等が私の耳に入る。あまり面白さうなので、チョツとのぞき目をして見ると、マア……………驚いたではないか。

妹や弟が近所の子供等をよんで、妹が先生になつて父の洋服を着て、兄さんの帽子をかぶつてゐるのであつた。

やがて心はその方にうばはれて、ゐたが、私は突然『雨はいつまで降つても中々やみそうもない。』といつたら、側にのこされてゐた弟は、『でも姉ちゃんお菜やお大根や茄子を作る人はうれしうでせう。』こゝう誘ねたので、又もや私は、『なせ』と聞くと、弟

は、『水をやらなくてもよいから。』といったので一人ふき出した。例の先生は習字に甲、乙、の點を附けて、甲の分へは、ツバをつけて柱にはりつけてゐた。

すると、ノツリノツリは入つて来るものがあつた。それは母であつた。そしてどうも子供といえ者は、ムチャキな者だのうといつて、笑はれた。

八月十日

四乙 岡田 ヨシエ

待ちかねて居た姉様の御歸宅の日もいよいよ今日となつた。めでたく富士登山を終えてお歸りなさる姉様の御姿、まさか金剛杖にわらじはきでもあるまいが、早く見たくてたまらない。

七時の汽車といふに三十分も前から驛に出た。待てどもノッ、汽車は來ない。待つ人も待たれる人も今は同じ思なのでせう。やがて汽車が着いた。何處ぞらうときよろ／＼してゐると向に袴が見えたので急いでかけつけた。汽車の中から頻りに靴やら毛布やら私の想像した金剛杖ぞさなど出される。突然『姉さんお歸り。』聲をかけるとびつくりこちらを向いて、

『えつどうも御苦勞さま。』二人で荷物を運び、行李とどきは下男に擔がせて歸らした。二人は後から話しながら家にと急いだ。姉様がお湯も御飯もすむと皆で御土産話を聞く。富士登山の様子は二三年前に活動寫真で見た事もあつたが、實際昨日まで富士をかけ下りたその人のお話は又一入である。少しばかりの金明水銀明水を分けて戴いた。どうして又此の水が飲まれやうと、みんな舌鼓を打ちながら語る水に變りはないけれど、これがあの頂上の水かと思へばぬくもつた水も冷く感ぜられ、げに甘露の味とはこのことδεせう。しばらくして姉様は下山の時採集された植物を押されるのを手傳ふ。まだ雪にぬれた高山植物が採集箱へ一杯。こんなにたくさん珍しい草を見るのは、實に思ひがけなかつた。こんな所へ持つて來られて押される草も意外なことδεせう根のついたのを一本記念の爲にと日陰の所に植えておいた。

それがすむと姉さんは先達からのお勞れにぐつたりと夢の國でお休みなされた。



八月十一日

四甲 村上美津枝

親の恩

今日も向ふの湯殿の横で、一匹の親鶏が大勢のヒヨコを連れて遊んで居る。

親鶏がクツ／＼と云ひながら、くちばしで餌をさがして歩くと、ヒヨコ各々先を争つて親鶏の後を追つて行く。

と何時の間にか卵色の毛をしたヒヨコの中でも、一番可愛いのが一つ見えなくなつた。

何處へ行つたのだらう。又お隣のいち惡の猫にかまれたのぢやなからうかと種々考へて居る内に、妙な聲を立てゝ湯殿の曲角から親鶏の方に走つて來た。

よく見ると昨日叔母様のお家からもらつたばかり白『小犬』が面白がつて追つかけて來て居る。親鶏はキツと其方を見つめて居たが、ヒヨコが危いと思つたか舞ふ様にして飛んで行き、白の前に立ち塞がつたヒヨコはうれしさうにビョ／＼と鳴きながら、兄弟の側に走つて行く。小犬は親鶏の勢に恐れて何處かに逃げて行つた。

親鶏はヤレ／＼と云つた様な顔付をして、其處に坐

ると、ヒヨコは直ちにその周圍に集まつて、二三匹は親鶏の脊に乗り知らぬ顔をして居る。

私はホツと息をつくと同時に、今更ながら親の恩の海より深き有難さを悟つた。

ヒヨコはあんなに知らぬ顔して居るが、親の恩を知つて居るか居らぬか問うて見たい様な氣がした。

八月十二日

三乙 谷 靜 香

お留守居

小供のさはぐ聲もやんで靜かである。只城見橋を打つ音が聞えるばかり。私は机によつて新聞を讀んで居ると、ゴト／＼。はつと驚いでお臺所の方を見た。私は今朝旭町の姉様がいらつしやつたので大分力を得た。又もやカサコンと何だか物をさぐる音がする。『姉様何でしょうか。女の子ばかりだと思つて泥棒が來たのでしょうか。』と言ふと、姉様は『たいてい犬か猫かでせうよ。』と何氣なくおつしやつたけれど、今夜は二人だけだと思ふとこわくてたまらない。今まで讀みつづけて居た新聞を讀む氣にもなれないやがて廊下を忍ぶがようにコトリ／＼と低い足音を

さしてこちらの方へ歩いて来る様である。二度目には姉様も驚かれたのか、『ほんとに静ちやん何でせうか。』二人は息をころして耳をそばだてゝ様子をうかがつたがわからない。

勇氣を出して机を離れ、姉様の後をついて二足三足行つてそつと見れば、まあいやなシヨンだ。

此の時は二人共顔を見あはすばかりでした。ジョンはしきりに尾をふつて喜んで飛んでかけて來た。二人はやつと胸をなでおろした。『ほんとにお留守居する程心配でこわい事はない。』と姉様は言はれた。

八月十三日

二乙 高垣 當子

久しぶりでいらした祖父様は、さも嬉しさうにニコ／＼しながら、煙草盆をきせるでボンとたゞいて『もうお前恐しくてなあ。』と、去年の九月にあつた岐阜の暴風の話をして下さるのです。皆あきれて聞いて居ります。『どうどうとひどい風だな。家の隅がミシリ／＼といふものぢやで、子供が恐ろしがつてわしにかぢりついとるぢや。夜になつても中々やまない。益々ひどくなるばかりでなあ。家が倒れる。』

木が折れる。物凄くて一夜はまんぢりともせなんだぢや。朝、屋敷の廻りを見に行くと、目もあてられぬ様に、柿は落ちとるし、それからわしが若い時から大切に居た百日紅が折れてなあ。』『エッ百日紅が……』話はこゝで途切れた。

八月十四日

二乙 高橋 楠子

夕方庭に水を打つて居ると、御手紙が來た。ハット思つて裏を見ると、八月十日浦鹽斯德港バウロフスカヤ街亞米利加領事とある。こゝまで讀むと嬉しくて早く従妹の嬢子が知りたいと封押開いて見る。

皆様お障りは御座いせんか最早日本の國はお暑くなりましてでせうけれど當地は未だ寒くて袷を着て居ます夕方になると急に寒くなりますので油斷がなりませんのあなたは最う學校がお休みでせう私等は未だ通つて居ますの、どうぞさつして頂戴

後は母上に充てたお手紙。すぐに母上にお目にかけて私は返事を書き切手をはつてポストへ入れたが何だか氣に掛つた。

八月十五日

二乙 高岡 勳

夕立の跡

雨はやんだ。庭へは水が三四寸もたまつて居る。弟はつけぎで水車を作つて来て、新たに出来た庭の小さな川で轉して居る。

ふと妹がかけ出て、『姉さん虹虹とさけんだ。』すると弟は、『今は二時ではない五時だよ。』と言つたので、皆がどつと笑つた。晩にはすどしいからよく眠むられようとは母の話。庭の隅々から緑の香がたたようてくる。

さつと一陣の涼しい風が吹いて、軒の風鈴がチリン／＼となつた。一入涼しい心持がする。

八月十六日

四乙 黒川美左代

赤黄紫など色とり／＼の短冊が小さい竹にぶらさげられて、風のまに／＼ひら／＼とひらめいてゐるのや、下の横木に長い瓜や茄子や眞赤なほうづきがきれいにならんでゐるのが、どこの家にもちらほらと見える。今日は七夕様でございます。

昔から今日は養父のいかりにふれ給ひし七夕様が、一年にたゞ一度天の川を渡つて、中將姫様にお會ひになる日で、もしも今日一しづくの雨でもふつたなら、天の川に大水が出て、せつかく待つておいでになつた此の日もだめになつてしまふのであるといふ傳説を、私がまだをさない時、母のひざにもたれて子守歌の代りにこのお話を聞きながら、よくねむつたものです。このお話は、私にふかい印象をあたへたものと見え、どうしても忘れることが出来ません。なせか私には七夕様がお氣毒なのです。どうぞ今日も雨が降りません様に、あはれな七夕様の爲に。

今朝私は母様と二人で、鍋や釜や大盥を洗ひに川にまゐりました。まだ朝はやいので、何所の家でも朝の仕度にいるがはしさうでした。

今日は私等が一番がけであらうと思つて堤に上つて見ますと、もうお隣のおば様が何かせはしく洗つてゐらしやいました。まあおはよいこと。

その中にだん／＼太陽も上つて、四方がさわがしくなりました。群雀のかしましうさへづる聲も耳につきます。やれ／＼と腰なでさすつて、きれいになつた鍋やかまをさげて歸つた時にはもう内でも井戸が

への眞最中でした。またこれから其の御手傳ひ今日
は家内中皆んなほうほうの体です。

八月十七日

一乙 天 野 和

努力のたまもの

好いと思つたことは何でもして見たい。私は急に草
花が作つて見なくなつたので、今朝はいつになく早
起をした。

物置から鋤を出して下駄のまゝ花畠に行つて見ると
一面草ばかりなので、『それでも私の力で美しくな
るかしら』と一時は失望したが、先の楽しみを思つ
て勇氣を出して草を取り初めた。ほり反へされた草
は、妹等の手で一一取りのぞかれた。一時間、一
時間半……二時間と言ふものはたゞ夢中で草取りを
した。ほりかへされた土が立派にならされた時、自
分ながら美田と成つたのに驚いた。

草畠とするも美田とするも心一つ。此の時つくづく
と努力のたつとさと努力の利益をかんじた。

八月十八日

一乙 水戸川庫子

私の村の盆

私の村では、今日から盆である。夜に成ると老若男
女共に種々變装しておどるのである。女學生もあれ
ば中學生もある。下女もある。下男もある。主人も
あれば、奥様もある。昔のチョンマゲ結つた武士も
ある。其れはく様々に姿を變へておどるのである
此のおどりは今日から二十五日までが賑やかなので
ある。今月二十八日には、村の若者が奇麗な美しい
衣装を着て、玉の浦の觀音様までおどつて行く。其
の時の見物人と言つたら、とてもく、私みたいな
人里はなれた片田舎に起伏する乙女には、他の例を
あげることは出来ない程である。此のやうにして四
五日の盆をたのしく、且つ面白く過すのである。

八月廿日

四甲 松本智恵

唐紙を細目に明けてうつと室内に顔を入れると、強
い樟腦の香と幾すじもはられた細引にしんなりとな
れて居る美しい裾廻しの着物とが、直覺的に土用ば

しの美しさを思はせる。吸ひ込まれる様に入つて一寸細引をゆすると、華奢な絹ずれの音が起つて、其の度に赤紫空色などの照りはえた色が明るい室内にとけて流れさう。

私は何物か探さなければ止まない様な氣がして、其中をくぐりぐぐ見て歩くと、私の小さい時に着たあらい緋の黄八丈や、おなんごの地に淡色や水あさぎの入つたいかにも昔々したお召の着物等が、一寸も其の上も有りさうな大きなふきのまゝで、緋縮緬の紐も長々しうたれて居る。なつかしさに見られて居ると、是等のものは皆な私を圍んで、ビカ／＼光る緋珍の帯をしめて、シユウ／＼と指でしごいては悦んだ小さい時の私にしてくれるのでした。しばらくすると皆は又すうと開いて本の所へ歸りました。ちみな母の着物を超すと、又晴れやかな色の亡き姉様の婚禮の時の着物。人並より肉附のいく、色の白かつた姉様には、この金糸で大きくぼたんを織り出してある赤地錦の襟や、白赤黒の振袖の重ねもよく似合つた。三年前に主なき物となつた是等のものは土用ぼし毎にどんな思ひで室を飾るでせう。

八月二十二日

停 電

二甲 平 野 あい

夕飯を食べる時いつになく暗いので、どうしてこんなに暗いのかと頭を上げると、うのはず、今日はまだ電氣がついて居らない。いつも今頃になればつくのにとうした事かと、弟が外に出ていつたので、私もつづいて外に出て見たが、どこにも電氣はついて居らないので、ほんとにこんな事なら付けない方がましだといつて見た所で、消えて居る電氣が付くでもなし、仕方なしに内に入れば真暗。母様もこの電氣會社はお金ばかり高く取つて、度々停電するから仕方がないと小言をいつて居られる。少しの間なら我慢するが、一時間も二時間も真暗では何も出来ないど、ランプの支度をしてつけると、まあ暗いこと。それでも電氣の出来ない前はこれでよかつたのにと思ふと、さつき言つたことが恥しくなつて來た。うの時ふいにバツと明るなつて皆の嬉しさうな顔を照した。

八月二十三日

四甲 泉 隆

氣持ちのよいまでふきこんだ廣縁の柱にはつとたすきをばづして私はよりました。上氣する頬に手をあてゝ涼風の赤い振をはらふすがすがしさ。庭のばらがよく香ふ。

『おはがきがまゐりました。』

『どこから？』

ど、ひつたくる様にして見ると、あらつまらない秀兄様から母様宛なものですもの。今伊豆の伊東にいらつしやるらしい。『其後ごぶさたしましたが僕達四人は一日からこちらへ來てゐます。友達によくあふので淋しくはありません。勉強なんかそつちのわけで、小さい子供の様に遊戲をしたり、夜などは議論に花を咲かせてゐます。隆ちやんの金佛様は如何。アハ、。そろゝ去年の生活を思ひ出しますね。』ですつて。まあずいぶんな兄様よ。私を金佛だなんて。御自分ころ小兄様や勇美ちやんたちと一緒になつて日に三度も河童の子の様に泳いでばかり、おしまひには蛇みたいに脊の皮を一枚むいてしまつたくせに『桃はいりやんせんか。うまいんですがのう。奥さん。まあさういはずと買うてつかあさい。』つてうる

さい桃賣。私を奥様だなんて、やつと歸る。すると又

『おごうさん魚はいらんかの。』

いやだく。人を奥様よばはりして、お嬢様には見えないのかしら。悲觀しちまふ。

うちには田舎源氏があるつてきいてたから、こんな静な時にころと、あちこちさがしまはる。やつと簞笥の袋戸棚から見つけだした。所々虫すつて古くさい香が鼻をうつ。徳川時代のぞろりとした瓜實顔。國貞とかの木版畫で、本文は小さくくづし書にしてある。今ではちよつと見られぬもの。母様の御秘藏も無理ではない。私にはとても讀めないから殘念ながら繪だけ見る。それでも十三卷もあるのですものちよつとやそつとで見られませんか。なんでも光氏とかご主人公らしい。讀めればいゝのにね。東京のお家のお倉には、十三次や八犬傳なんかあつたつけこれは私がいたゞかう。こんな虫のいゝことを思つてゐると、

『姉ちやん』

つて可愛い聲。

『だあれ』

とあたり見まはすと、木戸の所におかつばさんがにつこりたつてゐる。

『あら友ちゃん、おはいりなさいな。』

『どしちゃんは？』

とお人形をきつと抱いたまゝ。

『どしちゃんね。よんよへいつたの。うのかはり

姉ちゃんがお話してあげませう。いゝでせう。』

黒目がちのはりのある目でこちらを見つめたまゝ、こつくりする。あまりのあどけなさに思はず紅葉の様な手を握りしめました。

八月二十四日

四甲 河野 キヌエ

『もう大きくなつたんですからお客様のある日なりと早く起きなさいよ。人に笑はれます。うれに明日はお祭りでもあるし』昨夜も斯う言はれて床に就いたのに、今朝も起きて見ると叔母様はお髪を上げて居られた。しかし八重ちゃんだけはまだたのしい夢でも結んで居るのか、手足を動かしたり笑顔を作つたりしながら、よく眠つて居た。私が顔を洗つて居ると、『おかアさん、人間といふものは誰れでも

同じ時期を通じて来るものでございますね。私等も十七八の時は眠むくて／＼いつも夜ならいゝつて思ひましたものね。絹ちゃん等がやつぱりうんなんでせう。』かう話して居られるのを耳にした。こんなに同情して下さるのですの、好きな筈ですわ。午後はすつかり掃除も終んでお湯にも早く入つた。町の家毎には皆提灯が下つて、道には一ばい水がまかれて涼しい冷たい風が吹いていかにもお祭りらしくなつた。お客様の叔母さんが何くれと手傳つて下さるのには感心した。

四時頃から社の境内でして居る神樂の鼓の音や、活動寫眞のふれやで賑やかであつた。七時頃には御輿が出た。間もなく伊勢音頭を歌ひながら自分の家の前へ持つて来て御輿を下した。そして水やお酒を飲んで眞赤になつた顔をして、汗をだら／＼流して輿を廻すのであるが、側で見て居てもこはい程で、とても近くへは寄りつかれさうにもない。私は外へ出るのがいやですから、叔母さんと二階の窓から見て居ると、昨日までシャツ一枚で櫓を漕いで居た船頭連中が、黒緞の紋附に袴を穿いて、常に持つたことのない扇子を持つて、御輿の後をついて行く後姿を

見ると、去年のお祭りから今日始めて着たのらしい後の方は皺だらけ、まして脊の低い人間が居るのですもの、丁度推茸の脊くらべのやう。中には小さな體に二十年前にも流行つた様な大きな幅の厚い丸帶を龜の櫃でも脊負つて居る様に脊一ばいに結んで、暑い汗の出るのもこらえて、これも後をついて行くのである。こんな連中の間を、田舎の祭なんて野暮臭いといった風に、白緋にタヲルをぶら下げて海にでも行くのか、通つて行く學生もあれば、都會から海水浴にでも來たらしいハエカラさんが、自分等と小學校時代に同窓であつた方等と氣取つて歩いて居るものもある。見て居ると人々の對照が面白い。祖母は親戚の叔母さんや従妹や下女や皆んなで活動寫眞へ行かれた。父は圍碁の會へ。たゞ家には福岡の叔母と私の二人になつた。これでも叔母の幼い時には二十三人もの家族だつたさうであるが、自分には想像がつかない。八重子は早くから寢て居た。この叔母は少し脱線的で、實母の祖母なんかとは話しが合はない。ろの上日本の文學に大層趣味を持つて居て何をしていらしても詩人の詠んだ詩や歌を口老さんでは『よく歌つたものだ』など一人で賞めて居ら

れるのであつた。二人でコーヒーを飲みながら女學校のお話しをしたり、叔母さんの意見も聞いたり、時には昔の人は思想とか感情などといふものは念頭になくて、その上進歩して居る現代の事にはわからずやで、話しをしても面白味がない等と昔の人をくさしたが、叔母は言つた、『こんな話してもおかアさんかお聞きなさつたらお氣に召さないから、よして面白い話してもしませう。ほんとに節夫でも居ればね、大學の話してもきかれるのにつまらないね、こんな田舎では。』絹さん、もう大分更たから眠むいでせう。おやすみ、私はおかアさまのお歸りになるまで新聞でも見て居ますから』つておつしやつたから、叔母様や祖母や父上のや皆さんの床をのべて置いて寢に就いたが、まだ社の鼓の音や道行く人の足音は賑やかであつた。皆様のお歸りは覺えないがかすかに氷屋の『寒氷、氷く。』

八月廿五日

母の髪梳き

三甲 兒玉千賀子

眞珠の様にすき通つた眞白い御飯に芳ばしい匂したる緑茶かけたお茶漬は、此頃の朝の好きな物の一つで御座います。朝飯後髪を梳かうと西のお椽側に櫛道具持出して解き初めました。屈んで髪のもつれを梳いてゐると、鈴元へ冷い風がスート浸み込で心地のよい事。バサ／＼とした油氣のない毛を根高く結んで、無造作にぐる／＼と巻いて置く。

傍に鏡臺持出して髪をどきつけてゐらつしやる母様は、

『マア、もう出来たの、油氣が無いからほんとに直ぐね。』

御自身の毛を左もうるささうに、幾度も／＼撫てゐらつしやるが、好い工合に止まらない。餘りうるささうなので、

『お母様、結つて上げませうか。』

『マア、お前に結つて貰はうかね。ほんとにうるさいから解いておくれ。』

私は母様の髪を梳くのは初めてだから、『ほんとにあんな多い毛が結へるかしら』と思つたが、餘り乱れて居るので、母様に渡された鋏を持つた。

まあ、此の鬘こはして私が又元の通りに結へなくて

も、一日でも保てるだけの束髪に結へようか？

『母様、ほんとに、こはしてもいゝのですか？』

『ええ』

『ほんとですか、こはしますよ。』

幾度も／＼不安さうに問ふので、『マア、此の子はオホ……………』

終に母様はお笑ひになつた。

私は思切つて元結の所に手をやると、鋏を持つた指先がふる／＼と微かに戦く。かすかに／＼！

思ひ切つてアツリと元結切れば、その細かな音を最後にバラリ黒髪は背に垂れた。バツリ／＼と鬢も鬢も一氣に鮮けば、マア大方は入毛ばかり。解く度にツル／＼と落ちて私の手に残つたのは、ホントニ／＼僅かばかり。握つた指先がかすかに震ふ。驚い

『まあ母様、このお髪！』

叫ぼうとしたが、それは悪い事とジツト思返して梳櫛取つてスーと梳いて上げる。少い髪を!!!三ッ指にも餘る少い毛を見ると譯もなう悲しうなつて、歎かじと強いては／＼笑む瞳がいつしか曇つて……………

『ほんとにこの髪が結へるしらか』

とは、果敢ない空頼みでした。果ては堪らず

『母様お毛が少くなつたのね。』

『ほんに少くなつたらう、六人の子供に分けてやつたものね。けれど母様は髪なんかも入りません。其髪を分けてやつたお前達が偉くなれば、母様なんか何うなつたつていふの。』

淋しうはゝ笑み給ふ母の笑顔が、今朝の空の様な澄んだ鏡の面に詔しう映るのでした。

私はほんとに若い母様のお毛を夢みて、今日になるまで何にも知らなかつた。よく私の少し時、髪結のお蝶やんが来て、母様の長いゝ多いお毛をスルゝと解いては、いつかふつくりした鬘が出来、ツトが出て、大きな丸鬘が結はれるのを、私は傍で何時もヂッと眺めて、『母様のお毛は多いのね。』と自分の猫の後尾位のお下げを省みては『私もあんなになるのか知ら。』と不思議に思つて、母様のお毛は長い多いものと、幼い夢を見て居たのだ。けれど其の夢は美しう無邪氣であつた――。其の長い多い母の髪は、短く少く、そつと我子に涙祖ませる様な果敢ないものになつて、子供達の毛は日にゝ美しう長うなつて行く。それだけ私も大きくなつて來た。母

の髪が變るやうに、總ての物が變つて居るのではないかしら。まだゝ私が幼い夢を破つて、實地に當つて見たら、どんなに泣きたくなる様な事があるかも分らない。胸にひそゝと忍び聲で不安が叫く。あゝもう母様も召した三十九歳。もう早白髪を見てくれといはれて、私が泣く時が直ぐ來るのじやア無いか。あゝそんな、私を母の白髪を見て、すゝり泣かせる様な時は、千年たつても万年たつても來ちゃいけない。人も我も、いつまでも何も知らない子供で居たい。あのメーテルリンクの書いた『青い鳥』の未來の國の様な……。あゝ母様、私も最う小さい子供じやア無い。こんな大きな束髪の鬘が、一人でクルゝと結へる様になつたもの。

母はだまつて、子は悲しい思ひに、變り果てた母の髪を、いつまでもゝ梳くのでした。風さやゝと吹く夏の朝。

八月二十七日

三乙 平田 スガ

妹のお人形

さつきから妹の勝ちやんにたのまれて居たお人形の

着物を、今やう／＼のことで縫ひ上げてはつと一息致しました。

をなんぞ色の地に白く亂菊を染め出しためりんすの着物が、赤い襦袢によく似合ます。時色しゆすの帯を格好よくたてこに結んでやり、勝子が入つて來たら一番に目につく様にと本箱の上に立せました。まあ其のかわいいひこと。

頭はお河童にして、大きい目のばつちりとした口もどのかわいひ人形は、丁度あの名高い夢二さんの畫にでもありさうです。

着物の柄と云ひ帯の色合と云ひ、それは／＼よく似合ふのです。私はあまりかわいひので、いつまでもぼんやりと打ち眺めて居りました。

あゝ勝ちやんがこれを見たらどんなに喜ぶでせう。早く來ればいひのにと思ひながら、机に向つてはら／＼と日誌の頁をくつて居りました。折柄、姉さんと云ひながら、二階のはしご段をこことと上つて來る音が聞えます。

八月廿八日

夏の夕暮

三乙 長尾タマ

夕餉を了へて濱に出ると、丁度夕陽は西の山に暮く頃であつた。紅雲は海に映つて夕ばえの空美しく、遠くから白帆二つ三つ歸つて來る。實に繪の樣ぞ。遠い島の端から段々暮れて來る。暮鐘は水を涉つて響く。漁船も大分歸つて來たのであらう、船歌かすかに櫓の音が段々近くなる。岩を洗ふ浪の音は、絶へずバシヤンバシヤン。賤が家に心細くも立つ煙は屋根をこめて次第／＼に消え行く。海のかなたより吹きくる一陣の涼風は、向ふに掛けられたる干網をゆるがして、ブーンと汐の香を送ってくる。舟のかへるを迎ひにきたのであらう。向ふの波打ちぎはにぼろの短い緋を着た女が、背には二歳ばかりの小兒をおひ、十二三の男の子を連れて、沖の方を眺めて居る。背の兒はすや／＼とよく眠つて居た。はるか沖合から一隻の漁船が、櫓聲勇ましく漕ぎ歸つた。その影がだんだんと大きくなつて、早目の前に近づいた時、伴の男の子が大聲に、

どーさん……………かへつたのか……………

お利助か……………もどつたが……………

女は無言である。やがて舟はいきなり砂の上に乗りに上げた。女は始めて口を聞いて、

魚獲があつたなあ……

あゝ今日はなぎでよいにされたぞ。……さあこれを持って去け。……ささし出した。

籠の中にはたくさんさんの鮮魚がびん／＼と跳ねて居た女と子供はそれを取つて砂地に足跡を印しつゝ、薄暮の中の消え去つた。

男はガタコタと舟をかたつけて居る。

沖の方から又櫓聲と調和して舟歌があちこちから聞えて来る。

八月二十九日

四甲 大山 芳 枝

竹やが里へ歸つたので薄暗い臺所での立廻り。お汁の實をきざむ時どうしたはすみか庖丁がすべつて指の先を切りかけてしまつた。丁度潮時だと見えて血が出て中々とまらない。

取敢へき石炭酸濕布で拭いて清潔な昇永綿紗をあてふさちんと縛帶しました。

けれどもどうしても痛くて／＼たまらない。

づきん／＼と刻む様な痛みが頭腦の中に響き渡ります。さうする中に短か夜はしら／＼と明けました。

石傳ひのお庭に下りますと涼しい御空に残る有明の月は灰白う葉末の露を照して居ます。宵には銀砂子をまき散した様に美しかつた星も今は残り惜しさうに光つては消え消えては又光つて居る。山のはしは次第々々に白み渡り今まで有つた月や星はいづこにか失せてしまひました。どこか知らず三番鶏の聲がすすかにする。まあ何て好い景色だらう。

あゝ自然こんな景色に接しては誰だつて心がさわやかになる。あゝ廣大なるカーニエーションは是を學術的に觀て引力を發見した。私は宗教的に觀察していひ盡くす事の出来ない天賦の恩恵を知る。暫く靈は遠く天外に走つて居た。突然耳元で工場の汽笛が勇ましく鳴つたのに驚いて家に入つた。

痛い／＼と思ふと無暗に痛くなるものと見える。半時間許りの散策で大變指の痛みもうすらいただ。本當に心程我儘なものはない。お腹が痛めば頭痛の方がはるかに好いと思ふのゝ元過ぐれば熱さを忘るゝよく言つたものだ。

心の苦痛等といふものも皆其通りで今我目前に遭遇しつゝある苦痛は嘗つて味はつた事のある其れよりも又誰のよりもより以上大なる苦痛と感ずるのだ。

らう。

何でも辛抱は一秒の間でなると感じました。

八月三十日

四甲 砂川 千代鶴

ふと目を覺せばあたり尙暗し。樂しきまどるも今宵限り。明けなば他郷の空に旅立つかと思へば、いよ／＼さめて益々眠れず。傍なる妹はすやすやといづこの夢路をたどるらん。いつかは知らずうつ／＼眠る。天地の森寂を破りて、明けの鐘遠く餘韻を残す起き出でゝ裏庭を徘徊す。高御位山はなほ薄靄の幕を長く引き、麓の連山ろが中に何をかする。東天漸く白く、黄く、紅を散らして陽々と昇れり。天の使命を帶たる明鳥は、はるかに高御位を掠めて去り、一秒、又一秒、一分、又一分、かすみの幕は何處へか持ち去られて、神々しく姿をあらはしぬ。我を忘れてしばしこの景に眺め入れば、小猫一匹足元にもつる。御飯を戴き、叔母様の御宅へお暇に行きぬ。十時、人々に送られ車上の客となりぬ。汽車は墨の如き煙を吐きつゝ西へ／＼と走りはじむ。御着、姫路、龍野の平野は次より次に移り行きて、山又山の

中を、佛に會へば佛を殺し、祖に會へば祖を殺し、道に當るものは盡く突きて進む。福山より乗客あり五十の坂を二つ三つ越えたる人、我が前の席につきぬ。松永につく頃、其の方より尾道女學校の言葉もれたれば耳を傾けて聞く。『尾道の女學校は何でございます綿密に教へます様で、私の子供が一人まゐつてをりますが、中々説明などよくやりますが、どうしたものか大きな事はだめでございます』『へえ、さうですか』『しばらくは車輪の響のために聞えず』『……は大体の事は何でも知つてをりますが、細い事はさつぱりでござんす。學校によつて違ひますなあ。』今一人、『尾道の生徒は言葉つかひが悪うてなあ。』汽車は止みぬ。我は下車せり。後の話はきくに由なし。

八月三十一日

二甲 東 芳 枝

今日はもう三十一日。長いと思つて居た四十日間のお休みも夢の間に過ぎてしまひました。さあ私共は夏休みにたくさん遊んだかばりに、これから一心に勉強しなければなりません。

今日も、お母様どうらの小母様と、お話をしてい
つしやいました。『お休みがおしまひになつてやつと
安心しました。』『お子供さんが學校へ出ておしまひ
なさると、静かで淋しくなるでせう。』『子供が家に
居るとがや／＼してうるさいのにへいこうします。』
といつておいでになります。私共がどうしてうるさ
いかと思つて、考へました。それに、お母様は子供
嫌ひといふことに、氣がつかしました。
私共は二學期からしつかりと勉強し、うるさくない
やうにして、お母様を安心させて上げなければなら
ないと、堅く／＼決心致しました。

八月三十一日

二乙 岩 崎 照 子

夕方から明日の支度をしました。靴は靴足袋や靴べ
らと庭に並べて置きました。枕下には袴や着物と言
ふまでもなく、明日持つて行く荷物から、ハンカチ
さては散紙まで、ちやんと重ねてあります。

床に就いてもなか／＼眠られません。胸の中は明日
の事で一ぱいです。丁度運動會に行く前の晩、お辨
當やお菓子を入れた枕下に並べて、明日の事が

嬉しくて、夜更ける迄眠られないで、うればかり考
へて居るのと同じです。目を眠ると學校の事がパノ
ラマの様に次から次へと湧き出て來ます。パノラマ
は廻り廻つて寄宿舎の方に辿りました。お父様やお
母様や、可愛い弟や妹に別れて來られるのが見えま
す。はつと思ふと、襖でしにお父様の電の様な鼾
聲が聞えました。

冬季休業日誌

十二月廿五日

三甲 廣 川 イ ト

もう一週間足らずで年は去る!!! 華えある乙女十七に
なるのだ。十六、十七、十八。いつ迄いつたら止ま
るんだらう? 腕のうすら紅みに、高鳴る血潮のささ
やきに、乙女てふ誇りを一ぱい含んでゐるのだ。實
に活動の時だ。やらう、やりませう、矛盾した今迄
の自分。不勉強だつた自分——を捨てゝしまつて、
新らしく一生懸命に努力してやらう! 一學期の末。
夏休み中、二學期からは、二學期に入つてはど力ん
でゐたその二學期も相變らずに不勉強に不成績に終

つてしまつた。あゝ來年からは、來年ころこのまゝでおくものか。ギユツと強くにぎつて、白い型の付いた手は機械的についで電燈のスキツチをひねつた闇々——自分はいつと立つて闇の窓からくびを出した。ほてつた自分の頬に夜風が心地よい。目さわりになる向ふの火がたまらない。ポツリとたつた一つ海に火が見える。其がぐるぐると廻る。其は勝ち誇つた友の顔にも見える。怒氣を含んだ父の顔にも見える。二分、三分、弟が入つてきた。手さぐりで電氣をさがしてゐたが、自分の影を見て何か言つた。けれども自分は知らん顔して火をまばたきもせず見つめてゐた。暫らくして、弟等二人がうつと自分ののぞきに来た。

あゝうるさい。誰れも來ない黒闇のたゞ中で、たつた一人しづかに考へて見たい。

十二月二十五日

一甲 吉井千代子

空が少しく曇つて居ります。又今日からお休み。楽しいお正月も來るのだと思ふと嬉しくて一人は、笑いました。先日の校長様のお話が身にしみて、早

速今朝ははね起きまして、箒や雑巾を持ちましたので、今日は雨が。降るだらうと皆の者に笑はれました。お晝から兄さんのひじ突を縫ひました。いつの間にもやらボタボタと庭の小石を打つ音がします。私は思はせ知らず『まゝ雨が』と歎息の聲をもらしました。それは今朝の皆の笑草がほんどうに事實となつたからでした。

十二月二十六日

二甲 楠生幸江

朝起きて外を見ると、『オヤ、どこぞでくすばらして居るのではあるまいか。マア此の煙。』私はびつくりしました。よく見ると霧でした。

私はこんなひどい霧をはじめて見ました。十間ぐらゐさきは少しも見えませんが。

たゞ浄土寺山のとつべんの方が淡墨で畫いた様にぼんやりと浮んで見えます。

浄土寺山の中腹にあたる邊より淡いオレンジ色が色づいてくると、だんぐと町の霧が淡くなり、浄土寺山がこくなりしました。

マアその美しさ。だんぐと霧が淡くなると、眞赤

なお日様が淨土寺山から顔を出しました。ける大山
《親戚》にあかちやんが生れたので、お魚をもつてお
使に行きました。

十二月二十六日

一甲 藤井喜代子

弟を抱いて裏に出る。霜で白くくちた茅をのけると
下から今出たかと思はれる福壽草がのぞいてゐる。
南天の眞赤な實が重さうにたれてゐる。銀杏の木が
箒を立てたやうに、高く雲を拂はうとしてゐる。畑
隅の山茶花を取つて來て花瓶を挿す。

西國寺の祭なので、夜になると、三々五々打連れて
參詣人が通る。お母様と參詣して歸つて、早く寢に
就く。

十二月廿七日

四甲 岡田 カツヨ

今朝は霞が深くてすべて模糊として居た。こんな日
は兎角暖かい。金魚も今日は優々と浮んで居る。八
重椿が一輪美しく開いた。幹に似合はぬ大きな花
で、其の様がほんとにいちらしい。祖母さん始め、

『まあ此の花は可愛らしいではないか。』と、お目覺
に皆かう云ふのであつた。弟は朝早うから空氣銃を
ひつさげて走り廻つて居る。鼻の先を眞赤にして居
た。『制雄、鳥には、目もあり、耳もあり、羽根もあ
るよ。』と伯父様はこんな事を云つてからかひなさる
すると又梅の木でキリキリとモズが高い聲を上げる
弟は又からかはれるものだから笑ひながら駆け出し
てしまつた。

午後母上にお手紙を書く。弟も書いた。此の手紙を
取り上げられた時、お母様のお喜びなさる様子が偲
ばれてなつかしさに堪へなかつた。今日ばかりは空
飛ぶ鳥の翅も羨しく、大平洋を渡つてロッキートの山
高く、ミシシッピの流遠き北米の地に旅行して、
やがてなつかしき母上に取り上げられるフットウの
境遇も羨ましくて堪らなかつた。かうして又私共の
消息を傳へてくれるこの手紙にも深く感謝した。世
の文明は有難きものだ。後父上在生の頃送り下され
し本等取り出して弟と二人で飽くまで話した。弟が
五年前の幼き淡き記憶をたどつて、思ひ付くまゝに
いろ／＼な話を聞かせるのがどんなに嬉しいか知れ
ない。さうして又こんなに大きくなつた弟を、母さ

んが御覽遊ばしたらさぞ涙ながらにお喜びなさるだらう、又父上在生ましまさば、弟もどんなに幸福だらう。だけど世の中の事は皆運命だ。まだ両親なき人も多からう。より不幸なる人に比すれば、私共はまた幸福だと思つた。然し弟が、『姊さん僕は父さんが大好きだつた。』と云ふ。其の時私は、『制さんお父さんを覺えて居て』と云ふのに、萬感胸にせまり、暫らく何とも云くぬ感に打たれた。弟は又いろ／＼な話をする。自分の氣に向いた時はいつもからかつてばかり居た制さんが、こんな好い子になるのかと思つた。何だか此の頃は急に私の云ふことをよく聞くやうになつたやうだ。

午後は八千代さまを訪れようと思つて居たのだが、風を引いて居るので祖母さんがとめられるから行かなかつたのだ。

夕方私と君ちやんとで無邪氣なお話をして居ると、門先の柚子の木へたくさんの雀がとまつて居たのが一時にバット羽音を立てて飛び去つた。後で胸毛の柔いのが二三本フワリフワリと落ちる。黄い實は二つ三つひしばんで居る。夜は少しばかり讀書した。僅かに數枚であつたけれども、私はこれによつて大

なる教訓を得た。『天は自ら助くる者を助く。』

十二月二十七日 日曜 晴 一乙 安本クマヨ

朝は早くから車の通る音が聞える。ゆつくり寢て居る事が出来ない。『誰かあの人はよく働く人だな』と元氣よく床を離れた。妹もついて起きる。私は着物を着かへさせたり、顔を洗つてやつたり、随分いそがしかつた。すると弟が床の中で、『あばく』といふ聲がする。奥に行つて見ると、布団はけり捨てゝおる。『おや』とだき起してやると大さう喜ぶ。牛乳をのまして置いて、我家を後に、『水戸川さんも多分おひなつたであらう。御約束の遊びをして楽しまう。』と誘ひに行つた。

十二月二十八日 二乙 井上ヒサ

冬の曉

仰げば残月が淡く松の梢にかゝつて、東の空は薄紅の色を見せて居る。月窓を窺ひて雀軒端にさわぐ。西天なる残りの月影一つ霜のおりた屋瓦のはたりを

照しつゝ消えて行く。裏の叔母さんの家には朝餉を焚く竈の煙が繪にもしたい様にうすく長く空中にたゞよつてゐる。紅の雲もいつのまにかうすらいで、はてはコバルト色の空が山の端にあやしの雲をたゞよはせると思ふと、木枯の風颯と咲くや枯葉をまき、て身も骨も凍れよといはんばかりに吹いて来る。顔洗ふべく井戸端にたたすみし我も、思はず首を縮む葉一枚もついて居ない柿の木は、冷かに立つて、鶏も啼かない。あゝ淋しくも明けはなれたる冬の曉かな。

十二月廿九日 木曜日 晴天 三甲 木曾アサコ

柱時計は淋しく十一時を報じた。私は讀みかけの本を下において、ヂット耳をすまし。寒風が折々障子を音づれて、コト／＼と音をたてる。夜は沈々と更け渡り、萬物皆寂として眠つて居る。つと立つて障子をあげた。折からの寒月は、冷い光を地上にのびて居る。遙向ふに豆粒ほどの燈火が、光つたり消えたりして居る。しかもそれがだん／＼どこちらに向つて來て居る。一体何であらう。ヒューと云ふ物

音と共に、ピリ／＼と身をさすやうな寒風が、私の頬をかすめた。思はずぞつとして、とたんに障子を閉めた。と思ふと、何だか向ふの方から人の足音が聞えて来る。私は又もや障子を開けた。するどさつきの燈火はもはや我家の方へ近づいて居た。『どなたであらう。』私は一人つぶやいた。靴の音はいよく近い。やつと顔形がはつきりして來た。私は我を忘れて、『兄さま』と大聲に叫んだ。まさしくそれは兄さまであつた。うれにしても、歸るとも何とも云つてよこしてはいらつしやらないし、こんなにおそくなつて、ほんとに兄さまは變な方だ。一同大笑。開けば尾道に着いた時、十六錢五厘持つて居たが、十錢でキヤラメルを買ひ、六錢で葉書を出したので、天にも地にも五厘より外ないので、渡賃を五厘出して、歸つたこの事、みなのはオホ、アハ、と笑ひ聲をもらしながら、床に入つた。もう三日で目出度いお正月。妹等は無邪氣そうな顔つきで、楽しい夢地を辿りつゝ。

十二月卅日 三甲 檜垣保世
ふと目醒めて臺所に行つて見ると、母様は昨晚から

あまり氣分もおすぐれなされぬのに、私にだまつて一人朝のお仕度をして居られたので、びつくりして母上に私が代つて朝の仕度をした『母上様どうぞおやすみなさい私が代りますから』と云つたのはよいが、私が御飯をたくといつも下から上まで眞黒くして、皆さんから濫い顔をしられる。又今日も例の通りかしらん。でも今度は前よりは少しは上手になつて居るかもしれない。等といろ／＼な事を思ひながらバケツを持つて裏の井戸に出た。朝はまだ大分早いやう。畑の上や道の上には一面に眞白くなつて、丁度雪でも降つたかのやう。水を汲まうと思つて繩を手に取れば／＼とすべる。いくら力を入れてもだめ。今朝は起きた時から寒いなど思つて居たが、ろのはづ。水溜の水は悉く氷つて、この繩でも氷つて居るんですもの。井戸の中をのぞいて見ると水際か一つも見えない。只眞黒な中をつり上げるつるべがだん／＼と上にあがつてくる。口には青々とした苔が一ばい生へて、其の上にダイヤのやうなきれいな玉がすかつてほんどうに奇麗に見えた。汲み上げた水をバケツに入れてザ／＼と白いお米を洗ひ始めて見ると、其の音が如何にもさえて私の耳にひび

いた。軒にさへづつて居た雀が井戸側近くよつてきて、さも感心したらしき様子。まあ雀は私のこの音によつてきたのだなど思つて自分の前を見ると、手がお留守になつて小な溝へたくさんのお米をこぼして居た。もう今日の御飯も失敗。始からこんなんだからどうていろいろな事が出来やうはづがない。失望しながら歸つた。まもなく水晶のやうな米はお釜の中に入れられた。雑誌を讀まうと思つて持つてはきたものゝ、お釜の方ばかりに氣をとられ一頁もなか／＼ではなかつた。しばらくしてシュウ／＼とお釜がなり出す。グ／＼と泡を吹き出す。私はもうちつとして居られなくなつた。心配と嬉しさが一所になつて早くふたも取つて見たいやうな、又こわいものゝやうな氣がして、もじ／＼して居る内にお釜は静まつた。早速ふたを取ると白い湯氣がぼつぼつと立つ。其の中に心配の目を見張つて見ると、まあ嬉し。それは／＼思ひがけもない地獄の底で佛様に會つたやうな氣がした。まあ／＼このきれいなつやのある御飯、一人臺所でよろこんで居ると、父様がこれこれ、『それ／＼又あのおこげかへ。まあそれはお前に上げやう。又あんなになつたらたべられたも

のではない。『おかしさをこらへて』『これごらんない
またこんなになつたの。一生懸命になつて居たんで
すけれど、どうしたんでせうか。』『まあいゝわどれ
見せてごらん。』私は堪忍袋の緒がきれて一時にふき
出してしまつた。あてがはづれたお父様『おや／＼
／＼お前でもまあ猫よりはましだな。今日はさあ、
雨が降るにちがひない。あの空の色を見よ。洗濯物
は早く家の中に入れておけ。』など、さん／＼ひやか
されたけれども、自分の心棒した御飯がきれいに
出来て、母上にさし上げ、父上と私とお膳に向つて
いたゞいた時は、又格別嬉しかつた。

十二月三十一日

一甲 岡田三樹枝

過去の思出

朝から四疊半なる我が室に据つて、椿の花の一片二
片と落つるを眺めつゝ、大正四年を如何にして過
したか、或は單調に、或は平凡に、此の一年間は實
に忘れ難い時であると思ふ。

三月廿七日に六年間も交はりし友と別れ、初めて慕
はしいと思つた師の君とは泣いて／＼別れた。其の

時『別れは辛い。』と思つた。しばらくして何も知ら
ない學校に來た。其の時は恐ろしいと感じた。入學
して四五日立つても見ず知らずの人ばかり。只同じ
學校を卒業した人達と、鳥の轉を聞いても花が咲く
を見ても、思ひはやはり小學時代に走せて居た。私
は人一倍學校を慕つて居つた。一學期間はつまらな
く過したが。二學期よりは充分なれたので、忘れ
る事もあつた。そして遂に今日に至つたのである。
前を思へば長く、後を考へれば短い物である。今日
は大晦日なのでお正月の用意にいそがはしい。私の
用意は唯靴のみがくだけ。

十二月三十一日

一乙 稻田トミ

今日は大晦日であります。私は色々のかたづけをし
て、先づお湯に入つて今年の垢を残らずおとし、夕
食の膳に向ひました。外では行きかふ音や自轉車の
りんがいろがしさうに聞えます。嗚呼之が今年の最
後の活動であります。此の中にはお正月を楽しく迎
へることの出来ない人も澤山あるのだらうと思ふと
何だか氣の毒な氣がします。いつしか日も暮れて、

人通りもない様になりました。私はじつと一年中のことを思ひめぐらして見ました。今年は學科も不成績で非常におはづかしい次第でございます。來年こそは心の晴氣を着て、あのつく手毬の様に、落ちれば又上るといふ忍耐心をもつて、學びの庭にしそしませう。今宵十二時の鐘が鳴れば一月元旦。お喜びしい。明日は先生を始として親しいお友達にあふて、目出度い拜賀式を行ふことが出来ると思へば、樂しみが先にたつて、どうしても眠られませんでした。

十二月卅一日

二甲 繁村 マツ

晦　　う　　ば

『へえ唯今お歸りでございます』と毛布を肩に掛けた船頭の聲がして父上が出務先からお歸りになつた明れば年改つて元旦であるから今年は父様も御在宅の事なれば御客様も多からんと云ふ所から床の掛物置物から裝飾と色々心をいたため元日のお献立まで母上と二人で忙がしかつた。是の冬休みには私がよく御手傳したとて母上ははくく物。昨日あつらへて

置いた『そば』が出来上つて來た。夕食は蕎麥と云ふので弟のうば好が大喜び。母様はそばだしに心を盡していらしやる。昆布を拭くやら松魚節をかくやら御父様は茶の間の長火鉢の側で『うまくせよ』何んか仰せられる。おそばも出来上つたので隱居の祖母様もいらして家内一同楽しく晦日そばを戴いた。弟は少さいおかさにそばを盛つて『東京うばエ東京うばエ』等云つて戯け廻つて居た。今日のおうばは割台においしかつたど何時もお小言云ひの父上から御賞の言葉を頂戴したので母様と私の鼻が一尺も高くなつた。天狗よりも高くなつたわけだ。後に蓄音器をして遊ぶ。リンゴを戴いて奉祝會の時のウィルヘルムテルを思ひ出して思はずはく笑んだ。

一月一日

四乙 加藤 静 枝

まだ夜中かしらと思ふ頃飛び起きる。流石寒がり屋の私も、今日許りは若水でと揚子くはへたまゝ水を汲む。鐵の鎖が冷やりと冷めたい。ふと仰ぎ見る空暗澹。一つ二つ額にかゝつたのは雨？露？ 盃一順終つて屠蘇の香が室中に漲る頃、空

の明るみを硝子戸越しに眺めやつて、妹等は嬉嬉とする。それも暫時、折角昨夜磨いて置いた靴を泥だらけにして式から歸る。萬事休矣！だと悄氣かへつて居ると、かつぎ屋の叔母様が、『元日早々降り込むとはお目出たい事だ。』ですつて。物は考へやう一つ。それもさうと考へなほす。あゝ静かな元旦だ。束ねて投げ込まれた年賀狀の中から自分のを選び出す。墨色濃き封書繪ハガキとりごりに、友情の濃い人々情の身に泌みくぐと嬉しかつた。試筆の後で年賀狀を書く。人はいさ知らず私は忙がしい師走に、てんで『お目出たう』なんて書く氣がしない。受取る人の心は？私は私の流儀を押し通すつもり。歌留多の聲も、笑ひさんざめく聲もなう、元旦の夜は静かにくぐり更けて行く。

一月一日

二乙 高垣當子

つねにやかましどのみ思ひつる雀の聲さへも、千代々々とおさまる御代の目出たさを祝ふが如し。ほのぼのどあけそむる空はきのふにかはらねど、新玉の年たちかへりては何となう改りぬる心地ぞする。御

代萬代とたてつらねし松は、門毎にときはの色をあらはし、君がみいつの光をかゞげし日の御旗は、軒ごとに高くひるがへれり。はるかに千代田の宮をふしおがみ、さぐれいしのいはほとなりて苔のむすまでいやさかへにさかえませと祈りつつ、静にすぎし一年をかへり見るに、何一つとしてなし遂げたる事なきははづかしき極みにこころ。されど、『一年のはかりごとは元日にあり。』といへる諺に因み、今よりは一しほ學びの道にいそしみて、かかる御代の御恵の萬分の一だけにもむくいたてまつらんと堅く心に誓ひぬ。やがて雑糞を祝ひ禮服をつけて我校の祝賀式にむかふ。ほどなく式も終り、師の君や友達に別れをつけ、はなやかなる小路を我家へとたどれり。午後は約束のまにく、正午過ぐるごと一時ばかりに、日頃親しき某の君と友がり音なへば、はや中垣のへだてぬ人々あまたつどひませり。しばらくにして皆人もそろひければ、いよく仕合ははじまりぬうちならべつつかの歌はこゝに、此のうたはかの君の御まへに、など思ひつつあるほどに、一人の友の清うすみたる聲もてよみ出たさる。例により源氏と平氏との二つにわかれ居ることなれば、いたく心や

すらかならざりき。幾回も勝ち、あるひは負け、なごする内、太陽は西へかたむきたれば、思ひ／＼に家路をいろさぬ。

一月二日

三甲 中村シズヨ

朝 湯

ガラ／＼。『いらつしやい。』私が格子を開けて入ると番臺の女が斯ういつた。

『オ、寒い。』と云ひ乍ら手拭を引搦んで湯槽の中に沈んだ。朝湯の事で未だ人込も少く湯も澄んで奇麗であつた。浴客は僅か五人で皆暖かさうな櫻色のはだをして居る。僅か五六人の中にも老人も居れば若い者も子供も居る。其の中に常より親しかつた福山女學校に行つていらつしやる方に會ひ、色々學校の様子等をきき、又お話し等もして、話はそれから／＼へと上つてふと氣のついたころは、二人とも身體はつめたくひえて居た。隣を見ても老人どうししきりになにか話して居る。話に余念もなかつた二人は、やがて湯槽の中には入つた。とたん熱い湯が、『アッ、』小さい子は周章で飛出した。其の様のを

かしき、一度に湯の中をにぎはせた。ぼつ／＼上る支度をして友達と一所に格子の外に出た。二三十歩あるひて別れなければならぬ。『又遊びにいらつしやい。』ほんどうに出でなさい待つてゐますよ。』さよなら。

一月三日

三甲 平井淳子

丁度九時頃でした。私はひとり本を読んで居りますと、玄關の方で『お家も繁昌に祝ひませう』といつたので驚いて見ると春駒でした。姉妹らしい二人の小娘がしよばふる今日の雨の中を赤のたすきを十字にあやどり、はだしでゐるのです。姉は私位妹は未だ十にも足らぬ位でした。姉は拍子をとり妹はおどりをして少しばかりの小錢を集め、日々の暮しに苦しむ父母を養ふかと思へばこの可憐なものに對して同情せずにはいられない。あの姉妹は私等姉妹を見て何と考へただろう。あの方のやうに本も讀みたいお正月もたのしく過したい、又妹はあの子のやうに絨も羽子板も持ちたい、晴着もききたいと思ふだらうと思へば、思ふほど同情にたへない。あの姉妹には

父母もあらう、私にもお父様もお母様もある。同じ父母でも色々ある。我が子に養ふてもらうものと、我が子を教育するものとある。我が父母は實に有難い。この机の一例でわかるとる。この机は昨年の二十八日に出来たのである。我が家には机が澤山あるけれど皆高さが低い。私等が大きくなるに従つて低いのでは姿勢が悪くなる。よつて衛生によくない。父母はさういふ小さな所にまでも心を配つて、私等のために計つて下さる。實にありがたい。今更身にしみて感謝にたえない。

さまざまの思ひはあれど子を思ふ

思ひにまさる思ひなきかな。

一月五日

四甲 石原タマエ

今日はふとこんな事を考へた。女の口はうるさいもの、人の心は頼まれぬものと云ふ事をしみじみ知つてから、私は運命といふ事や自分といふ事を眞面目な態度で考へる様に成つた。昔から『女子と小人は養ひ難し』などといはれるのは何故であらう?と云ふ様な事を考へる様になつて、私の頭は益々冷靜に

成るばかりであつた。女は虚榮の權化であるとか、嫉妬心が深いとか、三人寄れば喧ましいとか、随分腹の立つ様な諺が幾つとなくこれまでに云ひ傳へられてゐる。しかし私等は之に向つて立派に反抗する事が出来るであらうか。否々これを爲すにはまだまだ幾年かの修養をつまねばならん。女子が常に親友といひ合ふ両者の關係はどんなものであらか。苦樂を共にし、死を共にするといふまでの精神があつてこそ、眞の親友であらう。現今の女子の間に於て、親友を持つ人が幾人あるか。もし有るとすれば其人は實に幸福な人であらう。よく『人を見たら敵と思へ』と云はれてゐるが、實に悪魔は我等の周囲に充滿して居る。そして私等の弱い少女をとりこにして餌にしようにと、するどい爪を以て待ちかまへてゐる。一足しきゐをふみ出せば、四面は悉く敵であるに、私等は『自分は清い乙女である。』といつて平然として居らるべき場合でない。十分なる覺悟と強固なる意志とを以て、悪魔に犯されぬ様、益々美しき乙女にならねばならぬ。今の場合新しい女だとかそんな事を彼れ此れ云ふ必要は無い。只女は何處までも女らしく、女子の天職を全うして行けばそれが

立派な女なのである。

一月六日

三甲 三谷ヨシコ

今日は久々で大阪の叔父様がお出になつたのに肝腎なお父様がお留守だし、その上下女が風で里に歸つて居るので、母様が御愛想して居らつしやる間に、御飯焚を命ぜられた。寄宿舎にはいつてから、久しく経験した事もないので大方忘れかゝつてゐる矢先に、こんな大役を命ぜられて一方ならぬ苦痛だ。稀にお出たお客様に若しも不出來な物でもさし上げてはと心配したが仕方がない。思ひきつて棚にあつた一升ばかりを磨ぎ始めたが、女中等が磨いで居るのを聞く様に、サツクサツクと音樂的には行かない。丁度赤ん坊の水悪戯の様にチャブチャブといやな音がする。お釜の中へ入れて水加減を見ると、丁度中高指の二の節まであつた。これだけはいつか『料理の友』を讀んだお蔭でよく覺えてゐた。火をたきつけてから二十分間程は少しもくごの前を離れず火の番をした。暫くするとぐつぐつ煮返り出したので、心配しながらそつと蓋を明けて見て居ると、折悪く

もお茶を取りにいらした母様に見つけられてお目玉を戴いた。今度はしきりに焦げ臭いので蓋を取つて見ると、まだ水が澤山浮いて居る。この上焚けば焚く程焦げつくし、もう心配でたまらないので、母様に聞き行くと、側で聞いて居らした叔父様が、『そんなでは家事は落第だね。お前達の様な娘さんをお嫁に貰つた者は災難だ。旦那さんが毎朝御飯を焚いて、御味噌をすらなければならぬ。僕等は眞平御免だねハッ、』となかなか顔にも似はぬ事をおつしやる。『叔父様だつても駄目でせう』と申しますと、『お氣の毒様だがね。僕だつても書生時代には立派な自炊生活を味はつて來たものだ』と、中々お鼻が高い。ほんとに意地の悪い叔父様だ。あれで學生時代にはもつともつとお人が悪かつたに相違ないと思つた。母様に手傳つて貰つて漸く御飯が出來た。その中料理屋からも御馳走が届いたので、一時過ぎやつとお晝御飯を出した。

一月六日

三乙 島谷敏江

今日はいつになく早起したと人々に笑はれる。笑は

れるも道理、親しき友の歸郷を送るべき日であるから。食事もそこ／＼に友のが訪つれるとこなたへど請じるまゝに奥の一間に入る。陸言のこれから彼れ、かれから此へど盡きさうにも無い。用意の整ひし由宿の者のいふまゝに、二人は發車に遅れぬやうつきぬ名残を惜しみつゝ停車場へ行つた。プラットホームに入ると、同じ志の友垣も二三先着して、互に別を惜しみつゝ暫く話す間に、友の乗るべき流車は黒煙を吐いて到着した。

友はやがて車中の人となつた。送る人送らるゝ人、別れの言葉のどよみ勝ちなる時、流車は揺れて煙のみ残つた。互に打振るハンケチも見えずなつた時、恍惚としてあつた私の肩を、傍の友はツツ叩いた。ア、いつ逢へる事だらうかと、思は千々に碎けて踏む足も定まらず。頼母しき情けある友よ、幸くあれど路々祈つた。

一月七日

冬 日 和

三乙 高竹 ヨ シ

朝の十時頃、二階に上つたら寒さを忘れる程。背の

丈も一寸程延びたやうな氣がする。朝の太陽は障子一面を照らして、室内は大う明るい。時には目ぶしい程の事もある。が、とにかく好い冬日和だ。

障子に小猫の影が映つた。そつと障子を明けて小猫をなぶつて見た。げに邪氣の無い動物である。頸を撫でゝやつたら、面を上にとらして喜んでゐたが、私の手をなめ出した。あのごついどげがガサ／＼と音を立てゝ厭な音だ。けれども余り可愛いので我慢してゐた。

やゝして猫の前へ紐をなげたら、それをくわへて遊んだ。たまにしたりして余念なく遊んでゐる。私も可愛い小猫の守りをしてゐた。すると『チツチツ』と綺麗な小鳥が一羽竿の端に止つて、啼きながら無暗と尾をふつてゐた。やうやくの事で、猫君はうれに氣が付いたと見えて、視を定めてゐるが、鳥先生なか／＼に氣がつかぬらしい。小猫はろ／＼近よつた。折から隣りのいたづら坊つちやん、仲間を二階に呼んで來た。要談忽ち一決したのか、さぞ好策が發明されたのだらうと思ふ間もなく、窓からぶつと空氣銃の玉が飛んで來て鳥にあたつた。ぼつちやん達手をバチ／＼打つて喜び勇んでゐる。ど、猫君

鳥の落ちたのを天の恵みと、それを啣へて、雲を霞と大屋根へかけ上つた。凸坊達あつてに取られて、目をバチクリ／＼さしてゐる。

私は不意の出来事に唯々ぼんやりして、小荷の行衛を眺めずには居られなかつた。

競點地理

尾道發二見浦東京松島善光寺を
見物して歸る道順及び途中の都
邑勝地を記せ

第二學年乙組 岩崎 照子

私ば先づ汽船で大阪に行き、關西線により龜山から參宮線により二見浦見物そこから同線をとる龜山から名古屋まで同じく關西線で行き名古屋で乗つた中央線を塩尻で篠井線に移り篠井より信越線で善光寺に參詣し再び信越線で篠井を過ぎ高崎で兩毛線小山で東北線となり岩切で塩釜線に乗り塩釜から松島に遊び再び同線をとる岩沼から常盤線で東京に行き歸路は神戸まで東海道線に乗り神戸から山陽線で尾道

に歸つた

今此途中及び沿線の大都會名所舊蹟を採るに瀬戸内海は流石世界第一の海上公園といはれるだけあつて一度商船會社の船に乗り尾道を發すれば數多の島々は相連つて行手が盡きるかと思へば又忽ち開いて廣い海となり先づ保命酒の產地鞆津に着く此處から輕便鉄道に乘れば福山から山陽線に連るのである。此處を後に過ぐれば鬱蒼たる松林の海に映じたのや我が汽船の波の爲に小さい漁船のゆらぐのを興じながら見て居る中早多度津が眼前にある若し汽車に乘換るならば善通寺や金刀比羅のある琴平に行かれると思つて居る中船は早いかりを上げる間もなく着くのは高松市である香川縣廳の所在地で後樂園に勝ることも劣らない栗林公園あり源平の戦つた壇ノ浦の古蹟も程遠くはない小豆島の寒霞溪を愛でつゝ千鳥の鳴くてふ淡路島を右に見ながら明石海峡を通れば白砂青松の舞子須磨などを賞する間に帝國第二の開港神戸に着く船が棧橋を離れると氣の早い人は遙かにかすむ大坂を指して上陸の用意をして待つて居る大坂は流石第三の開港帝國一の工業商業地で府廳控訴院第四師團司令部各種高等專門學校世に名高い神社佛

閑多く点在し附近に寶塚濱寺箕面等の遊覽地を控えて居る東海道線南海電車關西線は此處に接續する湊町から關西線に乗り奈良縣に入ると王寺に着く和歌山線を出す次に法隆寺を訪ひ奈良縣廳東大寺春日神社正倉院三笠山等數多の名所古蹟があり南に櫻井線を出し談山神社吉野山畝傍山に行かれる奈良市を過ぎ木津で奈良線を出し笠置の史蹟月ヶ瀬を訪れ鈴鹿山脈のトンネルを抜け出せば龜山となり參宮線に乘換へ三重縣に入り縣廳所在地の津市や本居翁木綿織で名高い松坂を過ぎ伊勢大廟のある宇治山田市に下り大廟を參拜し二見浦を見物する神さびた千古の尊さを目の邊りに見る様な心地がする海路尾州に連絡船はあるが波の危険を慮り龜山まで後返りし再び關西線で四日市に着く綿絲を産し新進の將來有望な開港である米の取引き萬古燒で有名な桑名を後にすれば開港名古屋市中に着く縣廳控訴院及び離官金の鯨に名高い名古屋城高等學校高等工業學校があり近く熱田神宮があり町は規則正しく中京の名に恥ぢぬ東海道線關西線中央線の接續地である。碁盤目なりの市を隅なく巡り紀念碑陳列館などを眺めたる後中央線に乗り岐阜縣を掠め日本アルプといはれる木曾山中

や木曾川上流の寄景覺床を車窓より眺めながら塩尻で篠井線に遷り松本市の藪の大集散地を後にして田毎の月の娘捨山を打過ぎ篠井から信越線で長野市に行く市中の善光寺は善男善女の詣でる者後を絶たず附近の千曲川と犀川の合する所に上杉謙信と武田信玄の勇ましい戰話の幾千代までも香しく匂ふ川中島がある市は又縣廳所在地で善光寺中に立つて居る大都會である汽車で北進すれば深雪の高田直江津より左は親知らず金澤に右は五港の一新潟に通ずるので有る篠井までは同じ信越線を戻り東して淺間火山の雄姿や避暑地の輕井澤を一覽しアプト式の碓氷峠を越え右手に奇岩怪石の妙義山左手に榛名山赤城山を眺め鐵道の中心地の高崎に着く即ち高崎線兩毛線信越線の接續地である縣廳の所在地の前橋市と共に生絲の市場である兩毛線により前橋市を過ぎ伊勢崎錦仙を出す伊勢崎絹織物を産する桐生を眺め栃木縣に入つて絹織業地の足利藪大麻の取引所の佐野栃木をよこざり小山に到着する小山は東に水戸線西に兩毛線南北に東北線の便がある今や松島を指す我は東北線により十四師團司令部縣廳の所在地の宇都宮市で日光線に乘換れば自然と人工の美を盡した日光を

見物する事が出来る北進すれば附近郡須塩原に温泉が湧く白河は帝國第一の馬の取引所であり附近に白河の關跡がある郡山で岩越線を出し福島市に至る奥羽線の南起點で縣廳が在り蠶卵紙繭生絲の市場である岩沼で常盤線を出す仙臺は縣廳控訴院があり奥羽第一の都會で東北帝國大學も此處にあり仙臺平埋木細工の名産がある北方の岩切で鹽釜線に乗り鹽釜から松島に行く芭蕉の『松島やあゝ松島や松島や』と言つたゞけあつて其の美しさは私の様な鈍き筆にはとても寫し取る事は出来ない寢覺といひ妙義といひ松島といひ皆々幾千年の絶え間ない水蝕生成である由は講義で覺えた所であるが絶え間ない力は偉大な事の出来るものである岩沼まで同じ道をとり常盤線に依り日本三公園の一の常盤公園のある水戸を過ぎ東京に着く世界屈指の大都會宮城各國大公使館諸學校諸官衙があつて政治交通工業商業教育の中心地である總武線東北線東武線中央線東海道線等を吐く様はさながら蜘蛛の巢の如く市内は電車を縦横に通ずる見物終り東京驛から東海道線に乗り山手線を出す所の品川をよこぎり神奈川縣廳所在地の横濱市に至る帝國一の開港で輸出入共に各種備らないも

のなく各國領事館正金銀行があり北方よりは八王子に横濱線を通ずる大船よりは横須賀線を出し沿道の鎌倉は京都奈良に次ぐ古蹟の多い所である附近に江島逗子の名勝がある藤澤まで電車で歸り保養地の大磯國府津を過ぎる茲から左に箱根山彙があり昔の關所の様や今の交通發達の模様など察しながら御殿場を後にして富士を仰ぐ勝區の沼津田子ノ浦興津三保松原等があるうの間には芙蓉峯正門ともいふ大宮口があり富士の急流をも越える縣廳所在地なる静岡市は紙茶の取引所であつて電車に乗れば開港の清水に行く事が出来る當港は茶を輸出し將來有望の開港場である附近には已に述べた三保松原久能山の東照宮がある濱松には附近に古戦場の三方ヶ原がある十五師團司令部のある豊橋は豊川に沿ふて長篠まで豊川線が通ふ岡崎は徳川の創業地である名古屋市を打過ぎて右手に小牧の古戦場を見ながら岐阜市に汽車は止まる縣廳所在地で鷗飼岐阜提灯に名高い縣境の關ヶ原は不破關跡養老の瀧と共に其の名は世に高い琵琶湖畔の米原で北陸線を彥根で近江線を草津で草津線を出す縣廳所在地の大津は製麻業榮え附近の延暦寺園城寺は古の名刹である琵琶湖に湖上汽船京都に

疏水のインクラインの便がある近江八景は大抵湖畔に在る京都市は府廳十六師團司令部等のある所で山陰線東海道線奈良線の接續地で西陣織友禪染を産し附近の嵐山高雄などをはじめ歴史に名高い神社佛閣が多い大阪附近より福知山線を出し神戸に至る縣廳湊川神社がある貿易の輸入額は日本一でマツチ綿糸を出す附近に一ノ谷鶴越の古戦場があり見物の客をしてそゞろに昔を偲ばせる須磨舞子明石の保養地はさきに海から見たのど比して誠に面白い姫路市は十師團司令部を置かれ草細工の産が多い和田山に向けて播但線を出す遙かに左に忠臣義士の名を轟した赤穂がある船坂墜道を越し岡山市に至る縣廳十七師團司令部を置き津山に中國線を宇野に宇野線を出し宇野附近には内海唯一の無線電信局があり四國へ連絡船を出す又市には日本三公園の一つ後樂園がある神戸から山陽線になつて以來峽い平野を走り低い丘陵を縫い時々海岸に出る度に内海特有の絶景がちらちらと目にうつる笠岡を過ぎ廣島縣に入れば福山の美しい城を眺めて製鹽の中心地の松永の驛を離れると暫らく分れて居た故郷の尾道に歸るのである

同 上 第二學年乙組 岡崎 淑子

旅路の支度も整ひて愈々尾道驛を出發し、松永福山笠岡も夢の間に過ぎて吉備津神社を後にすれば中國第二の大都會縣廳の所在地岡山市に至る。花菱を以て名高く日本三公園の一なる後樂園あり、岡山縣を出づれば直ぐ南方二里に赤穂あり三田尻と共に鹽に名高き所なり。東へと進めば第十師團司令部の所在地、姫路に着す。白鷺城にて知らる。此處に於て播但線分起す。城を後にして高砂の松に名高き加古川進みては明石須磨浦の白砂青松なる海邊を眺め左に平家の大敗せし一の谷を眺めつ、横濱長崎と共に開港場にて世に聞こえたる神戸に至る。忠臣楠氏を祭れる湊川神社ありて、又外國人の住むもの多し。此處に於て東海道本線に乗りかへば花崗石に名ある御影、有馬寶塚の温泉を過ぎて帝國第一の商業地帝國第二の大都會且又我が國一の工業地なる大阪市に着す鐵道右往左往に通じ第四師團司令部始め控訴院等存在し東京に並ぶ繁華な所である。櫻井を過ぐれば大阪市に次ぐ大都會たる京都市に着す。京都御所二條離宮を始め古蹟神社佛閣第十六師團司令部帝室博物館ありて又西陣織陶器漆器等の産物を有して實に

工業の盛なるを示す。京都府を出れば滋賀縣廳の所在地大津に至る。日本一の大湖なる琵琶湖を左にひかへ、麻蚊帳の産多き八幡を過ぐれば、北陸線に分起點米原に達す。姉川の戦地關ヶ原の古戰場赤坂の大理石の産地等を後にすれば、岐阜縣廳の所在地鵜飼縮緬提燈傘等に名高き岐阜市に着す。大垣と共に美濃米の進散地にして縣一般に美濃紙によつて名高し、小牧の戦跡を眺めて昔を偲びつ名古屋市に至る、第一金のシャチホコに聞こえ第三師團司令部控訴院を始め諸種の高等の學校熱田神宮あり。又陶器綿絲時計等を以て工業地を知られ、附近の知多半島より知多木綿を産す。これより中央線の車中の人となれば近邊の長湫多治見を過ぎて、木曾の山地へくくど進む寢ざめを賞し鳥居峠を後にして篠井線の起點鹽尻に達すればこゝに於篠井線に乗りかへ姨捨山茶臼山を眺めて篠井に至る。これより少しの間信越線に乗れば武田信玄上杉謙信と戦ひし川中島を後にして第一目ざす長野市に着す。一番に善光寺に參詣すれば參拜者織るが如く其の他數多の名所を見物し、再び信越線に乘車し千曲川のはとりを南へ南へと進めば淺間山をびえ避暑地に名ある輕井澤に至る

此處に於てアプト式の鐵道により確水峠の山地の景色を眺めつ、信越線の終點地なる前橋と共に生絲繭の市場高崎市に着す。これより兩毛線に乗りかへ目的地なる松島へと向へば、間も無く群馬縣廳の所在地前橋市に至る。縣下一般製絲絹織物に帝國中屈指なり。銘仙の産地伊勢崎羽二重の産地桐生を過ぎて栃木に入れば、絹織業地の足利あり。此處より程遠からぬ所に兩毛線の終點小山あり。これより東北線の車中の人となり關東平野を眺めつ栃木縣廳の所在地宇都宮あり。日光線を分ち日光に立寄れば善光寺に劣らず參拜者多く規模壯大にして筆舌に盡し難し再び第十四師團司令部宇都宮に歸りて鹽原の温泉を左にして福島縣に入れば、白河の關趾を後にして程遠からぬ帝國第一の馬の取引地白河も過ぎて、福島縣廳の所在地福島に至る。宮城縣にいれば一刻一刻と目ざす地に近づいて縣廳の所在地控訴院高等學校第二師團司令部の存在地埋木細工の産を以つて名の聞こえたる仙臺市に至れば鹽釜線にて間もなく目的地なる松島に着す。芭蕉の讀みし

松島やあゝ松島や松島や

の俳句を頭にうかべつゝ彼方此方に散在する島々の

間に／＼遊覧船を浮かべ、楽しく愉快にゆるゆる一日遊び東北線にて岩沼に至り常磐線に乗り移りて、只々太平洋の海岸を一直線に進めば茨城縣廳の所在地水戸侯の舊城下にして日本三公園の一なる偕樂園の所在地水戸市に至る。此處より葉煙草の產地太田に水戸鐵道を通ず關東の一名山たる筑波山を左にして小山に至れば東北線と乗りかへて、高崎線の終點鐵道院大工場の所在地なる大宮を過ぎて程なく上野驛に着す。此處に於て暫らく大日本帝國の都なる東京市を見物す。宮城帝國議會議事堂大審院近衛第一師團司令部外國公使館を始め名所舊蹟を訪ねて東京驛を發し品川を過ぎて東京灣を左に眺めつ大森川崎をへて、横濱に至る。帝國第一の貿易港にして各國領事館正金銀行等ありて帝國第四の都會なり大船より横須賀線にて鎌倉に至れば謂はれある鶴岡の八幡宮圓覺寺大佛寺等存在し風光明媚なり。南なる横須賀は鎮守府存在し浦賀と並びて造船盛んなり。汽車は再び東海道線に歸り江ノ島大磯の避暑地を眺めつ、蘆湖箱根山富士登山で名ある御殿場等を過ぎて沼津に至る。田子の浦三保の松原と共に富士山を仰ぎ、前途有望なる開港場清水も過ぎて茶にて聞こえたる

静岡市に至る。竹細工漆器の取引多く大井川天龍川の鐵橋を渡り三方ヶ原の古戰場濱名湖を過ぐれば豊橋に至る。第十五師團司令部あり。渥美灣を左にして徳川氏創業の岡崎を過ぎ名古屋に着す。此處にて關西線に乗りかへ清水と共に前途有望なる開港場四日市に至る。萬古燒の産ありて龜山に於て參宮線に乗りかへれば程なく津市に着す縣廳の所在地にして伊勢海を左にひかへ知多半島の内海に海底電信を通ず。南なる宇治山田市に至れば、先づ五十鈴川にて體を清め内外宮に參拜す自ら神々しく尊く感ぜられた。まのあたりに二見ヶ浦の勝を眺め名殘惜しくも少しの間にて此處を出發し、再び參宮線で龜山に至りこれより關西線の車中の人となる。後醍醐天皇の當時の有様を思ひ出しつゝ、笠置山も過ぎて奈良縣廳の所在地女子高等師範學校春日神社等に名高き奈良市に至る。左窓に眺むべき四條畷は櫻井と共に楠父子の忠烈を仰しむ。關西線の終點なる湊町を後にして大阪市に至れば、商船會社の汽船多くの人を乗せ棧橋に着す。澤山の人に交じりて皆んなと一緒に乗りてひたすら尾道へとおもむけば、海上の景色又面白く大小無數のはかけ船拍子面白く櫓にあわせて

歌ふ漁師の歌を聞きながら、神戸を過ぎて舞子須磨ノ浦を後にし明石海峡を小波にゆられながら寒霞溪にて名高き小豆島に立寄り、栗林公園にて聞こえし高松に至る。汽船の發着はげしく鏡の如き静けき海の面を西洋人の世界の公園とまで賞せしものつとも、の事と思ひつゝ通りて多度津も過ぎて保命酒に名ある鰯を經入しふりに懷しき尾道に歸る。

四甲 河野キヌエ

私は我が國の貿易についてお話を致します。

我が國の貿易で輸出の最も超過して居ます國は、布哇は特別と致しまして、第一位を占めて居ますのはアメリカ合衆國で、次が支那フランス香港關東洲伊太利と云ふ順で御座います。

アメリカ合衆國へ輸出致します年額は、一億四千万圓で、輸出品は、主に生糸茶銅羽二重花莖等でございます。そして我が國へ輸入致します品は、棉花石油鐵釘類小麦粉等で御座います。

次に支那へ輸出致します年額は、八千万圓で綿糸綿布石炭砂糖マツチ等を、向ふからは棉花油糟芋麻類

鶏卵等を買ひ入れます。それで我が國は支那から原料品を輸入して加工品を又彼の國へ輸出して居ります。しかし近年は機械製糸榮へて、上海附近の綿糸は日本印度のそれに影響致して居ります。

フランスへは我が國から四千五百万圓程輸出して、生糸羽二重眞田銅等を出して、向ふからはその額より五百万圓では御座いますが、輸入品の主なる物は毛糸羊毛香水香油藥品アドー酒等を買入れます。此れを以て見ましてもフランスが如何に奢澤品の工業が進歩して居りますかごわかります。先頃も東京の三越へ小さな一瓶が二十圓も致します様な香水が参りますと、それが羽でも生へて飛ぶ様に賣行が早かつたと云ふ事が御座いますが、これ等は我が國に取りましては憂ふべき事で御座います。

又香港へは二千五百万圓程輸出致します。それは主に石炭銅マツチ綿糸鰯等で、輸入品の大部は砂糖で御座います。

關東洲は支那と餘り變つた事は御座いません。その額は一千九百万圓で、向ふからは一千万圓輸出します。その主なる物は油糟豆類作蠶糸等で御座います。伊太利は我が國から一千七百万圓即ち生糸羽二重珊

珞等を輸出致しますが、伊太利は既に絹織業の發達して居る國で御座いますから、我が國から買入れた生糸は更に精製品として歐米諸國に輸出して居りますのですから、我が國では是が直接に歐米諸國に輸出する様に務めねばなりません。向ふからは絹布帽子水銀ブドー酒等を買入れれます。

布哇のホノルルは桑港や南米の二航路に當つて日本品の輸入が割合に多いのは、主に我が八万人の同胞の需要を充するためと思ひます。其の品は米清酒醬油履物綿布等を輸出致しますから、我が國が布哇まで擴張された様で何とも云はれない程うれしい様な氣が致します。只今申しました様な國々は輸出品の重要な仕向地で御座います。

今度は輸入額の超過して居る國について申しますと第一印度で、我が國へ輸入致しますのは一億六百万圓で、その主なる物は綿花で次は米であります。我が國から一千九百万圓程輸出し綿メリヤス羽二重銅マツチで御座います。それで我が國は印度に對して原料品を買入れて加工品を輸出して居る形で御座います。又印度は棉を他國へ輸出する位で御座いますから勿論自國產の綿で綿製品を拵へてこれも支那方

面に賣捌いて居りますが、近年は我が國の綿製品にたはされて居りますから愉快で御座います。

次はイギリスで御座いますが、我が國からは二千五百万圓程輸出して、あちらからは九千五百万圓輸入致します。そして輸出品は羽二重銅眞田米絹手巾等を出し、輸入品は鉄綿布機械硫酸肥料毛布等を買入れます。

獨乙へは我が國から僅か製帽用の眞田羽二重等を出し、獨乙からは鉄乾藍藥品毛糸アニリン染料等を輸入し、其の高も輸出に四倍して居ります。今度の歐洲戰爭以後鉄が非常に高くなつて來ました。藥品の中には百倍以上に價上した物もあります。それに毛糸なんかほとんど品切れになつて居りますし、アニリン染料等も非常に高くなつて來ました。しかしこれ等の品を他國から求め様としましても求める事は出來ません。これ等は全く獨が特有のものでございますから、他の國ではそれが出來ません。それで日本等でも今は藥品の製造を試みて居ります。獨乙がアメリカやフランス等と文明の程度が違はない國で御座いますのに羽二重生糸等の輸入の少ないのは、一ツは彼が質素であり又自國產の物で需用を充さん

として居る事が何かはれます。

滿洲は我が國と取引多く我が國の輸出品は移住同胞に需用さるゝ物多く、貿易は主に我が神戸大阪と大連營口等に行はれ、我が國より綿布木材清酒を出し我が國へ豆糟大豆小麥等を輸入致します。

濠洲へは羽二重硫黄硫酸肥料を輸出し、羊毛鉛小麥粉小麥等を輸入致します。

彼の様な國々は我が重要輸入品の仕入地で御座います。

別に擧げて申しませんが、ロシアに於ける我が生糸はシベリア鐵道の運賃が下られました以來、モスクバを大仕向地として前途有望で御座います。

まして歐洲戰乱以後ロシアの商人は直接日本の商人と貿易がしたい等と申して居りますから、將來は我が國の好得意先きとなる事と存じます。

最後に我が國の貿易の大体を申し上げます。

我が國の貿易は、朝鮮臺灣を除いて輸出額が六億三千万圓、輸入額が七億三千万圓で御座います。それで年貿易額は約十三億六千万圓となつて居ります。

そして我が國には三十七箇の開港場が御座いますがその中で横濱は輸出が多く、神戸は輸入が多く御座

います。次は大阪門司四日市長崎清水等で、後はこれに次ぐものでございます。

そして我が國に於ける貿易の發達進歩の度合はほんとに驚く様な物がございます。しかし之を歐米の先進國に比べますと、其の額の非常に少ないばかりでなく輸出品には半製品未製品又は手先仕事で出来たものや、奢侈に關した様な物が多うございます。生

糸は輸出品中の首位を占めて其の年産額も約二億圓に達して居ります。けれども是は半製品で御座います。又麥稈眞田も同様で御座います。こんな半製品未製品又は原料品等を輸出しますのは、其の國の工業の進歩してゐない事や未開な事を示すので御座いますから、成るべく此等の物に加工して輸出する様に致さねばなりません。しかし彼う申して参りますと如何にも我が國は工業の振はない遅れた國の様で御座いますが、決してさうでは御座いません。近年我が國の紡織業は非常に發達して参りました。印度及支那アメリカ合衆國等から繰棉を輸入して綿布綿糸メリヤス等をして主に支那香港方面に盛んに輸出して居ります。印度は我が國と肩を並べるアジアの工業國で御座います。それで主にボンペー附近に綿

糸を産して、先き申しました様に支那を得意先として居りますが、我が國の物にたはされて居ります。又印度では我がメリヤス肌衣はイギリス獨乙の産を壓し、マツチは瑞典産をも凌いで居ります。こんな事はほんとに愉快な事であります。

一口に申しますなら歐羅巴洲の貿易は精製品を輸出し、原料品食料品を輸入して居りますが、アジア洲の貿易はこれに反對で原料品食料品を輸出して加工品を輸入して居ります。又亞米利加はヨーロッパに對しては主に原料品を輸出して精製品を輸入して居りますが、亞細亞に對しては精製品を輸出して原料品を輸入して居ります。

貿易上我國民の注意しなければなりませんのは、未來に於ける英吉利獨乙の商勢の發展と支那人の商業能力とで御座いませう。

今度の歐洲戰亂の爲歐洲各國が莫大な費用を投じ大切な人命を失つて居りますのは惜むべき事で御座いますが、其れ以上に大きな影響は、それ等の國の産業の發展が止むる事で御座います。今迄主に産業に従事して居ました男子が少くなるので御座いますから、此の産業がたとへ戰爭は止みましても元へもど

りますのは容易な事ではないと思ひます。それで此の機に乗じて我が國は今迄輸出しなかつた國迄も戰爭のおかげで輸出する様になつて居りますから、此れを續けて彼等が我が國が好得意先とする様に務めて我が國の貿易が急遂の進歩をする様望んで止まない次第で御座います。



學校彙報



學校日誌摘錄

(自大正四年六月
至全五年五月)

○第四學年クラス會 六月二日午後一時出發向島干
汐方面へ遠足を行ふ。

○古錢類觀覽 六月四日古錢類を講堂に陳列して生
徒に觀覽せしむ。三原西町某氏の蒐集に係るものな
り。

○兒童學會 市教育會及醫師會主催の兒童學會講演
會を本校講堂に開く。講師三田谷ドクトル高島教授
及富士川博士、六時閉會

○辭令 六月十日附を以て古山教諭新潟縣へ出向を
命ぜらる

○早縫競争 六月十六日早縫競争を行ふ。八時半開
始、材料は一二年は襦袢、三四年は單衣なり。入賞
者氏名等左の如し。

仕上ケ時數	点數	得一分間	年級	氏名
一、〇〇 分	一五五	二、五二	一甲	橋本ヒデコ
一、〇五	一七六	二、七〇	二甲	和田イキヨ
一、二二	一五七	一、九一	三乙	壇上ハツヨ
一、二七	一七九	二、〇六	四乙	瀧道芳子

右披露式を廿五日に舉行し賞狀賞品を與ふ。

○辭令 六月十七日附森教諭任命の辭令あり

○辭令 八月十日附下瀬教諭病氣のため依願本職を
免ぜらる

○辭令 九月十日附上田教諭新任の辭令あり

○始業時變更 九月十三日より朝會開始午前七時五
十五分、第一時始業八時十分と變更

○遠足 十月六日摩訶衍寺に遠足す。雨天の爲め二
回も延期し三回目此の日漸く好天氣を得たるなり
午前八時半栗原村三叉路に集合、北、摩訶衍寺に向
ふ。途中、三成小學校にて休憩し家定村より登山。
山頂にて中食、四時集合點に歸着解散。

○戊申詔書奉讀式 十月十三日第一時講堂に於て戊
申詔書奉讀式を行ふ。詔書の御趣旨并に當時の世態
を説き現在及將來を戒むべき旨訓示あり。

○八幡神社參拜 十月十五日第四時八幡神社大祭に參拜す。

○十月廿二日 前市長西村益三氏送別の式を行ふ。

○御眞影拜戴 十月廿四日午後四時五十分發、杉野校長は三次書記を從へて廣島に向ひ翌早朝縣廳へ出頭 御眞影を拜戴し午後三時三十七分尾道驛に着す。此日雨繁く泥濘甚し。三宅教諭は級長副級長及び校友會委員を率ゐて驛に至り 御眞影を奉迎す

市よりは助役塚本書記橋本吉兵衛氏島居幸雄氏宮崎憲之氏坂井善兵衛氏等同じく奉迎す。

御眞影を捧持せる杉野學校長の車の前には警衛として警官一名先驅す。沿道の家々には國旗を掲揚して奉迎の敬意を表したるさへゆかしきに心利きたる家々にては主人を始め家族店員等邸前に整列して

御眞影を奉迎する様ゆかしともゆかし。留守の職員生徒は校門外道路の左右兩側に分れて奉迎後供奉の列に入る。御眞影は玄關より直に講堂に入御 三宅教諭は包装を解き御櫃に納めて奉安室に掲げ奉り御扉を閉す。

次に奉拜式を行ふ。式次第左の如し。一敬禮(樂器合圖)二、開扉、三、君が代、四、職員生徒市會

議員順次奉拜、五、閉扉、六、敬禮(樂器合圖)○辭令 十月廿五日附を以て上村教諭名古屋女子師範學校へ轉任を命ぜらる。

○運動會 十月廿八日午前九時十分運動開始、午後三時二十分滯り無く終了。此の日風強く寒さ亦烈しかりしかども觀覽者頗る多く數十番の演技は活潑敏速に行はれたり。當日のプログラメ左の如し

開會		午前九時	
一	體操	一年	甲乙
二	電車遊び	二年	甲乙
三	綱引	三年	甲乙
四	棍棒	四年	甲乙
五	徒歩	一年	甲乙
六	キヤプテンボール	二年	甲乙
七	植物採集	三年	甲乙
八	教練	四年	甲乙
九	折紙競争	一年	甲
一〇	綱引	二年	甲乙
一一	球竿	三年	甲乙
一二	徒歩	四年	甲乙
一三	ロツチエスターシヨツテス	二年	甲乙
一四	松上の鶴	四年	甲
一五	フットボール	有	志
一六	合同體操	全	部

休 憩

(三十分)

一七	大 弓	有 志
一八	センターボール	一年 甲 乙
一九	啞 鈴	二年 甲 乙
二〇	徒 歩	三年 甲 乙
二一	体 操	四年 甲 乙
二二	奉祝旗送り	一年 乙
二三	徒 歩	二年 甲 乙
二四	タンツライケン	三年 甲 乙
二五	教 練	四年 甲
二六	綱 引	一年 甲 乙
二七	吊物競争	二年 甲 乙
二八	バスケットボール	三年 甲 乙
二九	ランサース	四年 甲 乙
三〇	お 月 見	三年 甲
三一	スプーンレース	職員、卒業生
三二	綱 引	四年 甲 乙
三三	平均運動	三年有志
三四	桐に鳳凰	四年 乙
三五	カレドニア	全 部

閉 會

午後四時半

○御即位奉祝式 十一月十日午後一時半參集全二時

より學式。(式次第及前後の記事は別項に記載)

○父兄懇話會 十一月廿一日午前十時より下裁縫室

にて父兄懇話會を開き成績品を陳列父兄の參考に資する外各級主任父兄と懇談す。

○講堂訓話 十一月廿五日放課後一二學年に對して講堂訓話あり。一、縮りあること二、機轉の利くこと三、愛嬌あること四、邪推を慎むことの四ヶ條につき訓話あり。

○琵琶を聴く 十二月六日放課後講堂にて薩摩琵琶川中島及乃木大將の二曲を聴く。

○第二學期終業式 十二月廿四日第二時講堂にて終業式舉行

○新年拜賀式 大正五年一月一日午前九時十分より新年拜賀式舉行市主催祝賀式引き續きて行はる

○始業式 一月八日第三學期始業式を行ふ。

○活動寫真觀覽 一月十二日御大典の光景を謹寫せる活動寫真を觀覽す

○修學旅行 第四學年生徒五拾壹名御大典跡拜觀の爲京阪地方へ修學旅行をなす。一月十三日杉野校長吉野教諭枝廣教諭引卒の下に出發全十六日一行無事歸着

○琵琶を聴く 一月十七日放課後喜多村氏の玄海琵琶を聞く。

○講堂訓話 一月廿九日倫理學說變遷の大意につき
て三四學年生徒に訓話あり

○競點地理 二月二日午後第一時及第二時を割きて
競點地理を行ふ。第一二學年は日本の交通に付き第
三四學年は對外貿易につきて豫め復習を命じおきて
本日其の競争試験の如きものを行ひたるなり。

問題左の如し

○一二年の部 尾道發善光寺松島東京二見浦を見
物して歸るには如何なる道筋を取るべきか。並に沿
道の名所等を概説せよ。

○三四年の部

一、我國は綿を何處より得て其の製品を何處へ
賣るか

二、生糸羽二重の輸出先如何

三、我國よりの輸出額が我國への輸入額より著
しく超過せる對手國を挙げ其の取引品名及
金額を記せ。

其の採点結果左の如し

甲	平均得點	
	一 等	二 年 乙
一	九九・〇〇	九六・五六
二	九六・五六	

三 等 二年甲 九一・六七
四 等 一年乙 九一・二二

乙
一 等 四年甲 正解者百分比
二 等 三年甲 六八・七五
三 等 四年乙 五一・六一
四 等 三年乙 四六・六七
四 等 四四・四四

第四學年優勝者 一等 河野キメエ 二等 山根トシコ
第三學年優勝者 一等 池田マサコ 二等 高橋 正子
第二學年優勝者 一等 岩崎 照子 二等 川上シメヨ
第一學年優勝者 一等 藤井喜代子 二等 中村 喜代

○紀元節祝賀式 二月十一日午前九時より紀元節祝
賀式を舉ぐ。式後教育者に下し賜はりし御沙汰書奉
讀並に憲法御發布に關する訓話あり

○新年祭參拜 二月十七日第三時を飲きて八幡神社
並に艮神社に執行の新年祭祭典に參拜す

○陸軍記念式其他 三月十日第三時に陸軍紀年式舉
行第四時以下競點地理及前日に課したる小品文の成
績披露式を行ふ。競點地理優勝者中二名小品文優勝
者中四名朗讀及口演をなす（別項文苑欄に記載）

○辞令 教諭新帶かく氏三月十七日附を以て依願退
職を命ぜらる。

○進級式及送別會 三月十八日第三時進級式舉行。

性行善良者村上純子外十名、學力優等者福永千代子外六名、精勤生石堀イッ外六十二名に對しそれ／＼褒狀を授與す。午後第一時より卒業生送別會を行ふ。

○卒業式 三月廿二日午後一時より卒業式舉行。卒業生阿蘇シヅヲ外七十六名

内褒賞受領者性行善良生井出テツ外六名、學力優等生岡田カツヲ外四名、精勤生井出テツ外十三名。三澤理事官臨場せらる。

式終りて別室に於て茶菓を饗し陳列品の觀覽を乞ふ。當日の式辭を左に録す。

大正四年度學事報告（大正五年三月）

本年の卒業生は七十七名にて昨年の約倍數である是れ本校が定員を増して四百人となせし第一回の卒業生である七十七名の内六十七名は第一學年より修學せしものにて他十名は轉入學及び中途入學者である入學當時は九十八名なりしが半途退學者三十八名中多くは家事都合にて退學して居る是れ等は父兄の轉任移住及び養女等のために退學せし者にて家計不如

意の爲めに全く廢學せしものはない是れ等都會地と大に趣きを異にして居る今回の卒業生が入學以來四ヶ年間の學業成績を市内及び市外の生徒に付きて調査すると頗る面白き結果を示して居る市内の生徒は一年より三年に至る三ヶ年間は常に市外生に劣つて居る然るに四年生即ち卒業期に至つて市内生は市外生に打ち勝ち最後の勝利を占めた又過去四ヶ年間の優等生を調査すると市内生は一年生時代に於て市外生より其の數遙かに勝つて居るけれども以後年級が進に従つて其の數を減んじ卒業期に於ては

市内生は市外生の半數に迄で下つた市内生は全体として勝利を得しも優等女は其反對に市外生に占められて居る要するに市内生は多數の優等者を出ださぬけれども又一方比較的劣等者も多く出ださぬ又市外生はづぬけた優等者を出ださぬけれども又劣等生も随分多い恰かも急行列車の如く早き速度を出し得る機關車を連結して居るけれども重き荷物を澤山積んだ爲めに結局速度が鈍つて普通列車よりも遅くなつたと云ふ感がある是れ市外生が市内生に全体として敗けたと云ふ形である市外生が市内生より入學以來三年間比較的劣つて居たのは色々原因も在るけれど

も其重なる原因の一としては市外生は入學當時比較的年齡多く且つ高等小學校を卒業せしか又は一學年丈け修學せしもの多く市内生は尋常卒業丈けものが多い是れ初年級に於て既に素養を異にせし爲めと思わる其素養は普通の者ではいつ迄でも効果が續くものでなく本校へ入學以來二箇年も過ぐれば小學校にて學ばざる新らしき學科が二つも三つも加わり其の上程度が進んで來る故本校の三年生以後は市内市外共に實力の競争となる此の上は頭腦のよきものが勝ちを占むる事となる入學當時選拔試験を受くる際尋常卒業丈けのものゝ高等卒業せしものゝ競争に於ては高等卒業者が有利の地位に立つことは明らかである然るに是等と競争して入選した尋常卒業者は其出身學校の良好なりしは勿論なれど比較的頭腦の良きものと思わる生來頭腦の良きものは例令初めは悪くとも最後に勝利を得るものと思わる

次に卒業生身体發育の狀況に付きては概略表に示しある通り丈低きものが高きものより四ヶ年間に伸びる割合ひが大なることは明らかなれども体重は却つて其の反對を示し丈高きものが低きものより四ヶ年間に割合ひに多く体量を増して居る身長の平均は約

五尺にして体重は約十二貫六百で在る身長増加の大なるものは四ヶ年間に約七寸体重は六貫二百の増加である是等は文部省が毎年全國高等女學校生徒を調査せし表よりは何れも良好の結果を示して居る本年卒業生四ヶ年間の精勤者十四名の多きを示す是れは家庭に於て生徒を休ますべき故障の少なかりし爲めならんも概して病氣に罹りしもの少なきことと一方には生徒等が少少の病氣には打ち勝つて學業に従事する心得が在つたと思わる本校全体に於て一ヶ年間欠席、遲刻早引き等なきものは一月末の調査には全校生三百に對し約百二十三名在りしに二月三月にかけて流行性感胃の爲めに多數の欠席者を出だし約半數六十三名に下りしは甚だ遺憾とする處である然し學校全体として身体發育の狀況は概して良好なることを諸君に傳へるは本校の幸ひとする處である

校長 告 辭

諸子本日は多數の來賓及父兄諸君が御列席の下に卒業証書を授與せらるるは定めし御満足ならん又多年教導の任に當りし吾々も此の上なき喜びである諸子

が過去四ヶ年間の修業は永くもあるさぞ苦しみなりらん其苦しみが今日花咲き實を結んだのである本校が諸氏と共に永き年月互に努力したのは諸氏の人格を高め之に相當する智識技能を授けんが爲めである此智識技能は將來諸子が社會に立ち一人前となるべき基礎を授けたのである今後諸子の立ち入るべき實社會は頗る複雑にて自分以外に他人の存在を深く認むるならん社會は諸子が今日迄生活し來つた家庭や學校の如き單純のものではない學校生活は年齢と云ひ學力と云ひ略々同等人物の接觸なりしが社會は年齢も違ひ學力も違ひ思想も違へは感情も違ふ種々雑多の人物集合である故に社會上の事務は自分の思ひ通り計りには行くものでない時としては腹の立つこともあらん又泣き悲むべき悲境に陥ることも起らん斯る窮した場合に出遇ふも適度に調子を取つて平和の狀態に立ち歸るが賢き女と云ふべきである

今日諸子が女學校を卒業せしは將來一人前となるべき証明を本校が與へしものにて諸子も己に其覺悟であることは明なれども社會に對しては未だ一人前でないことを自覺せねばならぬ智識もなく經驗もなき諸氏は將來尙幾年かの日子を費しあらゆる方向に於

て活社會の實務練習を怠らぬ様に努めねばならぬ夫れ故に自分は未だ足らぬものと心得目上には勿論誰人にも折あらば教を請ふと云ふ考へを失ふてはならぬ世間往々女學校の卒業生は生意氣である家風に向かぬ等非難を受くることのあるは一人前たらざる本人が既に一人前なりと考を誤り徒らに他人に差出口をなし物争ひの種蒔きをなすより起るものである是等の道理をよくわきまへねばならぬ

一度家庭の人となれば往々技藝習熟にのみ意を用ひて更に頭を養ふことを忘れるものが多し見るもの聞くもの讀むもの等を能く撰擇して品性修養を怠つてわならぬ終に臨んで諸子の今日あるは上朝廷を始め父母教師の恩は勿論諸子が教育されし場所即ち本校は當市が年々多額の費用を投じて人物修養に努めし恩義に深く感謝の意を表せばならぬ諸子よ將來益々健康を保ち堅實の精神を養ひ益々向上發展せんことを切に望む

告 辭

茲に本日を以て本校第五回卒業証書授與式を舉行せ

らる諸嬢の名譽洵に想ふべきなり

抑々諸嬢今日の名譽ある決して今日にあるにあらずして即四年間螢雪奮ならざる辛酸の効にして豈深く之を祝せざるを得んや

然れども諸嬢の本校に學びし所以のものは其の素地典型たるに過ぎずして他日賢母たり良妻たるべきの眞價實相は之より其の端を開くものと謂はざるを得ざるなり冀くは諸嬢は益々忍耐其の修めし所を研鑽し愈々勤勉其の得し所を服行し品性を高尚にし智徳を修養し果して能く本校の目的に達ふことなく國家社會が期待する所以に背くことなからんことを以て告ぐ

大正五年三月廿二日

尾道市長關員

尾道市助役勳七等 小林徳太郎

答 辭

陽春德澤を敷いて萬物光輝を生ず此佳辰を卜し此所に我等卒業生の爲に此榮ある式を擧げさせられ朝野貴賓の並み居させ給ふ中にて最とも愛てたき証書を賜はる我等の光榮何物か之に喩へん加之今又御懇篤

なる御訓示を賜ふ誠に感激の情に堪へず我等何と云ひてか答へ奉るべき何を以てか報い奉るべき實に有り難き事の極にこそ

ろも我等が此校に入りしは四年の昔なりき何事にも覺束なかりし我等物の理り等覺るべくもあらざりしを父にもまさる師の君のみ情け母にもまさる御慈みに教へ諭されてこそは今日あるを得たるなれ思へは雲に聳ゆる富士ヶ嶺も底ひも知らぬ琵琶の湖も此み恵みには類ふへくもあらず我等いかで何時の世にかは之を忘れ奉るべき

今の世の女子は古の女子に異なり任重うして道遠しとは實に我等が事にこうあれいでや此學びの庭を離れん後も慎みて畏き勅語の御旨を仰ぎ朝な夕な諭され給ひし尊き師の君の御教を寤寐の間も忘れすいよゝゝいそしみ勵み身を修め行を慎み女の道を盡くし以て母校の聲譽を發揚せん事を勉めてやはあはれ師の君長閑き春も風尙寒し希くは健に平にましませ感極りて申さん所を知らず慎みて答へ奉る

大正五年三月廿三日

尾道市立高等女學校第五回卒業生惣代

岡田ふつ代

○終業式 三月廿四日第一時講堂に於て第三學期終業式を行ふ。

○辞令 三月三十一日附を以て戸野廣キヌヨ氏教師に任命せらる。

○入學試験 四月四日第一學年應募者試験を行ふ。

○入學式 四月七日午前八時半より講堂に於て新入生九十九名に對する入學式を行ふ。

○始業式 四月八日始業式を行ふ。本校教養精神につき種々訓戒あり。當日決定せる正副級長氏名左の如し

一甲 岡崎 和子 松本 榮 一乙 木曾 靜子 葛西 壽香

二甲 藤井喜代子 今井 小園 二乙 青木ヒサヨ 中村 キヨ

三甲 岩崎 照子 和田カヅエ 三乙 川上シメヨ 村上 文代

四甲 村上 純子 福永 千代 四乙 高橋 正子 檀上ハツヨ

○遠足 四月十九日午前八時半御所築地に集台直に出發、木原村鉢ヶ峰に登る、途中木原尋常小學校に小憩、頂上にて辨當を喫す。

眺望頗るよく天氣亦爽快なり。四時十分御所に歸着解散

○開校紀念式 四月二十日午前八時より開校紀念舉行。本校沿革及内容充實に力むべき旨校長の訓示あり。次で小林市助役より創立事情につき訓話あり。

○体格検査 本月中旬より身体検査にかゝり四月二十五日終了。成績が別項記載の如く頗る良好なりしは本校の喜ぶ所なり。吉野教諭の調査に係る説明及表は別項に掲ぐ

○大轟御發聲記念式 四月廿七日第一時講堂にて大轟御發聲記念式を舉ぐ

○學年運動競技 運動の好時節なればとて放課後第二學年生より小運動會を行ひたき旨申出であり。四月廿八日之を行ふ。續いて各學年に於てそれ／＼運動競技を行ふ。一般に各自が四五兩月を健康増進の利用に力めたりしは學校の満足する所なり。

○衛生講話 四月廿九日放課後吉田眼科醫を聘して眼の衛生に關する講話を請ふ。

○岡田先生精勤祝賀會 五月六日午後第一時より講堂に於て岡田先生精勤祝賀の會を開く先生が本校創立の初め即ち明治四十三年三月に就職せられてより本年に至る滿七ヶ年の間一日の缺勤もなく精勵其の職を盡されたるは一同の欽仰に堪えざる所なり。仍て其の微衷を表する爲め茲に此の式を舉げ、聊かの紀念品(置時計一個)を贈る。

○お伽噺を聴く 五月十二日放課後岩崎不染氏のお

伽喃『人の耳』『ライオン河の拾ひ子』『鉢の木』を聴く、皆ごりぐに面白かりき。

○參觀者 五月十七日午前七時半三澤理事官來校授業を視察せらる。

○校長出張 五月廿三日より三十一日迄學事視察の爲め杉野校長は名古屋東京及び長野松本方面へ出張せらる

○辞令 戸野廣教師は五月廿六日附を以て教諭に任命の辞令を受く。

進記

早稲競争（六月十七日舉行）の成績決定せしに就き左に掲ぐ

各組被選出者得点による等級表

組	被選出者數	一分間合計 得点	平均点	等級	材料別 等級
一 乙	二〇	三三、七八	一、六九	三	三
一 甲	二〇	三四、三二	一、七二	二	二
二 乙	一七	三六、一六	二、一三	一	一
二 甲	一七	二六、三七	一、五五	五	四
三 乙	一二	一四、二八	一、一九	八	四
三 甲	一二	一七、〇〇	一、四二	七	三

四 乙	一六	二四、四二	一、五三	六
四 甲	一二	一九、九七	一、六六	四
				一

入賞者成績表

仕上時數	得点	一分間得点	組	姓 名
五三	一七〇	三、二一	一 乙	木曾 靜子
五五	一八〇	三、二四	二 乙	岩井 清子
一三五	一八八	一、九八	三 甲	繁村 マツ
一、一八	一七八	二、二八	四 乙	花咲サカエ

身体検査成績

本年四月施行せる本校生徒の身体検査の結果を統計し、之を文部省の調査に係る、全國高等女學校身体検査の統計並に本校昨年度の統計とを比較し見るに別表に示すが如き結果を得たり。

即ち

身長の平均に於て昨年度より一分を減し全國高女平均よりは四分の高位を示し
体重の平均に於ては昨年度と同様にして全國のそれ

よりは二百多

胸圍に於ては昨年度と同様にして全國のより四分の増加を見る

然るに十五才の平均は全國の平均よりは身長、体重胸圍に於て何れも高位を示し居るも、誠に本校昨年度の十五才の分と比較すれば何れも劣れり、されど此の十五才の者の入學當時は全國のそれと比較せば凡ての点に於て劣弱なりしが漸次良好なる發達を來し現在左表の如き結果に至れり仍て參考の爲め、茲に是れを掲載す。

入學當時 (十才) 全國高女 (十才)

差

備考

身長	四、五四	四、五六	一一二分	一は本校の劣を示す
体重	八、四〇〇	八、六〇〇	一一二百匁	十は本校の優を示す
胸圍	二、一一	二、一三	一一二分	

入學後一ケ年 (十才) 全國高女 (十才)

身長	四、七六	四、六九	十一七分	十四年に於て身長、胸圍の増を減を示すは不合
体重	九、五〇〇	九、七〇〇	一一二百匁	理の現象なれども是は姿勢の矯正並に懸重運動に重きを置きし爲めならんか
胸圍	二、二九	二、二六	十一三分	

入學後二ケ年 (十才) 全國高女 (十才)

身長	四、八二	四、七九	十一三分	
胸圍	一〇、七〇〇	一〇、五〇〇	十一二百匁	
体重	二、三八	二、三六	十一二分	

御大禮奉祝記事

維時大正四年秋のなかば天高く氣澄みて瑞光普く八紘に滿つるの時 今上陛下即位の御大典を挙げさせらる。六千萬の赤子欣喜躍真に手の舞ひ足の踏む處を知らず。外人にして來りて我國にある者、此の簡雅にして壯嚴なる典禮を仰いで我國體の萬邦に特異なる所以を觀、翻て我國山間僻地の民に至る迄均しく狂喜して邦家と慶福を同うするの狀を看て、今更の如くに日本帝國の國運今日の如き隆盛を致したる事の偶然ならざるを感じたる亦宜なりと謂はざるべからず。

今謹んで我が校の日誌中より御大禮奉祝に關する我等の行事を摘録して當時を憶ひ併て永く後年に傳へむとす。

一、御大禮に關する朝會訓話並に講堂訓話

○十一月八日朝會訓話 一昨六日 天皇陛下京都

へ行幸の御儀あり。午後四時四十五分名古屋離宮に御安着、昨七日午前九時更に離宮を御出門、午後三時京都御着あり。向ふ三週間御大典の御事を行はせらる。我等は此の盛典に際し怡々として國家と其の慶を同くする譯なれば願くは此の間學校に於ても家庭に於ても一層晴れやかに愉快にニコタタとして暮さんかな

○全日御大禮講話 第六時講堂に於て御大禮の御儀式の次第に就きて訓話あり。踐祚と即位との御別、齋出の事、の説明の後、御大禮諸儀の中、賢所を奉じて京都へ行幸の儀、即位當日賢所大前の儀、全紫宸殿の儀、大嘗祭大饗第一日の儀、大饗第二日の儀につき其れ々々詳細の説明あり。

○十一月九日朝會訓話 愈明十日は御即位禮當日なり。晝食後明日の奉祝式順序説明及唱歌の演習をなし終つて校舎内外の大掃除をなすべし。此の曠古の御盛典を祝し奉るには心形共に清淨潔白なるを要す。○奉祝式當日式中訓話 御大禮に關する諸の御儀式次第につきては一昨日略その大禮を説話せり。故に本日は御大典を通して窺ひ奉らるべき精神意義につ

きて説く所あるべしとて、

一、我國の國體の尊嚴萬國に比なき事、天照大神の大詔に示し給ひし御旨は數千年の今日に至る迄誠に炳として日星の如く明かに正しく行はれ來りて一系の天皇を拜戴すること天下何くかに其の類例を見るべき。今上陛下の親しく行はせらるる大嘗祭の御儀式こそ其のかみ皇祖皇宗のなし給ひし其のまよの御儀式御精神を以て天神地祇に供饌し給ひ又御直會のことを遊ばさるゝに非ずや。二、祖先崇拜 畏かれど天皇即位の御事を賢所皇靈殿神殿の大前に奉告の御儀を先にし給ふ御精神の坐す所は諸子の能く恐察し奉る所なるべし。是亦皇祖皇宗親しく天神地祇を祭りて大孝を甲べ給ひし御精神と御同様の御事にして亦御歴代のなしつぎ給ひし御事なり。天皇孝を以て人民を率ゐ給ふ。人民畏みて人民の祖先が皇室の御祖先に仕へて忠良能く斯の國を造り固めしことを思ふ。又恐れ多けれど我等大和民族の中に循環せる血液は 皇祖皇宗をその君主として仰ぐと共に血縁上明にその宗家として仰ぎし人々の血液を受け繼ぎたる者なることを思ふ。おお我等はリテラリーに〔文字通りに〕陛下の赤子なるなり。あはれ我國の祖

先崇拜は、深甚なる意義ある國風何くにありや。忠も孝も愛國も悉く歸して一なる所以深く思ふべし。

三、國威宣揚、明治御維新以來國運益々隆盛にして先帝陛下御即位式の御在様に比し奉るに御經費の上にも大差あれば御儀式の華麗莊嚴なる御一しはの事と察せらる且や領土において臺灣を増し樺太を増し朝鮮を増したることなれば御儀式に用ゐさせらるる材料も新領土の新材料を加へさせ給ひて自ら國威の宣揚ともなるは嬉しき事共なり。とて最後に以上に説きたる我特異なる國體と祖先崇拜の國風とは我國の大なる強みにして外國の企て及ばざる長所なれば我等は之を把し之を持して益々精神をみがくと共に外國の長所を取り納むるに怠ることなく將來益々國運發展に努むべき覺悟を要する旨訓示あり。

○十一月廿七日朝會訓話 本日は 天皇陛下京都御發輦の日なり。顧みれば三週日に亘る御大禮期間天地人の事共にすら／＼として滯りなく濟ませられしは、誠に大慶とする所なり。殊に天候は御大禮に入ると同時に快晴となりしは實に不思議なる程にして是ぞ誠に天佑を保全し給ふかと覺へて芽出度き極みなり。謹んで遙に御輦を送り奉る。

二、御大禮奉祝に關する行事

○十一月十日御即位奉祝式 此日天氣清明滿天一抹の雲だになく數十日來見ざる好天氣なり。まして三日前より雨降り續きて陰鬱なりしことは本日の天候をいたく氣遣はしめせめては曇天にてあれかしと我も人も祈りしに、思ひもかけぬ快晴となりしこと尊けれ。

午後一時半參集、二時より御即位禮奉祝式を講堂にて行ふ。式順序左の如し。

- 一、入場、二、敬禮〔樂器合圖〕三、唱歌〔君が代〕
- 四、職員生徒拜賀（職員は校長先導壇下二歩前に横列最敬禮生徒は總代一名壇下に前進一齊最敬禮）
- 五、勅語奉讀、六、訓話、七、奉祝唱歌
- 八、萬歲奉唱

校長壇下に進み職員其の後ろに横列、午後三時三十分

校長 次ニ職員生徒

「天皇陛下萬歲」 萬歲奉唱

校長 次ニ職員生徒

「萬歲奉唱」 萬歲奉唱

全 石 全 石

九、敬禮〔舊位置に復し樂器合圖〕

十、退場

○十一月十日紀念寫眞撮影 職員生徒一同は奉祝式後、御大典紀念の爲め本校校庭に於て撮影す。

○御大典紀念圖書 十一月十一日御大典紀念事業として圖書を購入することに決定、拾錢宛齎出の件を家庭に通知す。

〔御大典に關する圖書〕
〔國語大辭典〕
〔圖書箱〕

を購入することとす

○大嘗祭祀典參拜 十一月十四日午前九時參集、當地八幡神社及び良神社に於て行はるる大嘗祭祀典に參拜し、終つて途中解散

○十一月十六日大饗第一日 賜饌に付校長杉野教諭三宅上田井上大河内吉野阪本以上八名、廣島に向ふ即日歸着。

○大典奉祝音樂會 十一月廿一日午後一時半より講堂にて開催、午後四時二十分終了、來聽者堂に溢れ頗る盛會なりき。

演奏曲目

第一部

- 一、合唱
甲、笛の音
乙、國の光
二、ガルガン獨奏
甲、埴生の宿
乙、樂しき農夫
第二學年全体
女子音樂教科書
同上
三、村上純子
ビショツプ作曲
シュイマン作曲

三、合唱

甲、旧都
乙、この君この國

四、獨唱

秋の夜

五、三部合唱

甲、秋思
乙、浦のあけくれ
(二部)
(三部)

六、ピアノ連弾

メイド オグ ビエチーワルツ

七、合唱

甲、御代の恵
乙、紅葉狩

八、ガルガン連奏

ショートカーナヴァルボルカ

九、二部合唱

甲、漁火
乙、門の椎の木

十、ヴァイオリン獨奏

エアバレー

十一、唱歌

胡蝶

一、合唱

第三學年全体

デユエツトリガ唱歌集
中等音樂教科書

四、流追芳子

リチャード作曲

第四學年全体

メンデルソーン作曲
マツジシギ作曲

楠生
井出
テツミ

ラトール作曲

第二學年有志

シレチャイ作曲
女學唱歌

山本喜代子

ストラッポツク作曲

第三學年有志

女子音樂教科書
中等音樂教科書

尾道高女内藤教諭

ダンクラ作曲

第三學年全体

目賀田萬世吉作曲

第一學年全体

甲、子守歌 乙、春の草の歌	女子音樂教科書 幼年唱歌歌
二、獨唱	三、井上敏子 小學唱歌集
三、ピアノ獨奏	來賓 福山高女大和田敦論 モツアルト作曲
四、三部合唱 三部合唱	第四學年有志 新作唱歌 女子音樂教科書
甲、故郷を離るる歌 乙、舟子	井出テツ 渡邊シゲノ 内藤教諭
五、(ツアイオリン)	三、
千鳥の曲	來賓 福山高女大和田敦論
六、獨唱	來賓 梁田貞作曲
七、オルガン獨奏	來賓 三原女師竹村敦論
八、四部合唱	第三、四學年有志 女子音樂教科書
大平の御代	第三、四學年有志 女子音樂教科書

朝會訓話抄

○品物と命 物皆生命あり感覺あるものと思へ。ボールが屋根の戸樋に挟まれて顧みられざる時、彼は如何に恐ろしさに振へ戦きつゝあるらん。張り切れ

ん計りに膨らまされたるフットボールの如何に胸苦しかるらん。鉛筆を削るとて乱暴に傷けらるる机の膚の如何に痛かるらん。彼等は苦痛を訴ふべき叫聲すらも出し得ぬ身なり。

○成長と夜 學者の研究によれば動植物の生長發育は夜間に於てすとのことなり。蓋し晝間に吸収せられたる養分熱等は夜間に入りて盛に同化さるゝの謂なるべし。然れば睡眠不足は食物不足よりもあしゝ時正盛夏なれば諸子の夜ふかしを戒しむ

○咄々怪事 近比一怪事を傳ふ。某所に虛榮に憧るゝ花嫁あり。家事を抛擲して物見遊散を事とす。小姑兄を諫むること屢なれども聽かず。小姑乃ち書を飛ばして之を姑に讒す。姑來りて嫁の實情を探り、追つて離縁せしむ。嫁、姑、小姑、の反目互巴の如く相因果して、遂に嫁が姑に切り付けしとのことなり。余思ふ。四者悉く了見違ひなり。而して至誠の足らざるは四者歸を一にす

○人に交る道 人に交るに義理固く鄭重なると情深く親切なるとあり。前者は理性的にして後者は感情的なりと別ち考へられざるに非らず。義理づくめの交際は冷かなる恐あり。感情づくめの交際は冷熱度

に過ぐる恐あり。二者相調和して程を得るは誠に理想的なれども中々にむつかしきことなり。余窮に思ふ。女子は往々情に走するものなれば、寧ろ平生理性に訴へて交際すれば、以て理想的交際に適くを得んかと。

○硝子瓶と瀛車 硝子瓶に熱湯を注げば毀る。最大急行の瀛車と雖ども最初は徐行す。諸子が心身を引き締めて學業に向ふも亦此心あるべきなり。

○獨立獨行 名古屋の富豪奥田氏は自家の小兒等をして木綿の夜具を用ゐしめ、三等列車に乘らしめ、各自の身のまはりのことは自らなさしむる等誠に嚴かに親たちの生活と區別す蓋し身の程を知らしめ、獨立獨行の人たらしめんとの用意なり。至れりといふべし。

○死時 昨日時を知り時を尊重すべきことを説けり時と重んずべき意味は尙深遠なり。死時を得ること最も重しとなす。昨日は乃木大將自刃三年祭なり。將軍明治十年西南役以來絶えず死すべき時を求めて得ず。故伊藤公の哈爾濱に刺さるるや、將軍深く其死時と死處とを得たると羨まれたりといふ。將軍大帝の崩御に遭ひて悲痛止まず、御發引に殉せらる

度んで深く將軍の死を憶はざるべからず。

○親賣り 鳩翁道話に『親賣らうく』と叫び行く者あり。誰とて相手にするもなかりしに、或る夫婦者共に早く親に死に分れて親の愛を知らず。相議して數十金を投じ親を買ふ。謂ふ所の親の住家に至り見るに實に富裕なる暮しをなせり。怪みて故を問ふ老人夫婦は子を失ひて老ひ行く先を果敢なみ、己等を愛し呉るるものを求めんとて、故らに高價を以て試みたるなりといふ。乃ち若夫婦は莫大なる財産を得、老夫婦は優しき第二の子等を得たりきとの一小話を載す。斯くして親の愛に飢ゑたる子、子の愛に飢ゑたる親は、互に其の望む所に適き愛を得たり。彼等は誠に幸福なりしなるべし。噫、されど到底眞の親子の愛には若かじ、なんばう味ふべき寓話ならずや。

○串團子 世間が他人の言行を批評する標準は、年齢の多少と身分の高下とに應じて其の程度を異にし常に公平にして正確なる比例を保てり。茲に一個の串團子ありと假定せよ。荷車曳きが街頭に立ちて之を横喰はへにし居るども人誰か之を怪まん。諸子敢て之をなしたらば如何。されど亦諸子の幼妹が下女

に抱かれて串團子を手にせるを見て、誰か之を批難すべき。然れども亦諸子と雖ども一點の批難を受けずして串團子を食し得る方法あり、即ち一室に座して串團子を皿に盛り、つゝましかに食すせんか之をしも誰か又咎めん。即ち世人は殆ど無意識の中に極めて機敏に、而かも正確に判決を下すものなり世人は一言の問答を須ひて、相手の年齢、身分教育を受けたる程度、其事のなされつゝある場所と時、及び手段方法等を斟酌考量して即座に明確なる判斷を下す名判官なり。より高き標準によりて律せらるる人となるは其の人の向上なり、請子が教育を受ける、一面に此の覺悟あるを要す。

○敬神の道 我國は神洲とて神が我國を開き給ひ、神の御子孫が統治し給ふ國なり。而して恐多き事ながら我等の先祖も元に溯れば神の御末なり。故に國家に祭祀せる神は即ち我等の祖先にておはします。

外國の思想に云ふ所の唯一神のみといふ考にかぶれては誤りなり。又、道德の根源は教育勅語に盡く。

斯道は之を古今に通じて謬らず中外に施して悖らざるものなること勿論なれども、徳目の先後輕重或は末節に於て東西相違なしとせむ。日本人はどこまで

も勅語の御趣旨を奉せざるべからず

○誓文拂 此頃は誓文拂にて市況頗に活氣を呈しつゝあり。各商店の主人の畫策店員の奮闘實に目覺ましきを見ずや。何處の店に九時始まりのものありや四時じまひのものありや諸子は一度去らば復、回らざる學習の時機に立てり。一分一秒を惜しみて學徳を研ぐべきなり。然るに九時に遅刻し四時までの課業に倦むことあらば、之を早旦より深夜に至るまで奮勵しつゝある誓文拂と比して勤惰の差如何にぞや

○あはれ工女 徳島の葉煙草專賣所の工場を參觀せしに諸子と同年輩の工女等が魔術かと思はるる程敏速に手奇麗に作業をなしつゝありき。其練習の程如何計りかと思はるゝに而も報酬として得る所二十錢乃至三十錢に過ぎずして朝の六時より午後六時まで働くなりといふ。飽食暖衣以て高等の教育を受けつつある諸子よ、感、如何にぞや。顧みて親の恩を思ふべく、金錢の尊さを思ふべく、又、裁縫等の練磨不足を思ふべきなり。

○孝女高原ハルノ子 徳島の近在に、高原ハルノといふ孝女あり。日程の都合上訪問し得ざりしが、悉しく其の孝行美談を聞けり。年十六歳にして父を失

ひ、母は不治の病に臥し居り、兄は放蕩にして家事を省みず、他の兄は卒中症にて何事もなすを得ず。

家は赤貧洗ふが如し。少女ハルノは涙を拂つて立てり。病める母は時々激しき痙攣を起すが故に、少女は専念に働くことすらも意に任せず、晝となく夜となく看護と内職とに身も心も休む間もなし、斯かること二十年婚嫁を辞して今日に及べるなりといふ。而して驚くべきは彼女の片頬の歪めることなり。

ろは全く母の痙攣の起る毎に彼女の頬を以て痛みを壓しあためしに由る也といふ。至孝遂に郷黨に知られ、彼女の晩年を安かにせんとて孝女後援會といふ者も組織せられたりぞ。

○何れか狂 大阪毎日新聞記者橋詰氏の談に赤穂の華岳寺の和尚は大石神社の建立を思ひ立ち土地の富豪に謀りしかど其の資を得ず。仍て奇なる風俗をなして毎日街頭に立ち、喜捨を説く。人皆狂せりとなす。然れども熱狂遂に衆を動かし立派なる大石神社を建てたり又作州作樂神社を建てたる旅館の一女將も兒島高德の遺跡の傳はざるを慨して人毎に之を説く。人皆狂人なりと呼べりきといふ。同女の植ゑたる櫻は盛に成長して花時爛熳寔に美觀を呈す。地方

民來り遊びて往々櫻花を手折るものあり。女將曰く『神を敬するを知らず却て境内の樹木を傷くるもの眞に狂人にあらむや。』と

○子供の辭ひ 昨日御所の橋の上にて男女二兒相爭へり。試に聞くに男兒は男が偉いと云ひ女兒は女が偉いと主張して互に相譲らず。男兒が正成や太閤は男なりと云へば女兒も亦神功皇后其他の烈婦を擧げて屈せず。されど偉人の列擧の争ひには女兒遂に窮して見えけるが、やがて『太閤も正成も女の生みし人ならや』と云ふ。男兒是に於てか却て窮せる色あり偉人の背後には賢母あり面白き争ならすや。

○社會の進歩 社會は刻々に進歩しつつあり些の油斷を許さず。五年前には十二吋砲が軍艦砲の最大なるものなりき。然なるに今や競ふて十五吋砲を備ふることとなり、獨逸は更に十七吋砲を作れりといふ。日清役頃の五吋砲に比して其の進歩誠に驚くべきものありと云ふべし。而して精神的方面の進歩がかゝる物質的文明の進歩に比例せざるは教育界の大問題にして目下識者の思を潜め居る所なり。

○常識 諸子が學びつゝある學科は悉く完全なる常識を養成するの資料たるなり。各科の教育的目的を

理解せずして勝手に要不要を論するものあらばそは
大なる誤なり。倫敦に正直なる人あり。祖父より正
確なる時計を譲らる。其の人世界を一週せしに其時
計が地方時と合致せざるを發見し、一度は太陽に異
變あらんと疑ひ、遂には祖父を疑ひ恨みたりといふ
常識を飲きたるものは大概此の類なり。

現在職員

(大正五年五月現在)

出身學校	受持學科	担任事務	職員	就任年月日	族籍	氏名
東京高等師範學校	修身教育		校長並教諭	大正二年十月四日	愛知平	杉野三治郎
全上全	地理歴史	主任	教諭	明治四十年三月二十日	兵庫平	三宅素
全上全	數學理科	主任	全	大正二年四月二日	栃木士	井上暉
全上全	地理理科	教務係	全	大正四年九月十日	三重平	上田芳郎
試驗檢定	國語	學級主任	全	大正三年四月六日	静岡士	三橋六次郎
全上全			全	大正四年六月七日	福島平	森要人

東京美術學校師範科	日本体育會体操學校	津田英學塾	京都府立第一高等女學校専攻科	東京音樂學校師範科	第六臨時教員養成所	廣島尋常師範學校	東京和洋裁縫女學校	共立女子職業學校高等師範科	商業教員養成所	池坊大日本總幹事御簾ノ間	東京大學醫學部別科
圖畫習字	体操	英語	裁縫家事	音樂	裁縫家事	裁縫家事	裁縫	全	商業	插花点茶	
全	全	全	全	全	全	全	全	全	會計	全	校屬
明治四十年四月九日	明治四十年三月三十日	大正二年三月廿八日	大正三年四月八日	大正四年十月廿一日	大正四年四月六日	明治四十年三月三十日	大正三年一月廿一日	大正五年三月廿一日	大正二年二月廿一日	大正二年三月七日	明治四十年五月二日
茨城士	埼玉平	阪本花代	廣島平	岡山平	千葉平	廣島平	廣島士	廣島平	全	廣島平	廣島士
大河内定雄	吉野賢司	阪本花代	枝廣春枝	内藤谷	三木多可	岡田タヅ	四田アル	戸野廣キヌヨ	三次隆次	河地大輔	森信常一

生徒原籍府縣別

大正五年五月一日現在

府縣別	學年別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
廣島縣		九四	八三	五三	六五	二九五
愛媛縣		二	二	四	二	一〇
岡山縣		三	三	一	五	一二
兵庫縣			一	一		二
大阪府				一	一	二
和歌山縣				一		一
石川縣		一				一
東京府			一			一
岐阜縣				一		一
三重縣				一		一
埼玉縣					一	一
計		一〇〇	九〇	六三	七四	三二七

生徒原籍郡市別

大正五年五月一日現在

郡市別	學年別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
尾道市		四三	三七	三〇	三二	一四二
御調郡		二三	二七	一一	一八	七九
沼隈郡		一七	一二	六	一〇	四五
芦品郡		二	一	〇	二	五
深安郡		五	二	三	〇	一〇
世羅郡		二	〇	一	一	四
甲奴郡		〇	一	二	〇	三
豐田郡		二	〇	〇	〇	二
加茂郡		〇	三	〇	一	四
佐伯郡		〇	〇	〇	一	一
他府縣		六	七	一〇	九	三二
計		一〇〇	九〇	六三	七四	三二七



生徒父兄職業別

大正五年五月一日現在

職業別	學年別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
農 業	二〇	一九	一二	一六	六七	
商 業	四四	三二	二一	三二	一二九	
工 業	二	三	〇	一	六	
雜 業	一七	一六	一二	七	五二	
官吏 又ハ 準官吏	三	六	三	四	一六	
教 員	一	三	〇	五	九	
會 社 員	四	三	六	〇	一三	
神官僧侶	二	二	二	一	七	
其 他	七	六	七	八	二八	
計	一〇〇	九〇	六三	七四	三二七	



校 友 會 報

文 藝 部 便 り

委員 四甲 井上敏子



冬の寒空や夏の眞盛や凡て運動の十分に出来ない時圖書室の賑はしさと申したら殆ど立錫の地も無いといふ程です。それが又櫻花咲く春の頃とか紅葉かつ散る秋の半になると、皆様が運動に熱中なされるものですから、閲覧室はスツカラカンのカンです。其代りさういふ時の貸出日と來たら、多勢が押掛けて來て、當番の委員では手が廻り切れず、非番の者が加勢に行きます。創立以來五個年になりますが、皆様の讀書力といふ者は此の閲覧室のためにどれ程進んだでせう。二三の天才家が文學癡になつたといふ弊は認めぬでも有りませんが、一般から申しますと精神修養の方面やら、文章力やら、非常の進歩をなされた事は些の疑を容れません。私共も自ら省みて

此の企ての爲めに得た利益は多大だと存します。出来得るならば今少し澤山の書物を——特に多方面の書物を——買つて戴いたらと存じて居りますが、一方運動部の方も有りますから左様な手前勝手も申されません。今左に現在備付の書籍と、雑誌と新に購入した新刊書等を一括して御紹介して置きます。猶一言致しますが、卒業生の方々が御令妹や御友人を介して御借覧なさいます篇志の程を、私共は何時もくぞい御志とお囀して居ります。

○現在書籍の冊數

科目	部數	冊數
一、修身教育	七八	八七
一、家政	二九	二九
一、地歴	一二四	一二六
一、傳記	二六	二八
一、理科	三〇	三〇
一、文學	一五一	一五八
一、雜	六四	六八
合計	五〇二	五二六

○雑誌の種類

新女界、少女の友、新女學、A B C
中等英語、英語研究、科學世界、實業の本
支那寫真講義、歐洲戰爭實記、音樂界、圖書研究

○新購入書の主なる物

婦人文庫、婦人の典型、をりく草、家庭日々の經濟法
母の道と育児、簡易生活法、西洋史話、我が南洋
裏日本、大楠公忠勇事歴、お札博士の見た東海道
山中幸盛、諸葛孔明、ネルソン、ナポレオン物語
花、世界の奇蹟、色鳥、獨語對話、日本詩歌論
まだ見ぬ親、讀史の趣味、蹄響、日の丸御伽文庫
文展畫帳、戦争と國民性、ベエトリベンとミレエ
バツハよりシエーンベルヒ、

運動部だより

四乙委 員

沸きかへる青春の血、潑刺たる元氣の溢れ、テニスコートに、フットボールに、セクタボールに、大弓に、思ひ／＼に活躍する彼等が顔を見よ。其の旺盛なる元氣は顔の色眼の光りに現はれ、蒼き弱き影をば何所にか認めし。今や運動の最好期たる春はいつしか過去の夢と消え失せて、緑滴る青葉の木蔭に物思ふべき時とはなりき。この炎天焼くが如き運動場を校庭の一隅に立ちて望めば、東北の一隅に平行水平棒、フットボール、中庭のテニスコート、いづれも暑熱を恐れず活氣に満ちて益々盛なり。

運動器具は漸次完全になりつゝあり。こは吾等の身体を發達せしむる上に於て、甚だ喜ぶべき事なれば吾等三百有餘の同胞よ、大に活動して盛んに運動し給へや。

終りに臨みて運動器具の時價の大畧を示せば

フットボール 一個 六圓位 (一ヶ年十個位購入)

大 弓 一張 四圓位

矢 百本 八圓

弦 十筋 一圓廿錢

テニスボール 一打 一圓七十五錢

ピンポンボール 一打 八十錢

殊に

フットボールにつきては一個、六圓もする高價の品

なれば、折々紐の切れたる儘に蹴らるゝを廢し給へ

器具の破損はやがて運動の頓挫を來すべし。運動の

頓挫は皆様も其の責任の一半を負はさるべからず。

我等委員は一週一回當番として午後四時まで居残り

凡ての器具を整理するに際し皆様の不注意の点より

來れる破損を發見すること多きを常とす依て特に注

意を促す所以なり。

校友會役員

會長

副會長

運動部長

文藝部長

運動部委員

文藝部委員

杉野校長	三宅教諭	吉野教諭	三橋教諭	池田マサコ	池田花子	長尾タマキ	藤井タマキ	田阪小竹	上月庸枝	金子静枝	村上季駒	村上好美	今川秀子	高橋千代	青木敏子	井上敏子	三谷ヨシコ	平田ガ	
(四甲)	(四甲)	(四甲)	(四甲)	(四甲)	(四甲)	(四乙)	(四乙)	(三甲)	(三甲)	(三乙)	(三乙)	(二甲)	(二甲)	(二甲)	(二乙)	(二乙)	(四甲)	(四甲)	(四乙)



(四乙) (三甲) (三甲) (三乙) (二甲) (二甲) (二乙) (二乙)

島谷 敏江 繁村 マ 岡崎 淑子 宮本 綾子 橋本 順子 岡田 三樹枝 越智 コウ 吉井 千代子 吉村 ミッソ

哀悼の辞

昨年の秋淋しき頃御死去遊され候我級の村上ミ子様毛利なきの様を悼み謹みて御吊詞申上候

第四回卒業生有志

同窓會報



四年てふ長き年月の業漸く終へて皆健かなる顔を卒業式場に揃へて証書手にいたし候も、つきぬ名残を惜しみ候も未だ昨年の春にて候ものを一年たぬ間にはや友のお二人までもはなくならせ給ひしとは只々夢心の去りがたく候クラスの中にては殊に勝れておすこやかにて常々より皆々お羨み申上候ほどにて候ひしものをいかに老少不定は世の習ひとは申ながらかへすぐもお残り惜う存せられ候あと思ひおこせば君達と母校の涼しき木陰に互に罪もなき事ども語り合ひては打興じ候も廣き庭にてテニス、オニゴトなど始業の鐘に氣のつかざりし事なども候ひし

を君達のおはさぬ今は只悲しき思ひでこのみ相成申候

これよりは花も咲き實を結ばせ給ふ尊き御身なりしをげに御悼ましき限りに存候

ざりながらはや散りにし花は再び枝に返りがたう候今は只永き眠りのお安らかなるを偏に祈り上まゐらすのみに候

御いたはしさのあまりつたなき筆もかへりみすこゝに謹みて哀悼の意をささげまゐらせ候

下 枝

毛利ゑきの君のみまかりたまひしをいたみてもろともに語りつめてし月花も

形見となりしけふそかなしき

あはれ今はなみだのたねとなりけり

きみかおくりし水くきのあと

第六回同窓會總會

大正四年六月二十五日母校に於る早稲競争成績披露式を機とし第六回同窓會を開かる午前十時より式の行はるゝをもて之に參列の爲め同時頃よりぼつ／＼

出席する方あり式後講堂に於て一同晝食を終り引續きプログラム順に進行す

プログラム

一開會の辭

三協 議

五手 品

七ホストンチエンザ

九動物界植物界礦物界

十一開會の辭

二校長先生のお話

四三宅先生のお話

六琴

八指環廻し

十首巻競争

此日は雨天なりしにも拘ちす多數の來會者ありていとも有益にいとも愉快に此會を終りしは總ての人の満足せし所なりき出席せられし同窓會員を組々に別てば第一回五名第二回九名第三回十五名第四回十八名合計四十七名。大丸醬に桃割に種々様々の姿こそかはれ思は同じ母校を愛する至誠の一團温情掬へすき思あらしめたり

第七回同窓會總會

大正四年十一月二十一日母校に於て音樂會の催あり此機を幸ひ午前十時より第七回同窓會總會を開く此日は別に協議の事項とてはなかりしを以て作法室に

あつまり自由談話をなす各々思ひくにつぎひあひてなつかしき昔語を話しつ話されつつきせぬ物語はそれからそれへいつはつべくも見えざれど時はいつしか過ぎ去りて正午の鐘ははるかあなたの千光寺の峰にひびきぬ

母校の先生方と御一諸に晝食を終り午後一時より行はるゝ音楽會場を集る

音楽會は當地に於る初めての催しとて待ちに待ちたる市内の人達は午前中より押かけてさしにも廣き會場もいつしか立錫の餘地なき程の有様なりき 此日此席に列られし同窓會員諸氏は母校に於る此盛會をまのあたり見て我出身學校のいやましに樂えゆく様子を如何にうれしく如何に愉快に感じ給ひしならん

雁のつて

西中トク 昨年西中家に御入嫁遊され家事に御いろ

しみの由

生酒コト 兎角健康勝れ給はぬ由折角御大切に遊さ

れ一日も早く御快癒を祈る

稲田サト 家事練習中

井出上千代花 病氣療養の爲當時尾道にありと

辻 その 當時は御良人と共に松山に御住ひ遊さる

小倉ヒデ 只今は大分縣宇佐に御越しの由

森 ハナ 東京なる森家に入嫁せらる

小田マサヨ 今春岩國町なる小田家に入嫁遊さる

柏原光代 家事練習中

高橋春子 近頃赤様おでき遊したる由

河村初音 小學校に御勤務遊さるゝ御様子

楠戸エイ 備中なる楠戸家に入嫁遊さる

河本キミ 河本家に御入嫁の後の御様子一向に承らす

小西ウラ 御病氣御療養中の由御自愛專一と遊し早く御全快の程を祈る

く御全快の程を祈る

野崎 幸 只今は名古屋に御越しの由

楠戸千代子 近頃備中倉敷なる楠戸家に入嫁遊さる

る

眞田フミ 家事練習中

佐々木ヲカ子 家事練習中

久留島カメコ 今はお二人の母様となり給ふ

秋葉勝子 近頃母様とならるゝ噂あり

田阪花江 當時は山波においで由

田中ヨシ 昨年田中家に入嫁遊さる

伊達房子 御近狀承りたし

土屋フミエ 家事練習中

富田サカ 近頃は御夫婦づれにて尾崎町にありと

堂野エイ 一向御様子承らす

中野チトセ 折々丸鬚姿を停車場に見受ると人の噂

長安愛子 相變らず家事に御いそしみの由

橋本信子 愛子の御養育に余念なしと

野田 光 家事練習中

野村喜代子 家事練習中

檜崎タマ 只今は名古屋市に移住遊さる

神原久枝 家事に御いそしみの由

松尾初代 相變らず小學校に御勤勞の由

安長フジノ 一向御様子承らす

湯淺熊子 家事に御いそしみの由

藤井フデ 可部町藤井家に御入嫁遊さる

吉岡繁子 家事練習中

富田ミキノ 御近狀如何承りたし

伊藤菊野 東京に御轉住母様となられし御様子

橋本キク 相變らず愛女の母として御いそしみの由

門田ツチ 一向御様子承らす

村上トミ 當時は向島に御住居ありてお花の稽古に

折々當市にいらせらる

黒木ノブヨ 相變らず神戸に御在住會社に勤め遊さ

るゝ由

阿蘇カヲル 家事にいそしみ給ふ

花本ミジヨ 東京なる花本家に入嫁せらる

繁田千代 御主人には目下渡米中とて姑君と共に市

内にあり近き内に御良人の許に趣かるる由

栗井トクノ 廣島市段原村にあり

小林 久 家事練習中

榊原満江 家事練習中

末平キヌ 白江なる自宅にありと

池田芳子 育兒に御熱心の由

田阪マス 今は御良人と共に廣島にあり

立上ヒサヨ 山波の小學校に御奉職とさく

伊藤春江 御近狀承りたし

池田テルユ 土生の藤井家に御入嫁の由

上田靜江 家事練習中

宇坪ヒサコ 一向御様子相わからず

大本コト 家事に御いそしみの由

大藪ハナ 先年御結婚遊し只今は神戸市に御住居な

れど何れ近き内御良人と共に弘前師團に御轉任の趣

岡セキノ 御良人は遠き滿洲にありと

谷本ウメノ 御近狀承りたし

古谷未代 當市古谷氏に入嫁せられ只今は神戸市に

ありと

竹之上コチヨ 家事に御熱心の由

高田玉子 今春又々御上京究研科に入り給ふ

井口八重子 若き母様として育児に御熱心

中川秀子 今は御良人と共に福山にあり

池龜コト 御良人と共に朝鮮京城にあり

三阪玄子 今春男兒をあげられし由

平岡敏子 家事練習中

松浦コマサ 御病氣にて居らせらるゝ由御自愛の程

を祈る

大西タミ 赤様おできの由

三上ツチ 家事練習中

鶴田フミヨ 鶴田家に御入嫁の後は朝鮮にゐらせら

る

村上ノブ 東京渡邊裁縫女學校御卒業后只今は伊万

里なる高等女學校に御奉職遊さる

大泰司靜枝 家事においそしみの由

渡邊キヨ 御近狀承りたし

日高貞子 家事練習中

三坂カメ 相變らぬ姉君と御むつまじく家事に御い

ろしみの由

稻田ノブ 家事練習のかたはら御稽古事に御忙しき

御様子

小川ノブ 御近狀如何承りたし

大山なほ 今春御卒業御妹君と楽しく御暮し遊さる

柏原菊代 御近狀承りたし

金谷田鶴 只今は廣島に在はすとか

河本きぬ 京都より御歸國の後は家庭にありてお稽

古事に家事練習においそがしき由

楠生ミチ 先頃御慈愛深き祖母君を失ひ給ひぬ御淋

しくお過したまはん

栗原ツサ 先日御女子を御出産遊はしたりと

兒玉喜代子 相變らず裁縫の道を辿らせ給ふ

小山リウ 家事練習中

佐藤キミヨ 只今は遠き仙臺にお越しの由

徳山ルイ 昨年御結婚遊ばし只今は三原に御住居の

由

永田 悦 家事練習中

日山 キヌエ つい近頃日山様と御改姓遊さる

山崎 シゲル 目下府中に御住ひの由先日久しぶりに

て當地に御出遊したり

多田 憲代 昨年御嫁ぎあそばしたりなつかしき御姿

をお店に拜する事ありと

納見 チトセ 師範二部卒業後三原の小學校に御奉職

遊さる

野村 禧子 家事練習中

林 シニ 御近狀承りたし

長尾 千代 長尾家に御嫁きの後はいとむつまじく御

暮しの由

原田 マサノ 岡山の方へ御出遊されしとか

江川 久代 松永の小學校に御勤務遊さる

壽美谷 タカコ 家事を引受けて相變らず御活動の由

田中 竹代 只今は山口に御轉住の由

田阪 イクヨ 家事練習中

池田 壽子 吳なる池田家に御入嫁遊さる

佐々木 マツヨ 廣島市比治山佐々木家に嫁入遊さる

政池 つな 東京職業學校にて御勉強中

松森 ツキ 家事練習中

正木 春子 お稽古事に御熱心の由

三熊 小里 先年御結婚遊されしとか

三井 雅子 御近狀承りたし

村上下 枝 先頃慈愛ふかき母上を失ひ給ひぬ誰しも

免かれ難き人世のならひなれど時にふれ事にあ

たりて思ひ出の涙多く過し給ふらん

村上 ヤス 御近狀承りたし

村上 ツルコ 暫く健康勝れ給はさりしが今は漸く平

癒せらるゝ趣

村上 ハルコ 御近狀承りたし

増田 由巳子 今春増田家に御入嫁遊されし由は承り

しが其後の御様子承りたし

山本 ツチヨ 師範二部御卒業の後双三郡向江田尋常

小學校に御奉職の由

若山 キヌヨ 廣島市若山家に御嫁入遊さる

青野 セツ 日々裁縫のおけいこにおいそがしき由

市川 コワサ 師範二部御卒業後御調郡河内村なる小

學校に御勤め遊さる

永原 ユキノ 今春永原家に御入嫁遊されたり

伊藤 ミチ 近頃廣島にてお裁縫の道を修め給ふ

今井 清子 おかはりなくおけいこ事に御熱心の由

植田キクノ 大阪なる伯父様の方におこしとか

宮本エン 今春宮本家に御入嫁遊さる

小川春江 東京高師御勉強中

岡田トヨノ 仙臺なる姉君の許にお暮しの由

柏原ミユキ 師範二部御卒業後因島中庄尋常小學校

に御勤務中

兼森シゲヨ 御両親の許にて家事練習中

村上ミツエ 今は可愛らしき娘子様の母様と呼れ給

ふ

兒玉ヨシ 東都の御両親の許にて今春卒業の井出テ

ツ様と御一緒に職業學校に通はせらる

小西ハル 家事練習中

小松あさ おけいこ事においそがしき御様子

佐々木豊野 今春女子大學に御入學御勉強中

下川小雪 如何お暮し遊さるゝや御近狀承りたし

末田ヒサノ お裁縫に御通ひの由

高垣シゲノ 師範二部御卒業後當市第二尋常小學校

に御奉職遊さる

武田マサヨ 何かおけいこの爲め日々本市にお通ひ

の由

立神たね 東京高師御入學勉強中

永井恒子 家事練習中

中司カツエ 御近狀承りたし

野村アサ 家事練習中

林 良 姉様と甥子様とを一時にお失ひ遊されし

御様子御胸中御察しまゐらす

久田おひさ 先日横須賀におこし遊されし御様子

福原可代 近頃は向島にお住ひ遊さる

藤井静子 東京の伯父様の許にあり

森安ブジノ 二月頃赤様をおあげ遊されしと

松井エイ 家事練習中

三井敏子 一向にお便りなし

三次イチ 近頃は大阪にて御修業中とか

宮地清子 師範二部卒業後因島の小學校に御勤め遊

さる

宮崎 亮 師範二部卒業後本市第一尋常小學校に御

奉職遊さる

村上カヤ 廣嶋にて御修業中

村上ミチ 昨年初秋御病氣重らせられ遂に御永眠遊

さるいたしましたかな

村上ヨシ 東京職業學校にて御勉強中

毛利エキノ この君も村上ミチ様と相前後して永き

眠りにつき給ひぬかなしき極みにこそ

本森キミヨ 大阪なる伯母様の許におこし遊さる

堀内 好 近く母君とおなりの由誠にや

新田ヒサ 家事練習中

阿蘇シズヨ 家事練習中

安保チヲ 家事練習中

安保キクノ 家事練習中

安保コトヨ 家事練習中

池田澤子 裁縫通學

石堀イソ 裁縫通學

石原タマエ 裁縫通學

泉 隆 家事練習中

井出テツ 東京職業學校入學勉強中

井上タキ 裁縫通學

井上ヒデヨ 家事練習中

入江松枝 家事練習中

恵谷ハツヨ 三原師範二部勉學中

稻田フサ 家事練習中

井上安子 裁縫通學

橋本ハナエ 旧姓恵谷新家庭に於る主婦として御い

らしみの由

恵谷春子 裁縫通學

上野ユキエ 裁縫通學

岡田カツヨ 家事練習中お妹子達のお世話におい

がしき

恵谷ヨシコ 家事練習中

大山芳枝 家事練習中

岡田ヨシエ 優等の成績にて京都府立に御入學勉強

中

大部松枝 家事練習中

川本ふくよ 母様のなき事とて家事の全部は勿論弟

子達のお世話なさるゝ由

金丸君子 當時東京なる姉様の許にありと

加藤静枝 家にありてお裁縫をはけみ給ふ由

金子輝子 裁縫通學

神田ハルヨ 家事練習中

吉川モト 目下第二の若き先生として御出勤遊さる

楠生フミ 家事練習中

鞍掛静子 家事練習中

黒川美佐代 家事練習中

小林イチ 卒業后間もなく只お一人の父上を失はれ

しときくさらでだにもうき五月の空を如何に

淋しく暮し給ふらん

河野キヌエ 五月中旬より健康勝れ給はず近頃は靜
養中の由御自愛を祈る

小西シヅ 裁縫通學

佐伯清子 先日東京よりお歸りの由お土産話を伺ひ
たし

相良エツ 卒業後間もなく熊本なる杉原家にお嫁入
の由

清水キヌヨ 三原師範二部勉學中

砂川千代鶴 家事練習中

杉本 愛 裁縫通學

杉谷シヅエ 裁縫通學

正木フサ 家事練習中

松本千枝 裁縫通學

村上美津枝 家事練習中

村上ヒサノ 近頃健康勝れ給はぬ由御自愛を祈る

八杉イソヨ 廣島へお出の噂

山下季子 近き内に呉の方へお出の由

山根トシ子 家事練習中

山口アサコ 家事練習中

行友房子 家事練習中

吉田キクエ 御結婚の後因島にお越の由

大 秀子 裁縫通學

高橋トシエ 家事練習中

武本カメヨ 一向御様子相わからず

田中喜久恵 家庭にありてお裁縫においそしみの由

高橋春子 家事練習中

瀧迫芳子 裁縫通學

高シズヨ 呉の方にありと

塚本福子 家事練習中

土井ナヲ 裁縫通學

徳永コキエ 家事練習中

徳毛ミサホ 家事練習中

永井チトセ 家事練習中

西永ミサチ 家事練習中

林ヒサヨ 家事練習中

原 歌子 三原師範二部勉學中

平野ふはね 家事練習中

藤田セイ 裁縫通學

藤田繁子 裁縫通學

福島ツギ 裁縫通學

松本智恵 裁縫通學

米田サダ 家事練習中

吉原 艶 裁縫通學

吉本ナミコ 一向様子相知れ屯

吉光テルエ 家事練習中

小池貞子 三原なる小池家に嫁せらる

渡里標子 家事練習中

消 息



下瀬君を悼む

三 宅 素

六月四日はわるい日であつた。日曜だから氣も伸びやかに椽に腰掛けて、朝露のシットリとした前栽を眺めてゐると、森先生が來られて、此間生れた赤坊が亡くなつたとお話に何とお慰めしていか分らなくなつて、ううでしたかどうも……と云つたきり暫くは言葉もなかつた。

お悔みに行つて歸つて見ると、下瀬君逝去の知らせが來てゐたので、あゝ／＼どう／＼いけなかつたか氣の毒な事だつたとぐづたりとなつて、君の生前のこと、奥さんや子供の行末など、それからうれへと考へられて、つひいやな氣持になつてしまつた。

『失禮ですが、貴君は下瀬さんではありませんか』顔は勿論寫眞も見たことのない私は、多勢ドヤ々と出て來る尾道驛の改札口で、人相見の様に客の顔を見てゐたのであつたが、私の發した最初の質問は

見事に適中した。

君はニコリとして『さうです、どうも是は恐縮態々どうも』と云つてお互に初對面の挨拶をかはした。私は思つた。若しも初對面の時に受けた印象が間違なき判斷だとすれば、下瀬君の性格は冷靜沈着の二語に盡きてゐると。

けれども私は其の後君の色々な性格の表はれを見た……時には矛盾したやうな……例へば、今思ひ出したも噴き出したくなるやうな飄輕な滑稽なことを云つたりした。時に放膽なやり放しのやうで、そして時に非常に細心な綿密な處を學校の事務振りなどで示した。

私は此場合亡くなつた人の性癖などに就いて彼は述べることば失禮だと思ふけれども考へが茲におちて來て仕方がない、今になつて思ふと、君は過去に於てひどい病氣に罹つて『あゝ己れは助からない！』と一旦沈んだ絶望の淵から這ひ上つた人だと考へるかう假定して見ると私は完全に我下瀬君を理解し得るやうな氣がする。

見れば唯何の苦もなき水鳥の

足にひまなき我が思ひかな

下瀬君のすべての行の裏面に苦い涙の潜んでゐたことを君の靈は拒みはしないだらう！

私は君の恢復期がもつと長く續いて過去の病氣をすっかり忘れて仕まつて心の底から笑つたり笑はせたりする單純な君を見なかつたのを残念に思ふ。

執念深い病氣は郷里に靜養してゐる君を憎くも三度捕へたとき、君は暗い死の影に脅かされて妻子の行末を思ふては幾度涙に枕を濕はしたことであらう。

實にお氣の毒に堪へぬ。さう乍ら私は信ずる。死といふ運命が君に迫つた時……君は誰もがすると同じに是が従はざるべからざる天の攝理であると觀念したであらう。そしてあらゆる未練や煩悩を捨てて運命を天の攝理に委ねたであらう！と

噫うして其の時死に行く人々の余り持つてゐない悦樂を君が持つてゐることの幸福を感じたであらう。

それは何だ。君の遺兒が打揃つてすぐれた頭腦……私は天才だと思つてゐる……を持つてゐると云ふことである。

君の靈よ、願くば安らかに眠り給へ。君の靈と君の肉とは完全に永久に君の遺兒によつて傳へられるであらう。

私のこのごろ

長い年月を學校生活にばかり過しました私は昨年七月はからざる運命のもとに第一學朝の終ると共に全く學校に遠ざかる事となりました。

そして其秋空前の御大典の近づきました頃長く住み馴れた東京の地を去つて風暖い神戸に居を移す事となりました。東京を發つ一週間前に當時在京の尾道高女出身の人々八人（伊達房子伊藤菊村上のぶ政池つな小川春江兒玉よし子立神タネ藤井靜）と記念の撮影をいたしました事は誠によい思ひ付きであつたと今も嬉しく思つてをります。

神戸に參りましたからは全く家庭内の人となりまして今迄とは大層異つた生活をいたして居ります。

家は神戸市の東に寄つた山の手に在りまして背後には綠樹繁茂せる山を負うて居ります。又南方は海上が晴れやかに眺める事が出来まして丁度尾道の西國寺の座敷からの眺望が思ひ出されます。海面には常に汽船が澤山浮いて居りますが稀には軍艦も淀泊いたします。又遠くには大阪平野から紀州の山續きが一連になつて起伏してゐるのが淡く霞んでゐて又

言ふに言はれぬ趣があります。

家内は何時も誠に閑靜で御坐いますが唯人數の割に家も庭も廣いので何といふ事なしに相當に身体を動かして居らねばなりません。今や梅雨の期に入りましてしど／＼と降る雨の中に蛙のなき立てゝ居るのも全く時節にふさはしい感じがあります。

第二回卒業の大藪様はつひ近所にお住居でございますなかく立派な婦人になられた事を何時も喜んで居ります。大阪には第一回卒業の小西様や橋本様が居られるといふ事を聞いて居りますが未だお目にかかる折を得ませんけれど何れ相會うて昔語りを致す日を待つて居ります。

先日は壽美谷様から鯛網見物に来てはといふお便りを戴きましたが昔のやうに直ぐに參るわけにもまゐりませんけれど此様なお便りをいたゞく毎に尾道を思ひ出さずには居られまぬ。

しかし土地の様子も氣候も尾道によく似てゐる此地に長く住むやうになりました事は御地を思ひ出したり皆様にお目に掛つたりする機會を多くするわけでございましてやはり盡きの御縁であらうと嬉しく思つて居ります。

末になりましたが尾道の高等女學校には創立以來の三宅先生岡田先生の居らるゝ事が私共御地を離れて居る者には何よりの頼みの綱でございます事を申上げて將來の御幸福と御健康とを切に御祈り申し上げます(神戸市葺合町二〇九五旧姓齊藤石川ミネ誌)

金城下より

上村春野

お早いものでございます事、皆様方と御別れいたしましたから早や半年餘りを過しました。

御別れ後は度々皆様から御親切な御たよりを戴きました、誠に有難く存じます。いつもどんなにうれしく拜見致して居りますでせう。

で御座いますのに、つひ忙しさにかまけましては思ふ様に御返事もさし上げずに過して居りますことを誠に心苦しう存じて居ります。失禮ながらこゝに御わび申し上げます。

梅雨期に入りましてから大さう不順でございますが先生方を始め御卒業の皆様さては在校生の方々には御すが／＼しう御わたり遊ばされます由、誠に御結構の御事と喜び申し上げます。折にふれ物に附けま

しても、ちぶろに偲ばれて御なつかしう存じて居りますのは、皆様と一緒に楽しく過しました瑠璃のふもとの學び屋で御座います。五月の末つかた校長先生が御上京の御みちすがらを御立寄り下さいました時に、親しく御目に懸りましていや榮えに御榮え遊ばす御校の御様子や、相變らず御元氣な皆様方の御勉強ぶり等を承はりまして、どんなに御うれしう存じましたでせう。よい折か御座いましたら御訪れ申上げたいと存じては居りますが、なか／＼さ様な暇が出て参りません。承りますれば近々に『真たま』御發行の由で御座いますから、それで皆様の御動静も伺はれます事とたゞそれのみを楽しみに御待ち申して居ります。私はこの頃随分忙しい日を過して居ますが、御かげ様と例の風邪にも餘り冒されませず事なう務めて居りますからどうか御安心下さいませそれに此の節はこんな事を致して居ります、さぞ御驚きになりますでせう。當校では運動場の約半分八百坪許を畑に致し、個人園と名附けまして師範生にも女學校の生徒にも（當校は女子師範學校と縣立第二高等女學校とが併設されて居ります）各二百坪づつを與へまして思ひ／＼のものを作らせて居ります。

そのお仲間私等もは入つて居りまして、六坪の持前が御座います。で四月から丁度れんげ草の咲く頃に初めて大きな鍬だの鋤だの持ちました。運動時間には生徒と一緒にしまして、この頃の照り附けます日かげ等物とも思はず、畑のものゝ早く大きくなれと精出して居ります。重い鍬がなか／＼思ふ様になりませず、初めは随分鍬持つ持つきのおぼつかないので笑はれましたけれど、もう此の節は餘程上手に使へる様になりました。この雨で里芋もめつきり延びましたし、胡瓜もお茄子も大きくなりました。枝豆の芽も勢よく出ました。十日許前にさしましたおさつともよくつきました。もうこの分ではりの内八百坪の御用もなくませう。花園の花もきれいに咲きました。松葉牡丹にバルシヤ菊丁度眞盛りで御座います。秋はやさしいコスモスに小さな花園が賑ひますでせう。なんぢかかうみんな並べて申上げては自慢の様になりましたが全くのお話で御座います。どうか皆様お休みにでも當地方へ御出で遊ばす様な時には是非御立寄り下さいませ、私の百姓ぶりを御目に掛けますから。申上げ度事は數々御座います。すが下らぬ御話しに貴重な紙面を塞ぎましてはと存

じこれで御めん蒙ります。

日にく御暑さ増さるのみ、どうか皆様御身御大切に遵はしませ。

かしこ

卒業生消息

東京より

小川ハルエ

昨日訪れたやうな心地が致します向島の桃山の春色昨夜寄宿寮の枕邊に聞いた様な心地が致します千光寺の鐘の音も回顧致しますと烟の様幻の様に私の胸中をさまやふので御座ます鳥兎徒らに過ぎて歲月流るゝが如しと云ふ古人の言葉が妙に胸裏に刺激を與へて去年の三月玉の浦風千光寺の晚鐘吹く春風に消え行く鐘の響きに綿々たる別離の悲哀を新に來る入學と云ふ表面丈の歡喜に被られて第二の故郷とも云ふべき尾道を去りましたよりはや一年と二ヶ月になります校長先生をはじめ參らせ諸先生御卒業のお姉様及び御在學の皆様相變らぬ御機嫌よくいらせ給ふ御事と遙かに御喜ひ申し上げます今度幹事様より近狀通知せよとの御事單純なる學生生活それに文筆

に下手な私この頃は幾分専門的となりまして増々文筆の道とは仲惡になりました十分發表する事も出来ませぬそれかと申しましていつもく横着する譯にも參りませず出鱈目を順序もなく只御詫びまでにご筆を取りました

母校！母校！私共は日に幾度か繰返へされる言葉なので御座います何て涼味ある言葉でせう卒業致しますから母校を偲ぶ情は一層切に増して在校中には到底味ふあたはざる一種の懷しみかわいて參りますのは皆様と同様でいらつしやいませう何故にそんなに戀しく思ふかと云ふ間に對し別に之れと云ふ理由はなく只何となくなつかしいと云へばそれまでのもので御座ますがしかしよく考へて見ますと先づ校長先生を初め御諸先生の恩愛あふるゝみ恵みの内に同窓の間はごかく親善で姉妹の如くその間には何らの離てもなく一種いふべがらざる美風の存してゐた事などは今たに心地好い感しを起さしむる材料で御座ます殊に油繪の様な玉の浦の風景を眺めながら暖かい樂園にぞだちました當時を偲びますと懐しいと云ふよりも寧ろ羨しくなつて參ります一層詳に何故にそんなに羨しいとまで思ふかと云ふことにつきまして

は述べて見ませう。これには私の日々生活してゐる周囲の状態からお話し致します。扱て私は全く母校の蔭で入學許可と相成り希望満々として上京致しました。今迄瀬戸の清い濱邊に住んで居りましたものが面のあたり江戸川の濁流砲兵士工廠の煙の薄黒い空を眺め絶間なく通る電車の音を聞きましたあの瞬間は今だに忘れる事の出来ない異様に感じられました。將來三年間在學を悲觀せしめたので御座いますが寄宿舎は相變らず舎監の先生はまるで娘の如く思召し上級の方は妹の如く温い感じが致しましたのは母校時代と異りません私の居ります舎は外舎で御座います。て學校より歩いて二十五分位かゝります舎はやはり教室の教育と同じく生徒の品性を陶冶し學業をして自習せしむるを目的と致し割合に家庭的で御座います。して百人たらずの舎生の上に生徒監一人他に三人程先生がいraftしやいます。一つの大きい家庭同様でございますから一日中いゝんな否な事が御座います。ても舎へ歸りますと家に歸つたと同様な心地が致しました。和氣霽々としております室には三四人位それには上級下級一所にたがひに親切同情の下に品性の修養を主としてございましてその間には何等の離て

も御座いませぬ。一日の舎の行事は女學校時代と大差がございませぬ。炊事の方は時間かなくて少しも致しませぬけれども家事科生の秋共は土曜日には學校でお習ひ致しました。割烹の復習を致し土曜日の夕食の膳は常より賑ふのでございまして外出は午後六時まで一人で自由に出來ます。少しく自由すぎる様でございしますがそれかと申しまして不規律になるかと申します。と決して左様ではございませぬ。舎監から信用して下さる程それだけ私どもも責任を重んずるのでございまして。時々寮會室會なども開かれ土曜日の夜は樂しみます。又毎月誕生會といふもの御座います。して月のにお生れになつた方を皆合せてお祝ひするのでございまして。いゝんな真心こほりたる御馳走を致しました。のしいまどひが開かれます。次に日々の授業につきまして少しく申します。と全く専門的で只一方に偏するはまぬかれませぬので隙間には常識の養成といふ事に務めなければなりません。一週の授業は倫理(一時間)教育(二)理科(二)作法(一)國語(二)圖畫(二)家事(六)裁縫(一三)体操(三)手藝(二)まあこんなもので御座います。裁縫の方はとても學校はかりではやれませぬ。放課後はいつも

五時頃までも致しまして漸く細目だけ出來上る位の事で御座います。今になつてもつと女學校當時熱心に致しておけは好かつた。残念に存して居ります。先生と生徒との間柄は申しますに及びません。女學校當時と同じくそれは、御親切に御導き下さい。しかし生徒の間は女學校時代より異り、各々意見をのべて自己を尊重し、それに年齢から申しまして、大差がございまして十八才から二十五才まで、御座います。私どもはまるで子供の様學問も淺く經驗もなく、こんな事で皆さんについて行かれるかと入學當時はこんな事のみ心配致し、母校に對し不名譽にならぬ様な成績がとれるか、どうかとそんなあわれな状態に居ります。しかし勇氣忍耐と眞面目を以つて目的とする所に進みましたならば、私の様なつまらぬものでもついて行かれるかも知れん、と信じて諸先生の御高恩の方が一たりとも報ゆる所あらん事を望んで居ります。生徒の間はさほど親密といふ点に於ては、女學校の如く御座いませぬ。れも土地から申しまして、地球から北海道のはてまでのより集り初の内は互に心もわからず、只皮相的で到底深交などとは思ひもよらぬ事であると思つて居りました。なかく、そうま

では、こさいません。共同的精神級を愛すると云ふ点に於ては、實にうるはしいもので御座います。クラスのある事業につきまして、色々意見をのべ、その事がたゞへ自分に不賛成なりとも正確なるものと認めます時は、潔くその方に賛成となり、女にあり勝ちの後で、くづく云ふなど、云ふ事は決して御座いませぬ。將來目的を同うし、同じ趣味の上に國家教育の任にあたるもので御座います。からかくあるべき筈のもので、御座ませう。しかし女學校時代の如く、味ふべからざる友の親しみといふものは、一年やそこらへでは到底味ふ事は出來ません。こうなりますと旧友を一入なつかしく、又心強く感ずるので、御座います。幸ひ今年よりは同級の方とお二人と井出様と三人を迎へ、一層心強くなつてよろこんで居ります。時には在京の同窓の方皆様とお合ひする事も稀には御座います。立神さんとは、同じ校舎で學んで居りますけれども、科も異り、舍も異なります。ので度々お合ひする事もできません。が、時にはお晝休みの一時間などよく二人で散歩致し、昔語りに余念もなく、自分は再び女學校當時に返つて、母校の斜庭をさまやうてゐるかと思ひます。と煉瓦校舎嚴めしう庭にはクロバーの青々と繁り、すぐ下には電東の音

聞えるのを見ますとやはり昔ではない現在を自覺する様な事も御座います、在京の皆様は御元氣よく御熱心に御勉學で御座います吉岡様ども時々御めもじ致しますもう立派な奥様否來月あたりはお母様になりになるのでございます

二三日前杉野長先生御上京遊はされお久し振に相變らぬ御溫容に接し楽しい土曜日の午後立神様と二人で御伺ひ致し色々母校の有様等御伺ひ致しほんとに國にても歸り父母の膝下にある心地致し時の遷るも知らず午後五時すぎまでも邪魔を致しました終りにもう一言申したく存します附屬のお茶の水高女は日本でも屈指の有名な女學校で御座いますが私はいつも母校と比較して觀察致しますが田舎の母校は決してこの都でも一流の女學校に色々の点に於て決して勝ることも劣る所はないと存しましてこれは皆校長先生を初め諸先生のみ恵みと同窓の皆様御熱心なる御勉學に外ならざると私はいつもひろかに會心の笑を浮べて居ります、もう四十日立たぬ内に夏休みも參ります、歸途には一寸母校も訪れ諸先生や在校の皆様どもおめもし致されると楽しみに待つて居ります、殊にこの節の様に小雨がしどくど降り

ますと一入故郷も思出し母校時代の樂しかつた事を偲はしめますあの活けるバノラマの様な玉の浦と所謂春風みなきる家庭の趣味の滿せる母校の寄宿舎生活のインプレッションは永久の思出の種となり四季折々に遷り行く自然の現象は皆あのなつかしい母校の歴史を語る材料となるので御座います、

ろれに伴なひて生ずる玉の浦舎生活の聯想は噫實に永久不滅の聯想となつたので御座います、それでは無暗に尾道の佳景に憧憬し母校の生活を愛し現在の位置に不満足であるかと申しますと決してそうでは御座いません人間天職を自覺しろれに何んの故障もなく進む事の出来るのは何よりの幸福と思わねばなりません、かつて在學中学校長先生より『吾人は宜しく確實に未來を豫想し之を標準として今日教ふる生徒の世にたつべき現在に會ふて時代におくれざる志操堅實の人間を養成せざるべからず』といふお話しを承り愚なる私も將來教師といふ使命を帯ひてゐるもので御座いますから出来る限りを養成せんとする素養を作らんとを期して進みたく存しております

さらばまさきういませ師の君!! 同窓の皆様!!

尾道にて

繁田千代子

若葉の影四方にすが／＼しく山はどゞぎす待たれま
す頃はひ皆々様には如何御過し遊ばれますか私事
繁田の者と成りましてから早や一ヶ年が今に参りま
すさて先日阿蘇様からいつもの眞玉御發行に附き何
んでもよいから書けと申し越し下されましたけれど
も相も變らぬ溪間の流れ、只々木の葉の下をくぐる
ばかり之れと皆様に申し上げますやふな經驗も失敗も
御座いませんと大河内先生に戴きました慎目勵目丈は
一日も忘れないで居ますか元氣で作つた辛捧とやら
なか／＼辛う御座いますことそれとも知らず頂戴致
しましたのに然し何時かは洋上に出る心算です、も
一つ戴きました希望とやらそれは私の分は遠い／＼
所に置いてありますうです怠らず行かば千里のは
てや見ん……参りませうぼつり／＼

いづれは異郷にさすらふ身あゝ懐しい母校や皆様に
御別致しますのが何より苦しう御座います、されど
浮世の習ひ暫時忍ばなければなりません
そうなりますと命と便るは眞玉來年五千哩の異郷に

眞玉の光り見出しました時はどんな感じが致します
でせうか！こんな事考へて居るとつひ涙が出ます樂
しいやら悲しいやら分らぬ涙しかし所變れば品變る
面白い事ども御座いました節は御知らせ致しますこ
と致しませう、これは來年の事鬼が笑つて居りま
せうからもう止しますさて去る三月頃少しく病氣致
しました爲京都へ参りました一ヶ月程蔭氣な病院生
活には閉口／＼、でもそれなりに千歳一遇の榮を得ま
した折しも紫宸殿前の橘美しく實のりて見事ども
／＼仙洞御所の悠紀主基兩殿の様仙境へでも入つた
様でしたでは御座いせんあんな處が仙境でせう仙
境ども／＼仙境、御所で御座いますもの眞の翌日入
院翌日手術小さい低い私のは名ばかりの鼻それは
／＼危者です十日餘りは随分苦しみました國手の親
切愛より出し母の看護により日増／＼しに良くなり
まして外出許されましたのが二十日間餘の時初めて
西軒の沖田迄参りましたまだうら寒い彌生の空母の
肩にすがつてゆつくり／＼病院の門前を眞直ぐに行
くと御所の門そこを入つて御車寄せと仙洞御處との
間を通つて陽明門を右に丁度御所を横切ると鳥丸仲
立買の留所ろこから電車で西軒迄淨福寺で降りて沖

田の嬢ちやんと北野天神拜參梅林が眞盛り北向の連山雪を載いて寒風身を切ると云ふ有様そこに猿と共同生活して居る人が在りました、哀れ、く（上を見ればきりが無い下を見ればきりが無い）ろの通り辻の古着賣と云つたら見るのも嫌です、尾道邊ではとてもあんな物見られませんか京に田舎あり翌日は又ひねもす寢臺の人初めは一号舎に居ましたが母と二人で話す事も無く淋しいばかり手紙を見ては泣いて居ました電氣が付くと又々夜も休まれないか知らんと前からこう思つて居る爲か何日の夜も何日の夜も眠れませんか退院數日前三号舎へ參りましたことはすつと寢臺が並んで大勢いらつしやいます、初めは八ヶ間敷う御座いましたが翌日からはお連も出來て氣も紛れ三人同じ様な者が並んで居りましたから昔の様に音楽をやります

一人は京都一人は丹波木ノ下藤吉郎齊藤別當木曾義仲よくも揃つたものです木ノ下さんの妹さんはサイトベントーサンこれがお花見の辨當等云ふので一同大笑ひそれから毎日毎日東山方面へ物見に出ます銀閣寺と動物園は返す返すも素晴らしい物です帝室博物館の佛像怖いやうですお終ひにはそこ／＼に飛ん

で出ました三十三間堂の佛の數は一千一体で（三萬三千三百三十三体）とはよく出來たもの或人は昔は良いお仕事に在つたものだなと云つて居ました、黒谷様で石童丸清水様で俊徳丸何れも昔語りを忍ばせます一日二條御離宮拜觀天國も龍宮もこんな所なのでせう京都はこれ位で止ませう退院後伊勢神宮參拜（世に親ばか）とか子を思ふ心の量り知れざる事今更ながら骨肉にしみます一諸に參宮せよと再三母に手紙が參ります矢張り私の兩親も（ばか）でせう何日この思ひに報ずる事が出來ませう萬分の一なりと返さではと深く厚くちかひました午前七時幾分京都發途中下車で桃山兩御稜參拜神去りましし當時を追想致し御神体の新なるだけそれだけ深く身にしみて有難き事限りなし御供致せし乃木將軍の社も工事中なりある將軍の如きころ三世も御側に仕へまつるでせう山田驛后後四時着きました國母陛下には同じく二時當驛御着輦在らせられ内外宮中央に在る御安在所に御越の由宿を宇仁館に定め電車にて兩宮參詣百聞一見にしかすげにこれは／＼とお伊勢様現ることもなく何事のお在しますかは知らねども……………と心中で限り在る言語いかで之の感を言現はす事が出

來ませうまして私の如き不文の者に在いてをやです
 皆様も御參宮遊ばしたらほんとにそうお感じなさい
 ますでせう翌朝電車で二見見物音に高き二見ヶ浦に
 は寒心くしかしあの兩岩の間から太陽が昇る様に
 見へるとすればそれは神妙く感心致します只水平
 線の大きいのを見たのはあそこが初めてと御座いま
 すあそこは大平洋續き遠く彼處が忍ばれます歸り
 の途中外宮御參拜あらせらるゝ陛下を拜しました流
 石は旧都四方に眞香が満ちて居ります奈良の都の八
 重櫻でふ櫻左に興福寺燒跡を過ぎ博物館を右に進む
 頃東大寺の鐘をーんーん車夫が急いで參ります、
 門がしまると汗をしぼつて引きます氣の毒千萬大佛
 様は名の通り大きな佛様春日神社の奇麗なこと金の
 燈籠石の燈籠の澤山なこと車夫に鹿の數を尋ねまし
 たら燈籠と鹿の數は知りませんとの答へ花ガルトの
 鹿に紅葉はこゝから起りましたやれ憎くやと鹿を殺
 されました、可愛ううにお前には花を手向ける人
 も無からふとその跡へ楓樹を植へたそうですとべろ
 く上手に春日神社を下と右手に御安在所が御座いま
 ます平日は拜觀出來ませんとの事二月堂三月堂三笠
 山行水も昔を語らなばかり猿澤の池衣掛け柳は名は

かりあれど名にしをう柳かと疑れますもつとも年を
 經しせいでせう人も木もこうしたもの其夜再び京都
 へ奉迎門が出來て居ます伊勢のアーチ奈良のアーチ
 各々代表して居ります流石は京都電車で西軒迄又折
 返し驛へ其の夜行で尾道へ夜もすから雨しどくと
 降つて尾道の空も同じく雨天珍らしくも無い事澤山
 書きました井中の蛙が初めて旅を致しました旅行記
 記念ともなひますと思つてかくは御笑ひ種に
 暑さ日々に加わります皆々様御身御大切に祈ります
 又來年も御機嫌よろしく居らせられますやう

六月一日夜

鯉城より

粟井ふくの

花鳥の名残もつきぬ間にゐつしか春も打過ぎて更へ
 し袂の朝風心地よう相成り候折柄師の君様を始め皆
 々様にはお障りなく御暮し遊ばされ候やお伺ひ申上
 候下て私もお蔭様で日々相變らず無事にすごし居り
 候間何卒御安心なし下され度候げに待たぬ月日は早
 く候て悲しき思を胸に致してつきせぬ袂分ちまゐら
 せしより今や三度の春秋を廣陵の地にて送り申候

今更ながら月變りなきに驚く外は御座なく候一別以來御文すら參らせず誠に申譯なき御無沙汰幾重にもお許し下さる様願ひ上げ候いかに御文參らせざりし日は長く候ともうけつる師の君の御なさけ友情厚き皆々様の御やさしの御心は幾十里へだつとも夢の間も忘るゝ事は御座なく樂しかりしスクールライフのなつかしき思ひはあれかれ廻轉いたし居り候いつぞやの同窓會にて承りし先生のお話を思ひ出してはたぶなつかしさに翼あらば飛び行きてと思ふ事幾度か候されど、私に翼なく身は山川の遠き外にあり世俗の用務にとらはれて心のみがめつつ本日まで過ごし候月の光のもれる時夕陽の天かざる時一人窓にもたれて古郷の空をさまよい居り候母様はゐかに皆様は如何にと……………今日この地の同窓會は如何候や御入會の方々も多く候故さぞかし御盛會ならんとはるかに喜び居り候申し上げたき事は濱の眞砂の数のつきぬ程御座候へども御承知の鈍筆の上あまりのなつかしき筆も空行く心地して思ふ様かけ申さず候何か家事の経験でもかけよこの事に候ひしが経験談とても別になく此度はこれにてお答といたし置き候私も遠からずこの第二の古郷を

すて又遠き旅に出る身に御座候其時こそはせひ尾道にも下車して皆様にもお目にかゝりたく今より怠りなく日數のみかぞへ居候終にのぞみ諸先生並に會員御一同様のますく御健勝に渡らせ給ふ様切に祈り上げ候猶まだ第三号も近々御發刊遊ばさる候よし皆々様の御消息も悉しく拜承ゐたす事叶ふべくと樂しみ御發刊の日を待ち居り申候
かしこ

吳 より 池田 壽 子

うらゝかなる朝日かげの新月の花に輝くさまなにと
なうそぞろに心もうき立つ様になりまゐらせ候折柄
諸先生様はじめ會友諸姉様方には何の御恙もあらせ
られず御すごし遊ばされ候や御伺ひ申上候さて私事
無事にて罷り居候間他事ながら御休心なし下され度
候さて先日『クラスメート』の下枝様より御文給わ
り一筆にてもよろしき程に妾の如きものの近況をど
の事に候ひしまゝ之まで無沙汰の御詫方々少々白紙
をも汚すつもりに御坐候ひしも日頃より筆無情なる
私に候間つひ彼是ど所用にとりまざれ居候うちつひ
く思わぬ失禮のみ重ね申候段平に御許し下され度

候 昨年の春富地に参り候てより馴れぬ家事のこのの
みに追われ／＼て日をすごし居候うち早一とせも立
ち候へども之とて取り上げて申上ぐる事候はねば只
々常の起居をのみ少々記しまゐらせ候朝五時すぐる
頃より海軍工廠職工出勤の靴音荒々しきに夢破られ
て起床後運動方々掃除のお手傳ひなごすつかりすま
せてやれお針をと思ふ時はいつも八時頃に御座候け
れども午前中は二時間余りしかお裁縫は出来申さず
十時頃からは勝手の方の見繕ひ午後一時頃よりよう
／＼の事四五時間のお裁縫時間を得申候夜に入りて
は家庭簿記の整理をすませて新聞雑誌を見讀するを
常と致し居候斯様なる極簡短なる生活を毎々繰り返
へし／＼て消光致し居候末筆ながら諸先生様會友諸
姉様方々御身御大切の程祈り上候 あら／＼かしこ

五月廿八日

岡山より

日 高 貞 子

御なつかしい皆様

長々御便りも致しませんで失禮致しました

皆々様御丈夫で勉強して居らつしやいますか私もま

す／＼元氣で大きくて好く肥えてるものですから因
つて居ります御心安う思召し下さいまし

此度はこの私まで消息をどの事うれしく存じます妾
も年をとつてしわが三つもふえましたけれど赤ちやん
は昔に變らず赤坊可愛がつて下さいまし當地へまい
りましてから茶花琴裁縫へ通つてゐました裁縫の先
生は尾道からの御知りあひでしたから御家へ一人通
つて居りました先生と尾道話で笑つたり話したりは
んどに楽しく暮しましたが先日他地へいらつしたも
のですから淋しくなりました

當地へ來てあまり外出しない私、友も少ないので尾
道へ居たらといつも／＼思つてゐます

ただ一人の友とあへば口相撲とつて皆様に笑はれ日
高さんと居ると笑はなくつてはならないほんどに面
白い方といつては笑はれたり笑つたりします妹も學
校から歸つては先生だの學校の友の話多き度、母校
の事でも受給つたならと夢では皆様や先生方と幾度
御目もじしてお話をしたでせうなれど夢よりさめれ
ばなつかしい先生や皆様の面影すら見えすもしもほ
んどに會つたのだつたらとあと始終思つて居ります
去りにし今年の正月には舊友山崎さま様が居らつし

つて羽根ころつかね昔話の数々浮び出で公園や郊外へ遊びにまいりました好くけんかをしましたね謹さん《弟さん》と相撲とつて母に見つけられては笑はれましたのね今はもうあの眞似も出来ないわいゝえ今でも、相撲も人形事もするはなんて妹が口を出すほんとに楽しい思出です幼き友はどなつかしいたのしいものがありますうまして幼き時より喜き者へ教へみちびき給ひし師の君が忘れられませう皆様をしたふこの淋しい友に御便り下さいましていざなによるこびませうつまらぬ事長々と書き誠に済みませんつい嬉れしさにつれられて皆様岡山へいらつしつたら是非御立寄り下さいまし驛から遠からぬ所ですから

末筆ながら皆様の御健康を神かけて祈り上げます

かしこ

伊 豫 より 伊 藤 春 江

此の節は大分暑く成つて参りましたが、先生方始め同窓の皆々様には御變り御座いませんか御伺ひ申し上げます次に私事は無事にて暮して居りますから他

事乍ら御安心なし下さいませ別に書く事が御座いませんから、御挨拶のみ申し上げて置きます

吉 田 より 井 口 八 重 子

長閑なりし春もいつしか過ぎて今は早や螢飛びかふ頃ほひと成りました諸先生方を始め同窓の皆々様方には御變もなく御過し遊ばされますか私は御蔭様でつまなく暮して居りますからはばかりながら御心安く思召下さいませ扱今度は日頃の申わけなき御無沙汰も願す消息を知らせとの御言葉に甘へまして少しばかりを、私は母校に悲しい別れを致しました年の四月中旬當地に來ましてごどかぬがちな所を道びかれつゝ極めて單調な日暮しをして居りましたが昨年三月一日に母と云ふ重荷を負ふ身と成りました子供が一人居りますと今まで大人ばかりでひつそりして居りました家庭もそれはく賑やかで御座います此節では五足六足歩める様になりましたがまるで酔人の千鳥足といった風で誠に危ふうございます諺に子を持つて知る親の恩とか申しますが大變世話に御ざいますけれども又なか／＼楽しみなものでもござ

います同窓の姉様達は私がこんなこと申しますと母校の庭を走せ廻りし當時のことを思ひ浮べて不思議に思召下さることゝ存じます人様ばかりではございません自分ですらわすか三四年によくもこう變つたものと呆れる位でございます御存じでもございましょうが當地は毛利公の出生地でかなり賑やかで大低は不自由なくそれに廣島へ近うございますので大變便利でございます表へ出ると町で一足裏へ出ますと青々とした山の麓から一面田ですつかり田舎景色と變りますこれから先は九時過る頃までは一面霧で十時頃から日があたります夜分には川風はよい心地に吹き螢は飛びかふなどなく、尾道邊で味はれぬ處が多うございます然し長虫にはへいこう致します何卒汽車もつきましたことですから夏か又は秋茸狩時に御越し下さいませば御案内申し上げますよ末ながら諸先生始め皆々様の御健康をかげながら祈ります

尾道より

阿蘇 薫

四季折々の事にふれそゝる皆様の偲れぬ日は御座な

く候へどもとかく出身後は思にまかせず御無音に打過ぎ失禮の段惡しからず御許し給りたく候

其後師君様を始めまつり皆様には御機嫌美しく御越し遊ばし候や御伺ひ申上げ候次に私事はお蔭様にて日々恙なく暮し居り候まゝ何卒御安心下され度候扱て本年も例によりて會誌眞玉御發行遊ばし候に付足らはぬ私共にまで何にか書けよとの仰せ事誠にうれしく存じ上げ候日頃より何にか變りて面白き事珍らしき事あらばと常々心かけ居り候へども何時も變らぬ生活にのみ過し居り候へば是れと申す様の事も御座無く候へども折角の御厚意無に致すも如何かと存じこゝにつたなき筆あやつり申上候

同窓の皆様にも御出身の後には各々御變り遊ばされ候事と存じ上候早く本誌によりて美しくしき御消息を拜し候事を樂しみ待ち居り候

御互に母校の庭をかけ廻りし昔のなつかしく相成申候日増しに御暑さ厳しくこれよりは梅雨のうつとう敷頃はひと相成候まゝ一入を御尊體御要心の程伏して祈上候

末筆乍ら母校の隆盛を校友會の發展を乍蔭祈上候
先は久々にて御様子御伺ひまで かしこ

尾道より

村上下枝

[131]

花にはこつた千先寺もいつしかすがすがしい緑の装ひと變りはや大路には涼しげな白衣の人も見え初めましたあゝいづこを見ても活氣にみちみちた青葉の頃常ならば楽しいく大好な若葉の此頃も今年はたゞ亡き母をしのぶ思ひ出の涙のみ過して居りますあゝ世の中に何が幸福だと云つても両親のある人はど子等をのこして歸らぬ旅に行きましてから早くも二ヶ月は過ぎ去りました漸く此頃になつて少しは涙も乾きましたけれどやはり雨の朝風の夕べ物にふれ事にあたり在りし日の事共思ひ出されてあゝ母が生きて居たらと同胞打ちよつては涙にくれる事は日に幾度で御座いますあゝ今更何と云ひましたとて歸らぬ事で御座います大きな運命の力の前に小さな人間がいくらもがいたとてどうなりませう

生者必滅のかなしい世の習ひと強いて心を取りなほしますものゝ書きのこした和歌の数々形見どのこる手馴れの品々何れ涙の種ならぬは御座いません晝の間はまだ何かとまぎれて居りますが夜ふけてなご一

人佛壇の前に坐つて細く昇る香のけむりの行方をながめて居りますと又してもあの悲しいく最後の日の事病中のくるしんで居た姿からまだ丈夫で居た時の思出はては幼い昔暖かにひぎにすがりながら聞かれた昔語りの節々やむづかる妹をすかしながらやさしい聲で子守歌うたつたなつかしい母の面影まで走馬燈の様に次から次へ目の前に浮んで來てもうくたまらなくなつてしまひます人一倍子供の可愛いかつた母はさぞ死んでゆきたくはなかつたでせうあゝもう何處を尋ねたとて二度この世ではあの慈愛ふかき母には夢の外に見る事は出來ませんいくら大きな聲で叫んだとてやさしい母のいらへは聞かれませんが夕方等淋しい心をまきらしたさに往來を眺めて居ります時樂しさうにお母様らしい方と話しながら通られる人を見ますと私にも母が居たらとかへつて涙をさらはれる様な事も御座いますしねぐらに急ぐ鴉を見ましてあゝ彼等には母がある親子樂しくねぐらに歸つて居るのにと又もや双の目は涙にくもりますあゝせめて五年でも一年でも半年でも長らへて居ましたらとかへらぬぐちも出て來ます山よりも海よりもかぎり知られぬ其めぐみの一つにもむくひられない

中に世をへだてゝしまひました母いつか學んだ風木の悲風樹の歎と云ふ言葉がしみぐと味はれます去年の此頃亡き母が愛でゝ培ひし園の楓は今年も又綠美しく萌へ出でました散つた花は又ひらきますけれど逝きにし人は永久に歸つて來ないのが自然でございませうものもう何も申しませぬ世の中にはまだ親の顔も知らないやうな不幸の人もあるので御座いますたゞこの上は一人の父に孝をつくすのが亡き母への午向けとひたすらにいろしむつもりで御座います長々どくだらぬ事のみかきつらねました失禮は惡からず御免し下さいまし追々あつさに向ひますから師の君はじめ皆様方くれぐれも御自愛の程祈り上げます。

吉和にて

川本ふく代

皆様お許し下さいよ御無沙汰ばかり致しましておわびの致しやうもございませぬ皆様とお別れ致しました時は梅の蕾もまだ固うございましたに今は其花すら散り去つて黄味をおびた柔らかい若葉も日一日と綠をまして早初夏と成りました同じ頃でありながら

去年の私達と今の私達其生活に於てどれ程異つたでせう去年の私達は靴や袴をはいて校庭を飛び廻つて居りました寄宿前のボブラの木蔭に大聲あげて笑つてゐましたのに嗚呼其友は何していらつしやるやら皆様がなつかしくてたまりませぬ毎日ぐと忙がしい中にも暇さへあれば思ひは皆様の上に走ります私は母がゐませんで學校を卒業すると家事全部を引受ました裁縫等は下手ながらどうにかこうにかやつて居りますしかし毎日のやうに弟の着物の綻びを縫はねばならぬのは弱つてしまひましたとてもぐと學校等で思つたようにはゆきませんでも田舎程香氣な所はないでせうそれに私の家は街道をはなれてゐますから自轉車をとばす人も稀にして自働車一ツ通るでなし電車のベルが鳴るではなしるればぐと香氣です百姓たちは朝は早くから家の戸締切で飯をかついで煙草をくゆるしながら田畑へ出ます夕暮には親子三人つれだつて里歌うたひながら又ふらりと歸つて來ます然し日中の働きはわきで見る目も氣毒です八九才の小兒さへよく親の仕事を手傳ひます彼等は仕事もつて唯一の楽しみと致して居ります芝居活動よ等口にする者もないでせう私は毎日針の手を動かし

ながらこうした淳朴の風景をながめて居ります皆様
今はさつき十日の夜九時なのです片破月が高く空に
のぼつてゐます皆様もどこかで此月を眺めていらつ
しやる事でせう。

因島より 岡 せき乃

筆取る暇のなきにもあらぬを例の無性者として心もな
き御無沙汰いたせし罪まげて御許し下さいませ

諸先生を初め皆様には御機嫌うるはしくゐらせら
れますか私事御かげ様にて無事にて昨年主人の渡満
後は毎日縫物をこころして語るに友なくまことに淋
しき月日を送りをりますことゝてたのしく學次暮せ
し昔のことども何くれと思出で御なつかしさにたへ
かねては針の運びのぬるみ行くが常で御座います久
々にてくわしきこと申上たきは山々なれど先日御な
つかしき御葉書もて會誌御發行の御趣き御通知下さ
れしも折悪しく留守いたし本日拜見いたせし様な都
合にてあまり廻引となりましたので取急ぎ拙き筆を
もかへり見す失禮いたします

諸先生皆々様の御心づくしの有益なる御話承給はり
たく御發行の節を今より樂み待ち居ります何卒よろ
しく御導きの程御ねがひ致します

終りにのぞみ母校の繁榮

諸先生皆々様の御健かに幸多かれど御祈り申上げま
す かしこ

尾道にて 三坂 玄子

花は空なしく散りはてゝ青葉若葉の頃とはなりまし
た諸先生をはじめ同窓の皆様御機嫌うるはしく渡
せられる事どうれしく存じます私も變りなく暮して
居りますから何卒御安心下さいませ申す迄も御座い
ませんが卒業後はどうか消息も遠くなり勝で日々妹
と話しては皆々様をなつかしく思つてます處此度も
手厚き校友會の雜誌にて御様子を承る事かと誠にう
れしく私にも何か近頃の有様を知らせよとの事で有
りますが之と取り出して申上げる言の葉もなく終日
家にてつきせぬ事のみ致して居ります
春の日もなほ淺き頃一人の母とはなりました私には

似やはぬよく太つた色の黒い丈夫な子供で御座います。して小さき壹人の子の爲家内中は一入の賑を増して云はでも事濟みたるにと思ふ事は度々有ります。近頃ではたゞ子供の事のみに追はれ筆取る暇さへむつかしく御座います。すくたらぬ事のみ長々書き連ねて誠に失禮いたしました。

此度は之にて……

末筆ながら益々母校の發展を祈り上げます

さらば

宵の思出

壽美谷多賀子

嗚呼春 春は行つてしまひました 華かな 濃艶な少女の様な美しい暖かひ長閑な春は夢の様に幻の様に私の手からすうと消えていつてしまひました。さうして變化の多い夏はあの緑蔭の梢より流れ初めて紋波の如く バラダイスの如く夏のシイモンは廻轉され 幾多の人の詩に幾多の人の情緒を乱すこととせう。

私は今二階の一隅に初夏の夕の心好い風に吹かれな

がらみ空の花のさかりの星を仰ぎ見つゝ筆を手にし
てなつかしき思出に心を乱して居ります。

思ひ出づる私の目にはいひしれぬ涙がにじみ出ました。感喜？ 悲哀？ なんともいひ様のない自分はいふ時よく詩や歌を書いたものです。ですから今日も其例にならつて何か書いて見たいものだ。筆を取りなほして見ました。けれど嗚呼 何故でせう？ 手はこんなに振へます。さうして私があせればあせる程取止めもなく心は乱れに乱れるのです。

折角隙をぬすんで母校への便りの一片にもと思つたのに私の計畫は全然破壊されてしまひました。私はもう今更思ひかへして考へ出す勇氣も何もありません。さうですか。へつてこんな感情の高まつて居る時に拙筆の私がよけいくだらない事をかくのもと思ひ附いたものです。から新らしく書初める事をよしてしまひました。けれどせめてもの記しまでに二三日以前の日記の一節をかゝげて失禮さして頂きます。

朝側の如く驛より交代して歸つて見るとなつかしや都の某女よりの玉章が机の上にさも主待ち顔に置かれてあつた『まあうれしい』と私は手に取るや手紙の解割を初めたわづか片手ににぎられる程の此手紙

の中には都の景色も友の安否も秘事も友より友の噂もあらゆる方面あらゆる地方の事が封じられてあつた

私は下女が食事をすゝめに來るまで之をくりかへし／＼空覺への出來るまで讀み續けて見たらうして心行くまで味つて見た手紙の終りになつかしき古里の空を眺めつゝなつかしき母校や『なつかしき友を夢見て涙を流して居ります』なんていふ意味の事が記してあつた

自分はいふ手紙の文は度々他の人々からも受取つたけれど今日程感した事はなかつた何故つて人から聞かれたつてお答へする事は出來ないけれどとにかく此一句がひどく私を刺激した事はたしかである都へ／＼と憶れ出た友にも又古里は捨て難くなつかしいものであつた

呼ばれるまでに茶の間へ行つて見ると妹達は互に膳に向つて何かしきりに話しあつていた『おゝ今日は日曜』私はすぐ直感してしまふ事が出來た何故ならばこうやつてたのしく朝餉を一所にするといふ事は休日以外には決して例のない事だから私は二人のお話があんまり面白さうなのでそれを耳にしながら今

日の一日を如何に過したら愉快だらうあれかこれかと選抜しながら食事を初めた私が此を終つた頃にはにきやかな妹たちの聲も姿も茶の間には見る事も聞く事も出來なかつたけれど夏の名物の蠅のみは嵐のてつた後の茶間に嫌はれても追れてもやつぱり立ち舞つてゐる折柄二階の方から『イスジスマイキモノ』おや『きものとは奇抜だ』と私はあまりにも發音の妙なのに笑ひながら二階へ上つて見た妹は心附でや同じ事を幾度となく繰りかへしてゐた『包さんキノツていはいないでドレッスとでもいへはい』一寸『姉様顔をして教へてやると』でも姉様まだ私等はその様な事教はらないのですもの教へられないでせうそれよりこれをローマ字にして行く方が好いのですと笑つたのでうれもさうだいらぬお世介をしてかへつて妹に訓された私は兎もするとこんな事で失敗する氣を附けませうと反省しながら下に降りた下には下女がもう臺所方附けていたどうれ私も座敷の掃除など致しませうと箒と雑布よと用意にかゝりた昨夜は來客の爲三四人もかゝつて掃除をしたのではとんど今朝は箒を入れる余地すらないからやつて方附いてゐる座敷はちり一つ落ちてゐても目だつ損な

ものだあと感じさせられたもう掃除もしたあと好い
心持ち塵一つ落ちてゐない此室に私の今日の気分が
みなぎつていたほんとかういふ時に客でもあつた
らどんなにお客様もうれしく自分も嬉しい事でせう
思時には來客つてもものはないものだ世の中つても
はこんな事にまでわからないといふ意味を含んでい
るらしいこんな風で誰も來さうにないので中庭へ降
つた中庭は歩く程廣くはない僅か三坪しかないのだ
ものうれに池もあれば石燈籠もある又雜木所狭きま
まで植ゑてあるからけれども私はこせうこましい庭
の池畔に立つて行きどづかない手入のしてないなが
らも自然の神の懷に思ふまゝに生ひ立つたのびやか
な風致を大變愛したものです春來れば木々に花咲き
蝶に小鳥に春を歌ひ春を喜び夏來れば青葉若葉に螢
集めて時鳥の初音待つなど又秋には池面満月に魚が
戯れ冬來れば落葉地に充ち白雪枯木に咲くなど公平
なる神の慈みはなか／＼に陋屋をも見のがし給はな
いのである自然の風物を愛する私は決してけうおろ
そかに思はぬのみか不變愛してゐる心淋しい時には
かなしい時にはよくこのちひさい池畔で自作の歌を
口づさんたものだ午後は専裁縫をしたたきなす汗も

かまびすしい鯛の聲ものかはど勇氣を鼓して一枚
仕上げた

入浴後は蚊と暑さに追いつてられて表に荷子を出し
た浴衣の袂にうよと吹きくる心よい風に夏の香がみ
なぎつていた按摩の笛は遠く近く余韻哀れに長く
／＼人の心をどんなに動かしたことであらふ

《六月某日記中より》

京城より

池 龜 琴

寒空に嚴然として立ちし枯木のボブラもアカシヤの
並木もいつしか青い芽をふき活々とした自然のめざ
ましい働を見せる様になりましたなつかしき師の君
同窓の皆様にも御變りなく清々しき初夏をおむかへ
遊ばす事と存じます海をへだてし當地に参りました
のはまだ昨日今日の様に思はれますのに最早一年
になりました朝鮮語の片言もおぼへまして市場等へ
も買物に行くやうになりました娘時代には種々な稽
古におはれ炊事等の事はいたさすうか／＼とすこし
まして自分が一家を持つて見ますと中々難かしいも
のであれもして置けばよかつた習つておけばよかつ

たと思ふ事ばかりでございます私は家事経験談等は
 申上られませんが皆様の有益なお話を楽しんで居る様
 な有様です。私が當地に参りまして知り得た氣候風
 俗の事等少し申上ませう

朝鮮の氣候は一般に大陸的で寒暑共に甚だしゆうご
 ざいますしかし本年は大變暖かで且つてこんな暖か
 い冬はなつかたどの話で始ての私は幸しました暖か
 いと申しましてもとても内地で想像する様な暖かさ
 ではありません

まして中國に居りました私に取つては随分辛うござ
 いました寒い時は零下十五度位で昨年は二十度とか
 ストープの側にある湯まで氷つたそうです本年はそ
 んな事はございせんでしたが水分といふ水分は皆
 氷りました當地はありがたい事には三寒四温で三日
 は堪へられない様に寒くても四日間は暖かで春の様
 な日もございますからいくら寒くても四温を楽しん
 でうの間に洗たく物等をして置くのです

夏も随分暑うございますが朝夕が涼しいので冬の様
 に苦痛は感じません

朝鮮人の氣風は一体に従順でございます大變のんき
 な者で夏の暑い時などはどんな所でも涼しそうなれ

ば直ぐ寝るのです道路等に寝て居るをよく見受けま
 す教育は一般に低いのですが此の節は鮮人の行く學
 校も出來まして教育に務めて居るのでございます下
 流の鮮女の仕事は重に洗濯でどんな汚い水の中でも水
 のある所には石をすへて杓子のやふなものでバタバ
 タとたぐいてよそれを奇麗に落します(洗濯する前
 にソリダで煮て置くさうです)それを又キヌタでた
 ぐいて立派に仕立上げるのでございます服裝は男は
 上着(チョッキを着て襦袢位の大いさで右の胸の所
 で紐で結んで居るのです)にズボン(足の所で紐で
 くくつてあります)をはいて居ります其の上に外出
 する時などは日本の着物の脇へ三角の襦をつけ短か
 い衿をつけた様な筒袖の衣服を着て右胸の所で一寸
 位の巾の紐で結んであります(日本の羽織のやうな
 物たうです)女も男と同じですが袴をつけて居ま
 す外出の時はかづぎをかぶつて顔を見せない様にし
 て居りますうして奇麗な色彩のしてある布の靴をは
 いて居ます鮮人の髪は男はチョンガー(獨身)の間
 は前を分けて三つ組にして下げて居りますが妻を迎
 へますと結髪して馬の尾で編んだ冠を附けるのが禮
 儀になつて居ります(二寸位の巾)女は前を分けて

首の所で巻きかんざしで止めるのです

朝鮮の景色のよい所は御存じの金剛山でせう夏になると登山者が多いそうです私も朝鮮に居る間に方々の舊跡を見たいと思つて居ます京城には可成り立派な建物も多く道路も改良されて居ります市内市外には門や城跡があつてそごろに昔が偲ばれます往來は凡て右側を通行するのです電車も通ひ運轉手車掌も皆鮮人で上手に日本語を使つて居ります

景色も當地ではこれとて取りたてゝ云ふ所もありません赤土の山ばかりで殺風景でございしますが南山石壁の下に漢陽公園がありまして夏の夕此所に上り涼を得るものが澤山あります市内龍山の全景が一目に見られて眺望がよろしうございしますその他市外には獎忠壇《韓國士卒の招魂地》清涼里など景色のいゝところがあります當地は一体に雨が少なく以前は傘などは入らない位だつたのがこの節は雨も多く雷も鳴るやうになつたそうです

植林が獎勵された爲だと思ひます當地ははげ山が多いので内地のやふな秋は見られませんが只すみ切つた空と鮮女が夜業の砦の音城跡に淡くかゞやく月の光靜かな夕べ歌ふ鮮人の哀歌などが秋らしい氣分を味

ふ事が出來ます

何だか下らない事ばかり長々としたため貴重な紙面を汚した事はおこしはり申上げます家事の暇々に筆を取りましたので文も前後して居りますが御判讀下さいませ

終りに母校及び校友會誌の永遠に榮えん事と先生はじめ同窓の皆様の御健康を祈り上げます

さらば



會計報告

校友會々計報告

大正四年度決算

收入之部

四八四、一〇一

一、前年度越高

九五、〇〇一

一、會費

三七七、二〇〇

一、利子其他

一一、九〇〇

支出之部

四〇五、七〇五

一、文藝部

二〇四、二五

一、運動部

一一六、三一〇

一、雜費

八五、三七〇

差引 殘高

七八、三九六

大正五年度豫算

收入之部

四六二、三九六

一、前年繰度越金

七八、三九六

一、會費

三八四、〇〇〇

支出之部

四六二、三九六

一、文藝部費

一九八、〇〇〇

一、運動部費

一一〇、〇〇〇

一、雜費

九〇、〇〇〇

一、豫備費

六四、三九六



同窓會々計報告

第一回卒業生

河本キミ
小倉ヒデ吉岡繁子
野田光

第二回卒業生

鴛田文代
大鏑ハナ
大西たみ
日高貞子三上ツチ
中川秀子
黒木信恵

一金貳百貳拾六圓七拾六錢五厘 前年度繰越金
 一金百七拾貳圓五拾錢 第五回及第三回卒業生會費
 一金拾參圓六拾七錢 大正二年度以來ノ利子
 一金參圓四拾四錢 定期預金ノ利子
 一金參圓貳拾五錢九厘 先年末先生方ノ寄附金ノ積リシモノ
 合計參百五拾八圓拾四錢四厘 (總收入)

一金參拾九圓五拾錢 眞たま第二号代
 一金貳圓八拾七錢 郵税料
 一金拾八圓七拾九 錢茶菓子辨當料
 一金參拾參錢 雜費

合計六拾壹圓四拾九錢 (總支出)

差引殘金參百五拾八圓七錢九厘也

昨年七月以來會費をお納め下さいました御方々
 へ一々受取証差し上げませんでしたから御免下
 さいませ 受取証の代り此處に御姓名を書きま
 す、御未納の御方はお納め下さい



附錄

同窓會員名簿

第一回卒業生

現住所

尾道市藥師堂町	尾道市長江町	尾道市長江町	安藝郡中野村	松山市港町	大分縣宇佐	東京市本所區千歲町四十八番地	岩國町魚町	尾道市久保町	比婆郡東城町	東京日本橋區大傳馬町	菅品郡官内	尾道市土堂町	備中都窪郡帶江村	沼隈郡今津村	尾道市久保町
死亡	旧姓粟村	旧姓生酒	旧姓宇佐	旧姓小川	旧姓小倉	旧姓大田崎	旧姓大田垣	旧姓金丸	旧姓金丸	旧姓末田	旧姓桑田	旧姓桑田	旧姓桑田	旧姓桑田	旧姓桑田
夫野千代子	西中トク	生酒コト	井出上千代花	辻そひで	小倉ひで	森ハナ	小田マサヨ	柏原光代	河村初音	伊藤菊野	佐々木チカ子	東島カメ	楠戸エイ	河本キミ	小西ウラ
御調郡栗原村	尾道市尾崎町	御調郡市村	賀茂郡竹原明神	兵庫縣上郡町	廣島市大須賀町	尾道市米場町	尾道市藥師堂町	大阪市北區福島北一丁目	名古屋市板屋町	尾道市十四日町	菅品郡府中町	廣島市三川町	島根縣濱田町	安佐郡可部町	尾道市土堂町
旧姓富田	旧姓堂野	旧姓永井	旧姓永井	旧姓永井	旧姓永井	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本	旧姓橋本
土屋フサエ	富田サカ	堂野エイ	中野トセ	長安愛子	橋本信子	野田喜代子	野村喜代子	橋本喜代子	橋本喜代子	橋本喜代子	橋本喜代子	橋本喜代子	橋本喜代子	橋本喜代子	橋本喜代子
幸	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

神戸市布引町三丁目
大阪市東區和泉町二丁目
臺灣澎湖順媽宮公學校

旧姓吉原
門田ミキノ
高橋ツ子
高橋春子

第二回卒業生

現住所

尾道市長江町
東京市神田區錦町一丁目
愛媛縣新居郡中萩村
御調郡因島土生村
尾道市久保町
上海
尾道市土堂町
神戸市葺旗塚道六丁目
御調郡三庄村
福山下市
神戸市奥平野筋
御調郡向島
尾道市土堂町
廣島市段原村
尾道市長江町
尾道市久保町
御調郡白江
愛媛縣三濱
廣島市東白島

旧姓阿蘇
旧姓井上
伊藤春江
高田静江
上田静江
宇坪ヒサコ
大本コト
大蔵ハナ
岡セキノ
谷本ワメノ
古谷スエヨ
村上トミ
村田チヨ
繁田チヨ
栗井トクノ
小原満久
榊原満江
末平キヌ
池田芳子
旧姓谷口
旧姓田阪

尾道市久保町
東京女子美術學校
高田郡吉田町
福山町
朝鮮京城御成町
尾道市中濱
尾道市長江町
岡山市上四川町
神石郡仙養村
尾道市久保町
尾道市尾崎町
朝鮮平安北道塔洞古河城金山旧姓三浦
佐賀縣伊万里町
御調郡美郷村
豊田郡瀬戸田町
廣島市段原村
神戸市加納町二丁目

立上ヒサヨ
高田玉子
井上八重子
中川秀子
池田龜
三坂玄子
平岡敏子
日高直子
松浦コマサ
大西タミ
三上ツ子
鶴田フミヨ
村上ノブ
竹之上コチヨ
大泰寺静江
渡邊キヨ
黒木ノブエ

第三回卒業生

現住所

尾道市中濱
尾道市久保町
御調郡因島土生村
尾道市十四日町
尾道市久保町

旧姓池尻
三坂カメ
稻田ノブ
小川ノブ
大山ナチ
柏原菊代

比婆郡東城町
沼隈郡松永町
尾道市久保町
尾道市土堂町
尾道市十四日町
尾道市久保町
仙臺市
沼隈郡松永町
尾道市海岸通
山口縣山口町
尾道市土堂町
吳市東港町
廣島市段原村比治山
御調郡三原町
尾道市久保町
賀茂郡造賀村
青品郡大正村
尾道市久保町
御調郡三原町
尾道市土堂町
尾道市十四日町
尾道市土堂町
尾道市土堂町
東京共立女子職業學校
尾道市土堂町

旧姓栗原
栗原 生 子
兒 玉 喜 代 子
小 山 喜 代 子
佐 藤 キ ミ ヨ
江 川 ヒ サ コ
壽 美 谷 タ カ コ
田 中 竹 代
田 阪 幾 世
池 田 壽 子
佐 々 木 松 代
德 山 ル イ
永 田 悦
日 山 キ ヌ エ
山 崎 シ ケ ル
多 田 憲 代
納 見 チ ト セ
野 村 禧 子
林 村 禧 子
長 尾 千 代
原 田 マ サ ノ
政 池 つ な
松 森 ツ ナ

尾道市土堂町
尾道市久保町
朝鮮京城水川坊覆審法院官舎
尾道市土堂町
尾道市久保町
尾道市土堂町
沼隈郡高須村
東京神田錦町三丁目八番地
双三郎向江田尋常小學校
廣島市新川場町
尾道市土堂町
御調郡八幡村
備前御津郡石井村
御調郡吉和村
尾道市久保町
大阪市西區幸町五丁目中島内
備中玉島町水島
東京女子高等師範學校
仙臺市花里院通八一
御調郡中庄村
御調郡糸崎
尾道市中瀨

第四回卒業生

現住所

正 木 春 子
三 熊 小 里
三 井 雅 子
村 上 下 枝
村 上 ヤ ス
村 上 ヲ ル
村 上 ハ ル
増 田 由 巳 子
山 本 ツ 子
若 山 帛 世
青 野 セ ツ
市 川 コ ヲ サ
永 原 ヲ 子
伊 藤 ミ 子
今 井 清 子
植 田 キ ク
宮 本 エ ン
小 川 春 江
岡 田 ト ヲ
杉 原 ミ ュ キ
兼 森 シ ケ ヲ
村 上 ミ ツ エ
旧姓熊丸
旧姓井手
旧姓吉池
旧姓山科
旧姓竹本

東京市日本橋區濱町三丁目葛蒲河岸

尾道市土堂町

尾道市久保町

東京小石川日本女子大學玉成寮

御調郡向島

尾道市御所町

御調郡栗原村

御調郡栗原村

東京女子高等師範學校

尾道市久保町

御調郡向島西村

尾道市土堂町

尾道市十四日町

尾道市十四日町

御調郡八幡村

御調郡向島十番濱

東京市

廣島市松川町

尾道市十四日町

朝鮮京城覆審院官舎

御調郡木庄村

御調郡因島

尾道市土堂町

尾道市久保町

旧姓藤原

死亡

村	村	宮	宮	三	三	松	森	藤	福	久	林	野	新	中	永	立	武	高	末	下	佐	小	小	見
上	上	地	地	次	井	井	安	井	原	田	村	村	田	司	井	神	田	垣	田	川	々	松	四	玉
ミ	カ	清	清	イ	敏	エ	フ	静	あ	チ	ア	ヒ	ヒ	カ	恒	タ	マ	シ	ヒ	小	木	山	ハ	ヨ
子	ヤ	亮	子	子	子	イ	ノ	子	代	サ	良	サ	サ	エ	子	子	ヨ	ノ	ノ	雪	野	セ	ル	シ

東京共立職業學校

大阪西區阿波座三番町

東京府下千田谷九五

旧姓吉岡

死亡

第五回卒業生

現住所

尾道市十四日町

御調郡向島西村

御調郡向島西村

御調郡向島西村

尾道市土堂町

尾道市十四日町

御調郡美郷村

御調郡三庄村

東京市日本橋區濱町三丁目

尾道市十四日町

御調郡向島西村

尾道市長江町

御調郡向島東村

尾道市久保町

尾道市土堂町

伊豫新居郡角野村

尾道市十四日町

尾道市土堂町

旧姓惠谷

上	惠	橋	井	稻	惠	入	井	井	井	泉	石	石	池	安	安	安	阿	堀	木	毛	村
野	谷	本	上	田	谷	江	上	上	出	原	梶	梶	田	保	保	蘇	蘇	内	森	利	上
ユ	春	ハ	安	フ	シ	松	ヒ	タ	テ	タ	イ	イ	澤	コ	ク	シ	シ	喜	喜	エ	ヨ
キ	子	ナ	子	サ	ノ	惠	ヨ	キ	ツ	隆	エ	ソ	子	ト	ノ	子	子	美	美	キ	シ
エ		エ																好	代	ノ	

沼隈郡柳津村
尾道市十四日町
三原師範學校
京都府立高等女學校
尾道市西御所町
御調郡吉和村
東京市日本橋區大傳馬町
尾道市大宮町
尾道市土堂町
御調郡向島東村
尾道市久保町
尾道市久保町
尾道市久保町
豐田郡本郷村
尾道市久保町
沼隈郡田島村
尾道市土堂町
御調郡向島西村
熊本市細工町三十目
三原師範學校
兵庫縣伊南郡伊保村
尾道市久保町
沼隈郡高須村
尾道市十四日町
沼隈郡高須村

旧姓相良

岡田 カツコ
大山 芳枝
惠谷 ハツヨ
岡田 ヨシエ
大部 松枝
川本 ふくよ
金丸 君子
加藤 静枝
金子 緑子
神田 ハルコ
吉川 メト
楠生 フミ
鞍掛 静子
黒川 美佐代
小林 イチ
河野 キエ
小西 ヌヅ
佐伯 清子
杉原 エツ
清水 キヌヨ
砂川 千代鶴
松本 愛
杉谷 シズエ
大谷 シズエ
高橋 トシエ

岡山縣和氣郡熊山村
尾道市久保町
御調郡美郷村
尾道市十四日町
御調郡向島西村
尾道市土堂町
尾道市西御所町
沼隈郡賴町
芦品郡栗生村
豐田郡本郷村
御調郡美郷村
御調郡向島西村
三原師範學校
御調郡三庄村
尾道市土堂町
尾道市十四日町
尾道市十四日町
尾道市十四日町
尾道市土堂町
尾道市久保町
愛媛縣越智郡関前村
尾道市長江町
尾道市久保町
尾道市久保町
御調郡西野村

武本 カメヨ
田中 喜久恵
高橋 春子
瀧迫 芳子
高本 福子
塚本 福子
土井 ナホ
徳永 ユキエ
徳毛 ミサホ
永井 チサト
西永 ミサチ
林 ヒサチ
平原 歌子
平野 たまね
藤田 セイ
藤田 繁子
福島 ツギ
松本 智恵
正木 フサ
松本 千枝
村上 美津枝
村上 ヒサノ
八杉 イソヨ
山下 季子
山根 トシ子

御調郡向島東村
御調郡美郷村
御調郡因島外ノ浦八三〇
尾道市土堂町
尾道市土堂町
御調郡向島立花村
御調郡向島東村
御調郡三原町
御調郡向島西村

旧姓吉田
旧姓渡里

山	行	吉	米	吉	吉	吉	小	渡
口	友	田	田	本	本	光	池	里
ア	房	キ	サ	ナ	ナ	テ	真	標
サ	子	ク	ダ	ミ	ミ	ル	子	子
コ		エ	艶	コ	コ	エ		

大正五年七月十二日印刷
大正五年七月十六日發行

（非賣品）

編輯兼發行者

岡

田

タ

ヅ

廣島縣尾道市立
高等女學校內

印刷者 山

野

佐

一

廣島縣尾道市十四日町
百九番屋敷

印刷所

廣島縣尾道市十四日町
百九番屋敷

三

秀

舍

發行所

廣島縣尾道市久保町
尾道市立高等女學校

校

友

會

